
紺碧の海 金色の砂漠

御堂志生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紺碧の海 金色の砂漠

【Nコード】

N6540U

【作者名】

御堂志生

【あらすじ】

「琥珀色の誘惑&アジアン・プリンスのコラボレーション」／公務員の父を持つ月瀬舞の前に、いきなり現れた王子様がシーク・ミシユアル。婚約者を名乗る彼は、舞を砂漠の国クアルン王国に連れ去り、花嫁にした。色々あったものの2人は恋に落ち、舞は弱冠20歳で王妃となった。日本での挙式・披露宴も終え……2人はアジア最東端の国、アズウォルド王国をハネムーンの地を選ぶ。アズウォルドもクアルンと同じ産油国。国王たちは面識があり、なにやら思惑もあるらしく……。――2組のロイヤルカップルが送る、海

と砂漠のロマンス！（サイトで先行連載中の作品です）

(1) 恋のパラダイス(前書き)

★本作は「琥珀色の誘惑」「アジアン・プリンス」のコラボ番外編となります。

★複雑なストーリーではありませんので、こちらだけでもご覧いただけると思いますが：設定や人物描写等、端折っている部分がありますのでご了解下さい。

★人物や国名・団体・施設などの名称は、全て架空のものです。実在のものとは一切関係ございません。

(1) 恋のパラダイス

透き通るような青い海、どこまでも続く白い砂浜、写真で見ただけの樂園パラダイスが眼下に広がる。

「アル！ 見て見てっ。海がある、海が！ 凄いよ。ビーチがあって人が泳いでるっ！」

舞はおよそ一国の王妃とは思えぬ脳天気さで、はしゃいだ声を上げた。

「舞、海に囲まれた島国で育ったのであろう？ 何がそんなに嬉しいのだ」

ミシユアル国王は専用席に腰掛けたまま、隣の席で窓に張り付く新妻を不思議そうな面持ちで見ていた。

確かに日本は島国だ。海に面していない県のほうが少ない。多くの子供が親に連れられ、一度は海水浴を体験するだろう。だが、舞にはその経験がなかった。海と言えば潮干狩りが精々で、可愛い水着を着て海の家でヤキソバを食べたり、ビーチで男の子にナンパされたり……。

「……したかったのか？」

舞が嬉々として語る？ 憧れのビーチサイド物語？をミシユアル国王は不機嫌そうな表情で聞いている。

「まあ、水着とか自信なかったから、特には……。でも、アズウォルドのバカンスなんて夢だったなあ」

二人が向かっているのは、東京から飛行機で五時間、日本のお隣

にあるアズワールド王国だった。

珊瑚礁の海に囲まれた十二個の島々からなる国。十八世紀に王国として独立して以来、アズル王室が統治している。日本とは基本的に仲が良くて、王族はもちろんのこと国民の半数以上に日本人の血が流れているという。

カトリック国だが独自の国教会を作っていて、異教徒……とくに日本人観光客のためにウェディング専用教会まである。二年前に結婚した現国王夫妻にちなんで、ビーチウェディングが大人気らしい。日本のテレビ番組で特集していたくらいだ。

（青い瞳のプリンスなんて、ホント白馬にピッタリよね……ゼツタイに言えないけど）

アズワールド王国大使館発行のパンフレットを見ながら舞はため息を吐く。

現在のレイ国王は三十二歳でミシユアル国王より四歳年上だ。逞しいワイルド系のミシユアル国王に比べ、写真のレイ国王は頬や顎、肩のラインもすっきりしていて小柄に見える。

日本の皇族の方々を前にした時、舞は敬意が先に立ちひたすら緊張するだけだった。しかし隣国のプリンス・プリンセスとなると、どうしてもミィハー気分が前に出てしまう。万に一つも「きゃーカッコいい！」なんて言おうものなら、夫婦喧嘩は必須だろう。

「浮かれるのは結構だが、機外に出る時はアバヤ着用を忘れるな」

「えーっ!？」 南国でもアバヤなの？ 暑さの質が違うんじゃない？」

驚く舞にミシユアル国王は当然のように言った。

「南国だろうが北極だろうが、我がクアルンの王妃がアバヤなしで人前に入るものではない。いずれ変えて行くにしても、今は駄目だ。私たちの間に男子が生まれ、お前が妃としての役目を果たした後に

なる」

何気なしに言った言葉なのだろうが、舞にすればカチンとくる。

「じゃあ、男の子を産めなかったら、わたしは役目を果たしたことになるわけ？」

「私の子を産むのが不満か？」

「そんなこと言っていないでしょっ！」

「では問題ない。近い将来お前は母親となり、子供たちの中には後継者となる男子がいるだろう」

ミシユアル国王の言う理屈は正しい。舞は夫を愛しているし、子供だってたくさん欲しい。彼が望むなら、男の子だって生んであげたいと思う。

問題は言い方なのだ。

舞は不愉快そうな顔をして黙り込み、座席に深く腰掛けた。すると、ミシユアル国王も何事か察したのだろう。アームレストの上に置かれた舞の手に自分の手を重ね、ギュッと握り締めた。

「また私は言い方を誤ったらしいな。……息子は欲しいが、娘であっても変わらず愛するだろう。もし仮に、私たちにアッラーの恵みがなくとも、妻はお前だけだ。誓いは生涯変わらぬ。安心いたせ」

舞の心からアズルブルーの海が消え去り、琥珀色一色に輝いた。

重ねた手の上にさらに舞が手を置こうとした時、ミシユアル国王が手首を掴んだ。そのまま軽く引き寄せ、くちづける。何度キスしても、そのたびに胸がドキドキする。

「ア、アル……待って、あの」

「何を待つのだ？ 着陸まで、私に逆らうことは許さぬ。王命だ」

唇を重ねるキスから、もっと深く舌先を絡めるキスへと進みかけ

たその時――。

『陛下っ！　なんたることです、嘆かわしい。クアルン国王たるものが人目も憚らず接吻など』

『うるさいぞ、ダーウード。ここは国外、クアルンの法により裁かれることはない』

『しかし、国王ともあろうものが』

『判った。下がれ』

七十歳近いと思われる側近、ダーウードは渋々下がった。

彼は前国王の側近を務めていた。前国王は『若い側近らが手本とするように』との心遣いで、ダーウードをミシユアル国王の側近につけたのだ。父親の心遣い無碍にも出来ず、ミシユアル国王は『ありがたく』受け入れたのである。

日本滞在中に途中から加わったダーウード・ビン・アッドウーヒはとにかく仕来りにうるさい。

舞が少しでもアバヤを忘れてホテルの廊下に出たものなら、

『王妃たるものがっ！』

と、目を剥いて怒鳴る。

舞にすれば、厄介な奴がついてきたな、というのが本音だ。今回、ターヒルはシャムスとの結婚式を終え、クアルンに残ったままだし、ヤイーシュはまだ日本に仕事があるとかで東京に残った。

お年寄りは大事にしよう、と教育された舞である。お爺さんと呼ぶような年齢のダーウードに文句は言い難い。というより、彼は頑なに外国語を否定し、アラビア語しか話さない。そのため、今の舞のアラビア語スキルでは話にならないのである。

立派な白い髭をたくわえたダーウードには、ミシユアル国王も苦手意識を持っているようだ。命令にいつもの威圧感がなく、どこか

弱腰である。

舞は再び窓から下を見ようとするが……。

アームレストの影でミシユアル国王が舞の手を握った。五本の指をしっかりと絡め、ちよつと？イケナイコト？をしている気分になる。

「……お楽しみは着いてからだ」

キラッと光った瞳の輝きに、ビーチサイドでの色々を想像して頬が緩みそうになる舞だった。

(1) 恋のパラダイス(後書き)

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

サイトでは前半部分(紺碧の海編)まで終了しています。

先が気になる方はぜひ、サイトまでお越し下さいませ(^^)／

(2) 噂のプレイボーイ

——アツ・サラーム アライクム——

アラビア語の挨拶が大きな横断幕に書かれて、空港ロビーに掲げられていた。

クアルンとアズウォルドの国旗がそこかしこに下がり、ロープの向こうでは国民たちが小さめの国旗を振っている。その中には舞のことを意識してか、日本の国旗もあった。

出迎えにはなんと国王夫妻が空港まで来てくれたのだ。

青い瞳が印象的なレイ国王は、見るからに優しそうで落ち着いた大人の男性である。ミシユアル国王の髪が焦茶でビター風味のチョコレート色なら、レイ国王の風に靡く柔らかそうな髪は甘いミルクチョコレートの色をしていた。

パンフレットで見るより背も高いし体格もいい。だが、彼の前に立ち握手を交わすミシユアル国王と見比べると……。

(やっぱりアルのほうがカッコいい)

舞はニカブに隠れて口元を綻ばせた。

すると、背後から女官がスツと歩み寄り『アーイシャ様、陛下のお呼びです』。舞はハツとして顔をあげ、ミシユアル国王の傍まで行くのだった。

『妃のアーイシャである。二週間の滞在に許可を与えてくれたレイ国王に対して、感謝を述べたいと言っている』

(えっ？　そ、そんなこと言った？)

何だかよく判らないが、感謝を述べないといけないらしい。

舞はバクバクする心臓を宥めつつ、レイ国王の前で手を合わせて一言だけ口にする。

『ありがとうございます』

他に言い様がないし、正確なアラビア語で話せるか自信がない。聞き取りはだいぶ出来るようになったが、話すのはまだまだ危険だ。書くとなると……頭が痛くなった。

『ようこそ、アズウォルドへ。私が国王のレイ・ジョセフ・ウィリアム・アズルです。彼女は私の妻でクリスティーナ。お二人の滞在が両国にとって実り大きいものであることを願っています』

それは驚くほど綺麗なアラビア語だった。

青い瞳と言えばヤイーシュがそうだが、レイ国王はまた違ったブルーである。柔らかい物腰と口調で、おそらく彼に嫌悪感を感じる人間などいないのではなからうか。

そう言えば……舞が高校生の頃、隣国のプレイボーイ王子？アジアン・プリンス？の異名をチラホラと耳にした。日本人婚約者が若いのをいいことに、世界中にガールフレンドがいるとかどうか。

(アルと違って絶対に片手じゃ足りなさそう……)

舞はそんな感想を抱きつつ、『あ、ありがとうございます』。馬鹿の一つ覚えのように、同じ言葉を繰り返しただった。

「はじめまして。アラビア語は話せませんが、日本語は話せます。私の日本語はおかしいですか？」

なんとクリスティーナは舞に日本語で声を掛けてくれた！

アメリカ人の彼女はたぶん英語だろう、と思っていたので一瞬返答に詰まり……。

「いえっ！　とんでもありません。とっても綺麗な日本語で……」

思わず舞も日本語で返事をしてしまい、ハッと口元を押さえる。

ミシユアル国王は少し頭を抱える素振りをし、ダーウッドは舞を睨みつけていた。

（ま、まずい……王室外交でアラビア語以外を喋っちゃった）

どうやって取り繕ったらいいいのか必死で考えるが、舞の頭の中は真っ白だ。両国のスタッフもこういう王妃プリンセスの扱いには慣れてないらしく、みんな黙り込んでいる。

そこをフォローしてくれたのはレイ国王だった。

「それは良かった。妻のために日本語で返事をしてくれて、私からも礼を言います」

今度は流れるような日本語である。このレイ国王は一体何ヶ国語が話せるのだろう。

舞がボーッと見つめていると、ミシユアル国王がつかつかと歩み寄り、

「確かに、あなた方の日本語はとても美しい。アーイシャ、アズウオールド滞在中は日本語の発言を許可する」

レイ国王に向ける妻の熱い視線を遮るように立ち、そう宣言した。

「あ……りがとうございます」

結局、日本語でも同じ言葉しか口に出来ない舞であつた。

くくくくくくくくくく

——首都トレイドウィンドがあるアズワールド本島は、日本の岩手県と同じくらいの面積があります。

大使館のパンフレットに書いてあつた文章を頭の中で思い浮かべる。

空港は海上にあり、王室専用船で本島まで渡るのだという。船の付けられた栈橋まで歩いて行くと、乗船口の横に英語と日本語で注意書きがあつた。

？許可された時間帯以外の飛び込みを禁止します。特に船舶の着岸時にはスクリーンに巻き込まれる危険があります。係員の制止に従わなかった者は、逮捕されますのでご注意下さい？

「あの、クリスティーナ様……この看板は何ですか？」

こんな所で飛び込む人間などいるはずがない。にも関わらず？許可された時間帯以外？ということは、そういう時間帯がある、ということになる。

舞の質問にクリスティーナは陶器のように繊細な肌を薄っすらと赤らめた。

キラキラ光る金髪が肩から背中に波打っている。緑の強いヘーゼルの瞳はまさに人形ドールのようだ。身長は舞より少し低いくらいだが、腰回りが細く、実に女性的な体型をしている。

「ええ、その実は陛下が……飛び込まれたの。それでね、真似をす

る方が出てしまつて……」

「は？ レイ国王陛下が……飛び込まれた？」

それは舞にとって、聞いてビックリの新情報だった。

二年前、誤つてフェリーの甲板から落ちたクリスティーナを助けようと、なんとレイ国王自ら海に飛び込んだのだという。見かけと違つて、いざとなつたらかなり無茶をするプリンスだ。しかも、彼女を救つてそのまま海中でプロポーズ！ 衆人環視の中、ラブシーンまで演じたというから驚きだ。

（いいなあ……なんてロマンティック！）

と、思つたのは舞だけではなかつた。

しばらくして、若いカップルが国王夫妻の真似をする、というケースが相次いだ。それもなぜか、栈橋から男性が海に飛び込みポーズ。OKだったら女性も後を追つて飛び込み、キスするというもの。危険だからと制止しても、それを振り切つて飛び込むのが愛情の深さ、なんていう噂も出て、外国人観光客にまでブームが広がつたという。

「元はと言えば私たちに責任のあることですし。でも、怪我人が出てしまつて……」

飛び込んだ男性がカナヅチで溺れかけたというから洒落にならない。

「命には別状なかったのだけど、被害者が出てからでは遅い、と陛下が違反者の逮捕を命じられたのです。その代わり……」

レイ国王は国民の前で迂闊な行動を謝罪し、今後は厳しい対応を取ると宣言した。

テレビの特集で見た覚えがないのは、そのせいかも知れない。

但し、丸つきり禁止にするのではなく、毎月一回エントリーを受け付けた上で？プロポーズタイム？を設けたのだ。そこでめでたく婚約が成立すると、国籍問わず国内の好きなビーチでハネムーンを過ごせる宿泊券がプレゼント！　　というのだから、なんて太っ腹な国王だろう。

「国力に比べて国民数が少ないから、結婚・出産を奨励するいいきっかけになりました」

そう言ってクリスティーナはミシユアル国王と話す夫の横顔をチラリと見た。ヘーゼルの瞳が少し翳り、舞は少しだけ違和感を覚えたのだった。

(3) 恋の病にかかったら／R (前書き)

★性描写があります、R15でお願いします。

(3) 恋の病にかかったら／R

「三回、十秒以上続けてレイを見ていたな」

王宮正殿の最上階にある国賓室に通され、二人きりになった途端、ミシユアル国王がぶちぶちと言いだした。

「だって……ほら、海のように深い青色の瞳なんて珍しかったんだもの」

舞は必死で考えながら答える。レイ陛下って優そうで大人の男性って感じよねえ、なんて言おうものなら……考えたくない。

「ねえねえ、コレって地下水なんだって！ 凄いよねえ、部屋の中で噴水なんて。しかも、ここ四階だよ」

舞は話を変えるべく、部屋の中央にある噴水に近寄った。

地下水をポンプで汲み上げ、循環させて建物全体を冷却させているらしい。階下には廊下の中央に小川が流れているとか……。他の場所は駄目だが、この噴水の水は飲んでも構わない、案内してくれた王宮の女官長がニコニコしながら説明してくれた。

そっと手を水の中に差し入れる。地下水というだけ結構冷たい。舞は両手で掬い、口につけた。

「美味しい！ なんとかのおいしい水みたい！」

ミシユアル国王もこれ以上文句を言っても無駄と思ったのか、

「ほう、だったら私にも飲ませて貰おうか」

そんなことを言いつつ舞の手に口を付けてきた。そんなにたくさん掬える訳はないので、ほとんど残ってはいない。水滴を舌先で舐め取ると「少ししょっぱいな」などと呟く。

「あ、当たり前でしょ。そんなの自分で……」

いつの間に着替えたのか、スーツ姿からいつもの白いトープとグ

トラ姿に変わっていた。舞はヒジャブは取ったもののアバヤは身につけたままだ。彼はこれから公務で外に出る。でも舞は留守番であった。

さっさとアバヤも脱いでしまおう、舞がそう思った時だった。

グッと腰を掴まれ覆い被さるようにキスされる。それはかなり激しく情熱的なキスだった。舞がレイ国王に見惚れていたことを、まだ怒ってるらしい。嫉妬全開で舞に息をする暇も与えない。

しかも……どうやらキスだけで済みそうな気配ではなかった。

「ね、アル……今から公務でしょ？ 時間ないんじゃない？」

「二十分ある」

「外は……明るいし……あ、ん」

唇が離れた瞬間、ミシユアル国王は舞の手を噴水近くの円形テーブルにつかせた。彼は背後に立つと舞のアバヤをたくし上げ、太腿の内側をなぞる。舞が声を上げたのはこの時だ。

「舞、ショートパンツは穿くと言ったであろう」

少しムツとした声でミシユアル国王は言う。ズボンの類を嫌がる彼のため、舞はスカートを穿くことが多くなった。でも、到着後はすぐに独りになるだろうからと思い、アバヤを身につける時に着替えたのだ。まさか、二十分空いただけでこんなことを始めるとは思わない。

ボタンとファスナーを外され、ストンと足元に麻のショートパンツが落ちた。

「きゃっ！」

急ぎ立てて体を開かせ、とりあえず彼自身は満足したものの……。立ったまま背後から、など初めてのことだった。舞は声もなくグツタリしていた。たった一度の強引な行為で舞が夫婦の営みを拒絶するようにでもなれば、彼にすれば大打撃だ。

（やっぱり抑えるべきだったか……。いや、しかし……）

ミシユアルの隣でコホンと小さな咳払いが聞こえた。

彼はハツとして顔を上げる。すると、特別会議場に集められた？アズウォルド海底油田事業？に関わる約三十名の人間が、ジツと彼を見つめていた。その中には、この国に大使館を置く石油輸出機^{オベッ}構の加盟国大使もいる。

アズウォルドはオベックの加盟候補国だ。アズウォルド側はそれを望んでいたが、加盟国の中には新規の加盟を認めたくない国も少なくない。彼らは皆、アズウォルドに脅威を抱き、主導権を握られることを恐れていた。

そしてクアルンは、石油の埋蔵量・採掘量ともに世界一であった。当然、オベックの加盟国においてリーダー的地位にある。

レイが旧知の仲であるミシユアルを自国に招いた理由の一つはそれだ。

トレイドウィンドのビジネスタウンにある国際コンベンションセンター。彼らは今、その会議場にいた。

（しまった……。私としたことが）

彼は横柄な態度を崩さぬまま、レイと同じように咳払いをする。そして、もう一度説明を求めたのだった。

『珍しいことだ。シーク・ミシユアルが女性に呆けるとは』

コンベンションセンター内の特別室に入り、国王同士の語らいと
いうことで人払いがされた。

すると、途端にレイが笑いながら年下の旧友を揶揄する。

『失礼な言い草だな。私は呆けてなどおらん！』

レイは含み笑いをしながら、コーヒーポットからカップに黒い液体を注ぎ込む。

どうやらこの国のコーヒーはセルフサービスらしい。国王に至る
まで自分で注ぐというのだから、徹底していると言うべきか。

『給仕くらいつけてはどうだ？ とても国王の仕事とは思えんな』

余計なこととは思いつつ、つつい口に出してしまう。

一方、レイは変わらない笑顔で、不遜な友人の前にコーヒーカップを置いた。

『大した仕事ではないさ。妻と一緒に料理を作ることもある。君には考えられないだろうが、この国では普通のことだ』

その言葉に、ミシユアルは金色の髪をした美しい王妃の姿を思い出した。

確かに、華やかで人目を惹く女性には違いない。だが残念なことに、ミシユアルの記憶の中には十年前の記事が残っていた。それも、彼女の夫以外が目にするべきでない写真と共に……。

(4) 失われた真実

アズウォールド王妃クリスティーナは、十六歳の時、独りの男に拉致監禁されたのである。

レイプはされなかったものの、全裸の写真を撮られ……最悪なことにそれがインターネットで世界中に広まってしまった。当然だが彼女に罪はない。だがクアルンの基準で言えば、彼女の純潔は疑われ花嫁となる資格はない、と判断されるだろう。

その女性をわざわざ妃にしたレイの心理は、ミシユアルには理解し難いものであった。

『我が国ではありえぬことだな。王も王妃も厨房には立たん』

舞は何やらごちゃごちゃしているようだが、気付かぬ振りをするのが精一杯だ。年寄りに見つかると『王妃たるものが』と言い出すに決まっていた。

「それはともかく、シーク・ミシユアル。ムスリムの戒律でティナを良く思っていないことは知ってるが、彼女は我が国の王妃だ。相応の敬意を払ってくれ。エアポートの時のように、無視することは私が認めない」

不意に英語に戻すと、彼は厳しい口調でミシユアルに警告を発した。

空港ではクリスティーナから英語で挨拶を受けた。だが、彼女をよく思っていないミシユアルは、そのまま言葉を返さなかった。通訳がオロオロしていたことも知っている。舞は気付かなかったようだが、他のクアルン側の人間は当然のこととして受け止めていたよ

うだ。

『婚約者を裏切る行為は君らしくない。それに……見たものを見なかったことにするのは、非常に難しい』

それは十年前の件を仄めかした返事だった。

ミシユアルとて王の立場で譲るべきことは心得ている。だが、最初から容認するのは彼のムスリムとしての感情が許さなかった。

「言ったはずだ。婚約は最初から形式だけだった、と。日本との問題は円満に解決している。他国の君主が口を挟む問題ではない。そして……君が目にしたものは、次にティナと会うまでに忘れるんだ」

『……無茶を言うな』

『努力しろ。君なら出来るよ——シーク・ミシユアル』

口元は微笑みを浮かべているが、アズル・ブルーの瞳が彼を睨んでいた。

今回のアズウォルド滞在はレイから声を掛けられたものだ。しかし、こちらにとっても渡りに船であったことは事実である。最悪の場合、今後、様々な頼みごとをしなければならぬ身となることも……。

ミシユアルは薄いアメリカンコーヒーに顔を顰めつつ、『わかったナアム』と答えた。

くくくくくくくくくく

「えっと……この度はお招きいただき、光栄に存じ上げます」

王宮内では堅苦しくなるから、と王宮の後方にあるセラドン宮殿に舞は招かれていた。

招いてくれたのはクリスティーナ王妃。そこは小高い山の中腹辺りに位置していた。名前を聞いた時、「怪獣の名前？」と思った舞だが……。よくよく聞くと、建物全体が灰色を帯びた青色、上品な青磁色セラドンに見えることから宮殿の名前になったそうだ。青磁と言われた途端、もの凄く高価な建物に見える、と素直な感想を抱く舞だった。

「お疲れのところ、と思いましたが、到着早々おひとり寂しいのではないかと思って……」

明るい陽射しに満たされたりビングに通され、舞はソファに腰掛ける。

すると、入ってきたメイドがガラステーブルにコースターを敷き、その上に大きなグラスを乗せた。グラスにはたくさんの氷と薄茶色の液体が入っている。「ムギチャでございます」と言われ、舞は感激する。

「恐れ入ります。お心遣い、たいへんありがたく感謝もうし……もうす？ 感謝たてまつり……アレ？」

（駄目だ……日本語も危ういなんて、わたしって本気で馬鹿なんじゃないのっ）

プリンセスと名のつく女性と親しく語らうなんて、普通ではありえない事態だ。しかも、日本人特有のコンプレックスがあるのか、金髪ブロードにはなぜか萎縮してしまう。舞はクアルン王宮以上の緊張を感じていた。

そもそも目上といえば、親戚の叔父さん叔母さんであったり、先

生と呼ばれる人たちであったり、精々その程度だろう。舞が本気で落ち込み始めた時、クリスティーナが口を開いた。

「そんなに堅くならないで。普通にお話しましょう？ それとも、イスラムの教義で駄目なのかしら？」

「あ、いえ、そんなことは。あの……普通でも失礼じゃないですか？」

舞が恐る恐る尋ねると、

「気にしないで、私も結婚するまではただの図書館司書だったのよ」
クリスティーナはにっこりと微笑む。

「クリスティーナ様にそう言って頂けると助かります」

「ティナと呼んで下さい。私もマイって呼ぶわ。構わない？ シーク・ミシユアルのお許しを頂かないと駄目なのかしら？」

クアルン国内ではないし、二人とも王妃なのだから敬称なしでも文句は言わないだろう。

舞はそう答えたが、ティナは少し悲しそうな目をした。

「でも、ミシユアル陛下は私をお認めじゃないようだから……」

——舞がティナの事件を聞いたのはこの時が初めてだった。

事件が起こった時、舞は十歳くらいだ。しかも海外の事件、表向きはティナの父親が握りつぶした事件なので、舞の耳に入るはずがない。

「そんなの！ ティナのせいじゃないでしょう？ アルが認める認めないってものじゃ」

しかし、あの純潔至上主義の頑固者である。
イスラムの教義とクアルンの法律から言えば、犯人は確実に首を

刎ねられるだろう。と同時に、女性の名誉も地に落ちる。

クアルンの法律では同意の下でなくても、処女を奪われたらその相手と結婚することになるのだ。

男が父親を説き伏せ、夜這いを掛けたら……女性側がどれだけ抵抗しても妻にならざるを得ない。悔しくてもそれが現実であった。純潔を失えば花嫁衣裳を着る資格もなくなる。まともな独身男性には求婚してもらえず、寡婦のような扱いで、人知れず父親の決めた相手の家に送り届けられるという。

こればかりは女性側というより、男性側の意識を変えなければどうにもならない。

意中の女性であっても、親の目を盗んで男性と付き合っていたことが明らかに became した場合、多くの男性は求婚を取り消すのだという。体の関係はない、と言っても同じらしい。疑わしい行動を取っただけで？ふしだら？呼ばわりだ。

それでも愛を貫いたラシード王子のような男性は？クアルンの奇跡？とも言えよう。

ミシユアル国王の場合、舞なら赦す、と口にしたが……こだわりを捨てたと宣言した訳じゃない。

もちろん初めて愛した男性の妻となり、しかも舞の純潔を狂喜乱舞するほど喜んでくれた。舞にしても「アルに捧げて良かった」と思わない訳がない。

その反面、「そこまで気にする？」という気持ちもあった。複雑な乙女心である。

「レイ陛下は……その、何て？」

「何も。ネット上の画像を全て回収するなんて不可能だから……」。

ただ、世界中のマスコミが二度と取り上げないように通達して下さいました。でも、何もなかったと言っても、証拠がある訳じゃないでしょう？ 私だけならいいんだけど……陛下のことが笑われるのが一番辛いんです」

ティナは正面の席から舞の横に座り直した。そして、舞の両手をしっかりと握り……。

「あ……あの？」

「あなたにこの話をしたのは、どうかミシユアル陛下に私の気持ち伝えて頂きたくて。我が国はオペックの加入を希望しています。もし、その話し合いに私の存在が邪魔になるというなら、二度とミシユアル陛下の前には出ません。ですから、どうか……」

ヘーゼルの瞳が涙で揺らめき、それを見た瞬間、舞の胸も熱くなった。

(5) トラブルの達人

安請け合いするつもりはなかった。

舞にしても、あのミシユアル国王の考えを変えさせるなんて、簡単には出来ないと判っている。でも、ティナは相当悩んでいるように見えた。彼女の思い詰めた表情を見ると、一応話してみます、と舞は答えたのだった。

それにじっくり考えてみれば、ソレとコレは別のような気がする。

(自分の花嫁を選ぶわけじゃないんだもん……さすがのアルも一緒にはしないんじゃないかなあ)

舞が明るく言うのと、「でも、エアポートではお声も掛けて頂けなかったから」ティナは俯き、悲しそうに微笑む。

心の中で持ち上げたミシユアル国王の評価が、あっという間に底まで落ちた。

(ホント、唐変木でわからずやなんだからっ！)

思えばさっきの行為も身勝手すぎる！

レイ国王に視線を向けたというだけで、ヤキモチを妬いていきなり襲い掛かってくるなんて……。そりゃちょっとはドキドキしたけれど、でも到着早々あんな真似をする必要などなかったと思う。どうせなら夜になってからゆっくりと……。いや、そういう問題ではなく。

彼にとっては正しいことをしているつもりなのかも知れない。でも、その言動によって傷つく人間もいるのだ。宗教が違うから、国王だから、で許されるのは何かがおかしい。

舞が正義感に燃え始めた時、？ムギチャ？を出してくれた女性とは別のメイドがやって来た。見た目は日本人のようで、舞より若く思える。彼女は緊張した面持ちでトレイを抱え、温かいカフェオレをテーブルに置いた。

「マイの好きな飲み物だと聞きました。間違ってたかったかしら？」

「あ、はい！　実は甘い物大好きなんです」

「私も好きよ。チョコレートも大好き。でも太りやすい体質だから、注意しないと……マイはどう？」

決して太っているとは思えないティナだが、二の腕辺りを気にしながら笑う。

「わたしの場合、元々が細くはないので……」

肉付きというより、舞は骨格がしっかりしていた。無論、付くべき所にはしっかり付いているが、ちよつとしたことで太るという体質ではない。全体的にフワフワしていて女性らしい印象のティナのほうが、脂肪が付きやすいのかも知れない。

二人はトレイドウィンド市内の美味しいケーキ屋さんや、色んな島で取れるフルーツの話に花が咲き、舞は久しぶりにたくさん話した気がした。

シャムスとも日本語で話せるが、うっかりムスリムとは違う考え方を口にしようものなら……最近では遠慮なしに説教されてしまう。義理の姉妹とはいえ、ライラには決して気を許すことは出来ず。日本では桃子と会えたが、会話には聞き耳を立てられ複雑な心境だった。それに政府や国の対応に裏表が見える分、故郷とはいえ寛げる滞在ではなかったのだ。

ティナとは身分の差もなく、彼女も結婚前はアメリカの一市民だったという。それに、アズウォルドに漂う空気はとても自由で、女官や護衛官、一般国民たちからも悪意や敵意が感じられなかった。

セラドン宮殿を後にする時、舞は思っていたことを尋ねてみる。

はじめに通された王宮の国賓室もこのセラドン宮殿でも、舞が見かけるのは女性ばかりだ。王宮敷地内を車で移動する際の運転手も、玄関前に立つ警官も全て女性。

「これって、わたしの為ですよ？ お気遣い頂いて……本当に嬉しいです」

舞はティナに感謝を伝えた。

すると、ティナはクスツと笑い、「手配したのはこちらですけど……」

——アラビア風の歓待は遠慮する。正妃の過ごしやすい環境を整えてやって欲しい。その代わり、我が国の侍従や女官はほとんど同行しない。そちらの国風に従う。

ミシユアル国王がレイ国王に直接話を通したのだという。

帰ったら文句を言ってやろうと思っていた舞だが、ちょっと拗ねるだけにしておこう、と思い直す。ベッドの上で、「ティナのこと無視するなら、アルとは一緒に寝ない！」とか言えば彼はどうするだろうか。行きとは逆に、かなり浮かれた様子で王宮正殿に戻る舞であった。

く*く*く*く*

「王妃様と良い時間をお過ごしになられたようで、私も安心致しました」

王宮の女官長を務め、国賓のお世話係として最高責任者になるの

がこのスザンナ・アライであった。舞の母と同じ年代であろうか、ふくよかな体型で南国を思わせる肌と髪の色をしていた。

「本日のご夕食は、こちらでミシユアル陛下とお二人で取られると聞いております。明日の晩餐会は、妃殿下はご欠席と伺っておりますが……」

スザンナは申し訳なさそうに言う。

でもそれは彼女のせいでも、アズウオルドのせいでもなかった。ミシユアル国王が言ったように、現状では舞がドレスアップして晩餐会に出席するなどありえないのだ。

舞が王子を産み、王族全体から正妃として認められない限り……。

（だったら産んでやろうじゃないの！ 一人二人なんてケチなこと言わずに。五人くらいドーンと！ もういいって言うくらい、王宮をアルのミニチュアで一杯にしてやるんだからっ）

男の子がいいと言うなら、たくさん王子を儲けた上で、子供は性別に関わらず国の宝だ、と宣言してやろう。舞はそう考えていた。方向性はともかく、前向きなのが彼女の長所である。

その時、夕食用のテーブルをセッティングしていたメイドが噴水近くにいた舞に歩み寄り、声を掛けた。その顔は見覚えがある。セラドン宮殿でカフェオレを運んでくれた若い女性だった。

「アーイシャ様！ 私の父は日本人で、私も中学まで日本の学校……聖麗女学院に通っておりました。ご存じないと思われますが、アーイシャ様の一年後輩でミナホ・カリノと申します」

「本当に？ 全然覚えてないわ。ごめんなさいね」

「いえ、とんでもございません。ただ、妃殿下に直接お祝いを申し

上げたくて……ご結婚おめでとうございます」

純真そうな十代の少女が胸の前で両手を組み、ウルウルした眼差
しで舞を見上げている。何となくこそばゆい感じで舞が照れている
と、

「それと今朝のニュースで知りました。ラシード王子殿下のお妃様
がご懐妊とか……おめでとうございます！」

「え……っと、あの」

「次はアーイシャ様ですね。アーイシャ様は日本の誇りです。ぜひ
頑張ってください。おめでたいご報告を心待ちにしております！」

ラシード王子の妃とはライラのことだろう。

砂漠の結婚式から一ヶ月以上が経っている。もし初夜で授かれば、
妊娠が判明しても遅くはない時期だった。舞の場合——終わったば
かりで可能性は皆無だ。ハネムーン中だし、焦る気持ちは全くなか
ったが……。

でも、まさかこんなに早く、ライラが妊娠するなんて思ってもみ
なかった。

「ミス・カリノ！ あなたは仕事もせず何ということ……。すぐ
に下がちなさい！」

呆然と立ち尽くす舞の耳にスザンナの叱責が聞こえた。それはこ
の国独特の英語で、舞にも何となく判る内容だ。アメリカやイギリ
スの英語に比べ、日本人の耳でも聞き分け易い英語の発音であった。

「あ、スザンナ、そんなに怒らないで。わたしは別に」

舞は日本語で声を掛ける。

するとスザンナもパッと日本語に切り替え、

「いいえ。王宮でご懐妊を話題にするなど……新人に徹底できなか

った私の失態です。本当に申し訳ございません」

体を二つに折るほど深く頭を下げたのだ。

ライラの件はビックリだが、このスザンナの反応にも驚く舞であった。

(6) プリンセスの愁い

「え？ レイ陛下とティナって上手くいってないの？」

ミシユアル国王が戻り、用意されたディナーを終えるなり舞は尋ねた。その答えが予想外のものだったため、舞は思わず声を上げてしまう。

聞きたいことはたくさんあった。

しかし、とりあえずライラの妊娠と女官長スザンナの反応だろう。彼は満足気にアラビアコーヒーを啜りつつ舞の質問に答えてくれた。「ライラの件は黙っていて悪かった。だが、本来こんなに早い時期に発表などありえないのだ。お前に伝えるのはハネムーンが終わってからで充分だと思っていた」

その件はいい。ちょっと負けたような気はしたけれど、基本的にはおめでたいことだ。妊娠初期は流産の確率も高く、安定期に入ってから発表する、というのは芸能人でもよく聞く話だと思う。それがなんでこんなに早く発表になったのか……。舞も不思議だが特に彼女が悩むほどのことでもなかった。

気になったのは、

「女官長の反応は当然だろうな。国王夫婦は結婚丸二年を過ぎた。特に予防策を取らない場合、一年以内に八割、二年以内に九割の夫婦が妊娠する。彼らは残りの一割ということだ」

ミシユアル国王は何の感情も見せずに淡々と語った。

アズル王室はごく最近、庶子と女性に王位継承権が認められた。それで一気に王族が増えたが、基本的には女系だという。王子の子供は王子・王女となり次世代まで王族の身分が確定している。だが

王女の子供は、男子は？サー？女子は？レディ？の名誉称号を貰い、以降は王族の身分から外れるのだ。

そして問題は、今のアズル王室にいる三人の王子は全員が庶子、ということだった。アサギ島で静養中の前国王は継承権がないので除くとして……。ひとりは七十歳と高齢のリユーク王子、ひとりはレイ国王の一つ年下で異母弟のソーヤ王子、最後のひとりもレイ国王の異母弟で十三歳のアーロン王子である。

このアーロン王子が、今のアズル王室の後継者問題を複雑にしていた。

現在、王位継承権一位はソーヤ王子、二位がアーロン王子だ。しかし、皇太子の地位は空席のままであった。それにはもちろん理由がある。

何とアーロン王子の実母が息子の親権を求めて、レイ国王相手にアメリカで裁判を起こしているのだ。しかも、その実母がリユーク王子の娘というのだから……。王室にとったら一大スキャンダルだろう。

とはいえ、新婚の国王夫妻に子供が生まれたら、王子も王女も関係ない、文句なく継承権一位になる。そうなれば後継者問題は自動的に決着する、と国民の誰もが思っていた。

「それがずっと持ち越されてるんだ……。だから、スザンナもピリピリしてたのね」

舞は得心がいったように頷いた。

「レイは気にするような男ではない。だが、周囲はそう思わないだろう。特に妃の過去に問題があるとなれば……」

口にした瞬間、ミシユアル国王は眉を顰めた。明らかに『しまった』という表情だ。

「ティナの過去に何も問題なんてないでしょう！　ここはクアルンじゃないし、アルの王妃にするわけでもないんだから。外交問題に

発展したらどうするのよ！ 冷静に対応してよねっ」

ミシユアル国王は降参のポーズを取りながら、舞を手招きする。片膝を立てソファにどっかと座り、自分の脚の間に舞を座らせた。

「それはお前の言う通りだ。レイにも注意された。私も自分の立場は心得ている。クリスティーナには礼儀正しく接することを約束する」

全面的に同意され、舞にしたら肩すかしだ。

（なんか不気味なんだけど……何か企んでないよね？）

「これは私の意見ではないことを承知で聞いてくれ。アズウォルドやアメリカのマスコミを中心に、こんな噂が出ているのは確かだ。

——王妃の不妊は、過去の性体験や堕胎が理由ではないか、と」

舞は瞬時に頭に血が昇った。

「何それっ！ 本気で言ってるの？」

「私ではない。断じて私の意見ではない！ そう言ったニュアンスの記事を見たと言っただけだ」

「じゃあ、レイは？ そんなヨタ話を信じて夫婦仲が上手くいったの！？」

思わず、他国の国王を呼び捨てにしてしまった。ミシユアル国王のことは言えない。女官や警備兵の耳に入ったら大問題だ。クアルン王妃としての良識は『他国のことに踏み込んではいけない』と警告を発していた。だが、ティナの姿を思い出すと舞の怒りは納まらない。

アズウォルドがオペックに正式加盟できるように、とティナは泣くように頼んできた。自分の存在がミシユアル国王の機嫌を損ねるようなら、彼の前には出ないとまで言ったのだ。あんなに美人なのに偉そうでもなく、本当のお姉さんになって欲しいくらいである。

今日一日で舞は完璧にティナの味方だった。

「落ち着け。レイは妃を大切に扱っている。だが、王族にとって後継者の問題は避けては通れない道なのだ。レイはすぐ下のソーヤに王位を譲ってもいいと思っっているようだが、国民感情と言うものもある」

ソーヤ王子の母親は日本人で、なんとアズウォルド国民からメチャクチャ嫌われているのだという。それを判っていてソーヤ王子もいまだに独身。彼はレイ国王の結婚当初、国王夫妻に後継者が出来るまで結婚しない、と宣言したとか。ソーヤ王子に悪気はなく、まさか二年経っても授からないとは思わなかったのだらうーとミシユアル国王は説明してくれた。

そして、不妊を一番気にしているのはティナで、ちょっとしたことで過敏に反応するのだという。レイ国王をはじめ王宮の皆がティナに気遣い、結果、夫婦の間がギクシャクしてしまい……。

(うーーん)

誰が悪いとも言えず、舞は胸の中で唸った。

二人とも真面目そうで良いパパとママになりそうなのに……どうして神様って公平じゃないんだろう。成り行きで結婚したラシード王子たちには結婚一ヶ月で子供が授かるし。ラシード王子はまだ二十二歳の大学生だ。ライラを愛する根性だけは認めるが、どんな父親になるのか想像も出来ない。

「舞、クリスティーナを気遣うのはいいが、必要以上に考えぬことだ。私たちにもすぐに授かる。今宵も精一杯努力しようではないか」舞の沈黙をどう捉えたのか、彼はもうスイッチが入ってしまったらしい。

背後からゆっくりと抱き締め、舞の首筋に唇を這わせる。

「アラビアコーヒーの匂いがする……」

「いい加減好きになってはくれぬか。それとも、この状態で私に齒を磨いて来いと言うのか？」

（それはちよつと可哀想かも……）

何と言っても、舞のお尻の下でジャンビアーがウズウズしているのが判る。

「昼間みたいなのはイヤ。ゆっくりキスも出来なかったし、終わった後すぐに一人にされるのって悲しい。なんだか……愛人になった気がした」

舞は気を取り直して、少し拗ねたような甘えた声を出した。

「私はお前に痛い思いをさせたか？」

「痛くはなかったけど、ちよつと怖かった」

「……済まぬ」

ミシユアル国王は謝罪と共に、舞をギュッと抱き締めた。

（こんなに素直になられたら……もう怒れないじゃない）

舞は後ろを振り返り、彼の唇にキスした。

アラビアコーヒーの強い香りがしたけど、それほど嫌じゃない。

「ねえアル、国賓室のベッドって、もの凄く広くて気持ちいいのよ。試してみたくない？」

舞は出来る限り色っぽく笑って見せた。それが魅惑的な微笑みかどうかはともかく、ミシユアル国王には効果テキメンだったらしい。「もちろんだ！早速試そう！」そう言うとき舞を抱きかかえ、ベッドルームに直行したのだった。

(7) 恋は蜜の味／R (前書き)

★性描写があります、R15でお願いします。

(7) 恋は蜜の味／R

わずか二十分の早業とは違い、最上級のスプリング・マットレスを一時間たっぷりと堪能して、舞は全裸のまま横たわっていた。

肌に触れるシーツもサラサラで心地好い。寝返りを打つと少しだけひんやりしていて汗が出ないのだ。

「舞、それほど気に入ったなら、ダリヤの王宮にも同じベッドと寝具一式を揃えよう」

ミシユアル国王は腰に白い布を巻いただけの姿で、冷蔵庫からミネラルウォーターを二本取り出した。一本を開けて飲みながら、もう一本を舞に渡してくれる。

本来、これは傍に控えた女官か妃の仕事だという。国王自ら飲み物を取りに行き、しかも妃に給仕するなどありえない事態だ。はじめは文句を口にしていたミシユアル国王だが、「もうダメ……動けない」舞がそう言って甘えると、いそいそと飲み物を取ってきてくれるようになった。

とはいえ、

「これでは、私もレイと変わらんなどとブツブツ言っている。

舞は上掛けで前を隠しながら、ゆっくりと体を起こしミネラルウォーターを受け取った。瓶は開封しており、？クアルン王国検査済？とアラビア語で印刷されたシールがベタリと貼ってある。それを剥がしながら、

「え？ そんなこと出来るの？ すっごく高いんじゃない……」
そこまで言い掛けて、舞はハツとした。

案の定、ミシユアル国王はこめかみを引き攣らせながら瓶をサイドテーブルに置き、舞の前に座り込んだ。

「それはどういう意味だ？ 確かに今のアズウォルド王国は豊かだが、国力は我がクアルンにはまだまだ及ばぬ！ 私はこれを凌ぐベッドを宮殿に入れてみせるぞ！」

（そ、そんなベッド一つで張り合わなくても……）

拳を握り締め宣言するミシユアル国王を、舞は呆気に取られて見つめていた。

すると、彼女が飲もうとしたミネラルウォーターの瓶を、ミシユアル国王はいきなり取り上げたのだ。

「ちょ……アルってば。判ってるよ。アルのほうが凄いつて。ただ

……わたしの為に無駄遣いしなくてもいいのにつて思っただけで」

「妻の願いを叶えるのは、夫の義務であり喜びだ」

「じゃあ、喉が渴いたから水が飲みたいって願いを邪魔しないで」
舞が少し口を尖らしてそう言うと、ミシユアル国王はニヤリと笑った。

（な、なに？ わたし、なんか変なこと言った？）

「よからう。お前の願いを叶えてやろう」

言うなり、ミシユアル国王は舞から取り上げたミネラルウォーターを口に含んだ。そのまま舞を抱き寄せ、口移しで飲ませようとする。

口づけられた拍子に舞は上掛けから手を離してしまった。冷たいはずの水は少し生温くなっていて、喉越しは微妙かも知れない。だが、端からこぼれ落ちた液体が顎を伝い、舞の露わになった胸に滴

り落ち……。

「おっと。せっかく飲ましてやっているのだぞ。こぼすでない」
舌先でチロチロと啄ばむように、胸の先端を舐め始めた。

「やん！ アル、もう……今、終わったばかりでしょ。ちょっと休ませて。第一、アルだって」

そう簡単に回復してないはず——と思ったのは甘かった。

彼のジャンビーマは腰布を払い落とし、ツヤツヤと光りながらいつでも出陣可能な状態になっている。

「ん？ 私がなんだ？」

（もう、アルってば、絶倫なんだからっ！）

舞が身が持たないと叫びそうになった時、彼の指が上掛けに隠れた彼女の下半身に滑り込んだ。

「ヒャン！ や……アル、まだダメえ」

そこは先ほどの快感からまだ熱が完全に引いていない。十分に潤い、わずかな刺激で簡単に波を呼び込んでしまうのだ。

「駄目ではなからう？ 柔らかく解れていて、私の指が二本も楽に吸い込まれる。内部も深く広がり、指ではないものを待つかのようだ」

そんなことを言いながら、指を入れてクルクル回し始めた。

ミシユアル国王は結婚前、王宮内の後宮に忍び込んで来た時——

『新婚の三ヶ月、昼も夜も私はお前を離さない』

なんてことを口にした。舞は彼の情熱に胸が高鳴ったが……まさかあの時、これが本気だとは思ってもみなかった。

舞が女性の都合でダメな時以外は、それこそ昼も夜も、場合によっては朝でもある。

それが一ヶ月も続くと……。経験ゼロの舞も、自信満々の割に経験片手のミシユアル国王も、夫婦の行為に精神的余裕が出来る。

「アル……やあん、アル、もうダメ」

舞の声音に艶めいた色がつき始める。それを機敏の察したのだろう。彼は指の動きをピタリと止め、

「それほどまでに嫌なら、ここで止めにしよう」

止める気なんか全くないくせに、舞を苛めるのだ。

以前の舞なら、「いいわよ。もう二度としない」となり、意地を張って突っぱねただろう。だが、ソコはソレ、新婚とはいえ夫婦である。ミシユアル国王が舞のツボを心得ているなら、彼女も夫の弱点は知っていた。

『陛下——お願いでございます。どうぞ、わたくしに一夜のお情を……』

ミシユアル国王の胸に縋りつき、少しでも上目遣いでささやく。アラビア語の？おねだり？は効果てきめんで、琥珀色の瞳が一瞬で煌いた。

『よからう。さあ、脚を開き私を受け入れよ』

『ああ……恥ずかしゅうございます』

なんて言いつつ、王のハーレムに入れられた異国の姫君になりきってみる。

『どうだ？ 二度と私から離れぬと誓うなら、最高の喜びを与えてやろう』

『……はい……誓います。陛下のお傍から……離れま……あっ』

ふいにミシユアル国王の動きが速まり……。

「ハーレムごっこはお終いだ！ 舞、私を愛していると言え！」

「……愛してる……大好きよ、アル」

「私もだ。お前を愛している。お前だけだ」

二人はこの時？最高の悦び？を同時に迎えたのだった。

〽*〽*〽*〽*

早々に電気の消えた国賓室を王宮二階の窓から見上げつつ、国王レイ・ジョセフ・ウィリアム・アズルは大きなため息を吐いた。

（祈りの間は用意したが……あの様子ならサラートは絨毯一枚で充分だな）

専用の絨毯で時間がくれば祈りを捧げるミシユアルの姿をレイは思い浮かべる。

初めて彼に会ったのは約十年前、アメリカのワシントンだった。

レイは当時二十二歳、スキップでハーバード大学を卒業し、東京大学大学院に籍を置いていた。公的には摂政皇太子であり、実権は国王と変わらない。

一方、ミシユアルは十八歳の大学生。王位継承順位三位の彼がクアルンの国王になることはない、と思われていた。それどころか、彼は伯父の国王に疎まれており、クアルン王族内で微妙な立場だと知る。アメリカ政府もそれを察し、公賓のミシユアル王子より非公式に訪れていたレイ皇太子との会見を優先させたくらいだ。

レイも当初、ミシユアルに対する態度を決めかねていた。オペックに加盟を希望するならクアルンとの友好関係は非常に重要だ。ミシユアルと交遊を深めることで、クアルン国王の反感を買ったのは摂政として失格だろう。

しかも二人はまるで性格が違った。

当時のレイは国内外の重圧に苦しめられており、自分を律するところとかなり苦勞していた。あの頃のレイにとって、日本人婚約者の存在は重荷にほかならず、可能な限り目を背けていたのだ。

そんなレイにミシユアルは自慢気に言った。

『奇遇だな。私の婚約者も日本人だ。十年後、彼女を妻に迎える日を今から楽しみにしている』

(8) 愛への道のり

それはアラビア語だった。

レイは一度も会ったことのない婚約者を平然と受け入れるミシュアルが不思議でならない。彼は通訳を制すると、直接、アラビア語で尋ねる。

そしてその答えは、予想以上に判り易いものだった。

『私は五年前に彼女を娶るとアッラーに誓った。妻を持つことは男の義務であり名誉だ。あなたは違うのか？』

国策としてカトリックを受け入れたアズウォルド王国。レイも洗礼を受けたカトリック教徒だ。しかし、レイの中に神はいなかった。国難は自力で乗り越えねばならない。誰もがレイに縋り、期待の眼差しを向ける。まるで彼自身がアズウォルドの神であるかのように。レイはその期待に応える為に、幼い少女との婚約を受け入れた。だがそれは、大国の重圧に対する屈服であり、屈辱に等しい。

珍しく、彼の胸に黒い塊が蠢いた。

目の前にいるのは、世界最大の原油大国を笠に着た気楽な身分のプリンス・シーク。アメリカ政府から蔑ろにされても、国家的にはさしたる問題がない程度の……。

『私は次期国王として国民を飢えさせるわけにはいかない。婚約や結婚に個人的感情も名誉も必要ないんだ。王位から遠い君には判らないことかも知れないな』

レイは自分の言葉に驚いていた。

すぐに謝罪を思い浮かべるが……ミシュアルは超然たる態度で言

い返してきたのだ。

『国民を飢えさせぬなど、王たる者の義務だ！ 立場に変わりなく、
試練は常にある。摂政皇太子、プリンス・リージェントその称号をもって行うことが名誉と
思えぬなら、とつと辞めてしまえ！』

ミシユアルの叱声に、双方の側近が気色ばんだ。レイの背後に控えていたサトウ補佐官も青褪めている。一方、ミシユアルの側近は若い者が多く、よほど彼に忠誠を誓っているのか一步も引かない構えだ。

（四歳も年下の人間に説教をされるとは……）

レイは軽く頭を振り、『君の言う通りだ。失言だった。忘れてくれ』そう言ってミシユアルに手を差し出した。

王国を背負って四年、澱みかけたレイの心に王族の誇りを呼び覚ましてくれたのは、砂漠の勇者であった。

だが二年後——この一件があったからこそ、レイはミシユアルに賭けたのである。

開けていた窓とカーテンを閉めながら、レイは八年前のことを思い出していた。

ミシユアルは当時の王太子殺害容疑を掛けられ、砂漠で逃亡生活を余儀なくされた。アラビア諸国をはじめ、彼の母親の母国・日本も国王側につく。アズワールドにもそれとなく日本から打診がきたが、レイはそれを保留にした。そして個人資産で密かに彼を支援したのである。

それにより、ミシユアルは軍関係者を味方につけ空軍に入隊、国王の刺客を振り切ることに成功。彼がどこかレイに恩義を感じる素振りなのは、この時のことが原因だった。

とはいえ、レイもミシユアルに対する友情や感傷だけで動いた訳ではない。

順当に国益が上がり始めたアズウォルドにとって、軍備補強が最優先の課題となりつつあった。専守防衛が基本とはいえ、守る力があることを対外的に示す必要がある。後に、クアルン海・空軍をアズウォルド近海に招き、大々的に合同演習を行った。支払った代価以上の効果を得たと信じている。

(今回も、あの男ならきつと……)

デスクに置かれた資料に目を落とし、レイは胸の中で呟く。

直後——コンコンコン、と小さなノックが彼の耳に聞こえた。

「誰だ？」

深夜○時近く、王宮内の国王執務室を訪れる人間など決まっている。だがあえて、レイは誰^{すいか}何した。

「私です。入ってもいいかしら？」

予想通りティナであった。

「ああ、どうぞ」

ため息を隠し、レイは妻を招き入れた。

腰まであるブロンドを揺らし、ティナは二年前と変わらぬ天使のような笑顔を見せる。涼しげな光沢を放つシルクのナイトガウンを羽織り、素足にサンダルというラフなスタイルだ。ガウンの下はおそらく、スリッパタイプのネグリジェ一枚だろう。

「お仕事中ごめんなさい。忙しいのは判ってるの……でも」

レイは早口で話し始めるティナに微笑みかけ、指先で口を閉じるようなジェスチャーを見せ、手招きした。

ティナは黙ってレイの傍に駆け寄る。

窓枠に腰掛けたまま、彼はティナを抱き寄せ、優しく口づけた。しだいに強く唇を押し付け合う。そして唇が離れた瞬間、彼女の髪に顔を埋めた。太陽の香りがレイの鼻腔をくすぐる。

「あの……明日からの公務ですけど、もし私がお邪魔なら」

「シーク・ミシユアルにはちゃんと話しておいた。我が国の王妃を粗略に扱うような真似は、私がさせない。公務は予定通りだ」

レイの言葉にティナはふわっと微笑む。

ティナが喜んでくれるなら、それ以上のことはない。だが、問題はここ先だった。

「ねえ、レイ、もうすぐ日付けが変わるわ。そろそろ休んだほうがいいんじゃないかしら？」

彼はスツとティナから離れた。デスクの書類を手に取りつつ、

「ああ、悪い。どうしても目を通しておかねければならない書類なんだ。会議は明日もあるからね」

出来る限り平静を装った。

「レイ……そう言って何日寝室に戻っていないか、判ってる？」

「判っているよ。だが今は、本当に忙しいんだ」

レイは再びティナに髪に触れ、

「頼むよ、ティナ。私を困らせないでくれ。新婚夫婦に当てられてるのは私も同じなんだ」

彼女のヘーゼルの瞳を覗き込み、軽くキスした。

いつもなら、これで引き下がるはずだった。しかし……。

「今夜だけ、お願い、今夜だけ……私と一緒に休んで欲しいの。もちろん、その……眠るだけじゃなくて」

ティナは少し頬を赤らめつつ、身振り手振りで気持ちを伝えようとする。

無論、それは気付かないほどレイは鈍い男ではない。

「一番……赤ちゃんが出来やすい日なの。だから……夫婦なんだもの、協力してくれるでしょう？」

ティナの瞳は涙で潤んでいる。キスでごまかせないことを悟り、レイはティナに向き合った。

「ティナ、君の気持ちは判っているつもりだ。でも、少し子供のことは忘れないか？ そんな決死の覚悟で挑むものじゃ……」

「私に魅力を感じなくなったのならそう言って！」

レイの言葉を遮るように彼女は叫んだ。

「ほら、またすぐそんなことを言う。違うと言ってるだろう」

「丸二年を過ぎたのよ。焦って当然だわ。本当なら、ちゃんとした検査だって受けたいのに。あなたが不必要いって言うから……」

この話になるといつもそうだ。ティナはヒステリックに怒りだして、すぐに泣き始める。元々、大らかに見えて神経質な性質^{たち}だ。そして果敢に、問題解決に邁進しようとする。

二年前はそれで、レイの周囲を引っ掻き回してくれた。

しかし、今度ばかりはレイも音を上げそうであった。

「いいかい、ティナ。検査はしない。特別な治療も必要ない。時期がくれば授かるだろうし、万に一つ、私たちに後継者がいなくても、ソーヤもアロンもいる。子供がいなくても幸福なカップルは」

「私が欲しいの！ レイ、あなたの子供が欲しいのよ。特別な手段で授かるなら、どんなことでもしたいわ。でも、私に出来るのはタ

イミングを計るくらいなの！ チャンスは月に一度なのに……。あなたはこの二ヶ月、私を抱こうともしないじゃないっ！」

いつもは黙って聞いている。だがこの日ばかりは、ミシユアルたちの様子にレイ自身も煽られていたのだ。

「クリスティーナ、悪いが……。今の君に？ 種付け？ をする気にはならない」

レイの言葉にティナは一言も返さず、執務室を出て行くのだった。

(9) 罪なハネムーン

王宮関係は古い建物の多いクアルンに比べ、アズウォールドは新しく感じる。

それもそのはず、テロ以前のこの国は貧困に喘ぎ、王宮とはいえ雨漏りのするような場所もあったという。レイ国王が摂政となって実権を握り、この国は急成長を果たした。テロで半壊した王宮を全て撤去し、完全西洋風の王宮正殿と南国の名残がある王宮とに建て替えたのだ。

そして今、舞が立っている場所は——王宮正殿の一階にある？騎士の間？。

クアルン王国国王夫妻を歓迎して催された、晩餐会の会場であった。

昼過ぎ、いきなりミシユアル国王は公務から戻って来て、

「舞、今日の晩餐会にお前も出席することになった。急なことでドレスを作る時間がない。すまぬがこれを着て出してくれ」

ミシユアル国王の側近が差し出したのは、舞がクアルンで初めて着たドレス——ダイヤモンドが散りばめられたシャンパンゴールドのイブニングドレスであった。

舞にすれば、いつの間に？ どうして持ってきたんだろう？ と不思議でならない。だがそれは、両親にドレス姿を見せたいのではないか、というミシユアル国王の心遣いだったらしい。結局、日本では着る機会がなかったのだが。

「えええーっ!? どうして? 何で? こんなドレスを着て、晩餐会に出ていいのっ?」

舞はパニックである。

クアルン流の午餐会や晩餐会、もっと簡単に食事会とか茶話会なんかはだいぶ飲み込めてきた。だが、イブニングドレスを着た西洋風の晩餐会など……。

(っっていうか、何をどうしたらいいのよーっ!)

はつきり言えば、さっぱり判らない。

結婚前とは違い、ドレスアップするのはとても楽しい。特に、ミシユアル国王が絶賛するので、彼の為に着飾りたいと思う。

いつもなら相談するシャムスもない。だがこの場合、シャムスも「どう致しましょう」と言い出す気もする。いっそ、ティナに相談してきてもいいだろうか、と舞が尋ねようとした時、ミシユアル国王の無然たる様子に気が付いた。

「ねえアル、どうしたの? 私が晩餐会に出るのが不満? だったら辞退するけど」

「そうではない。正妃たるお前に、同じドレスを二度着せるなど……新しいドレスを用意しておくべきだった」

深刻そうに口にするが、何がそんなに問題なのだろう。

「二度って言っても、クアルンの王族女性を招いた晩餐会で着ただけじゃない」

クアルンから同行している女官二名は、元々王太子の宮殿に居た女官だ。誰も舞がこのドレスを着たところなど見ていないのだから、気にする必要はないと思う。

「二度は二度だ。正妃の晩餐のドレスも新調できないなど……外部に漏れては私の恥だ」

他のドレスは日本で着たウェディングドレスとパーティドレスがあるが、それよりましだと判断したらしい。

舞は、結局自分の恥なのね、だったら出ない！ と叫びそうになるのをグッと我慢した。

ミシユアル国王の首に手を回し、ニツコリ笑って尋ねる。

「ごちゃごちゃ言わないの。どうして出られるようになったのか、晩餐会で何をしたらいいのか、ちゃんと教えてよ。ね、アル」

軽く彼の頬に口づけると、二人を取り巻く空気がガラリと変わった。舞は色々教えて貰うまでに、一時間ほど別の授業を受ける羽目になったのである。

天井一面に騎士の絵が描かれていた。騎馬隊の一団や、その向こうには剣を抜いて戦う、合戦シーンもある。重そうなシャンデリアが六基も吊られ、大広間にセッティングされたテーブルには、ほとんどの招待客が着席していた。

舞はそんな会場の様子を、衝立の隙間からコッソリ眺めてため息をつく。

（日本では出られなかったもんねえ……こんなの初めて）

だが、レイ国王とミシユアル国王が並んで入場した瞬間、全員が一斉に立ち上がる。

舞も慌てて姿勢を正し、ティナと一緒に彼らの後ろを静々と歩くのだった。

会場を見渡し、ゴクツと息を飲む。事前に聞いてはいたが、こうして目の当たりになると壮観だ。晩餐会のフロアには着飾った招待客が約百二十名ほど……その全てが女性であった。

思い思いのドレスの波が？騎士の間？を席卷する。

後宮の集まりも華やかではあるが、ここはそれ以上に豪華絢爛という形容がピッタリに思えた。

「クアルン国王夫妻を歓迎するのに、妃殿下が出席出来ないシステムはおかしい。可能な方向でクアルン大使と検討するように」

レイ国王はそんな指示を出していた。だが結局、一行が到着するまで結論は出なかったらしい。

クアルンのルールで言えば、家族で王宮を訪ねた場合、妻と娘を相手の後宮に預けることになっている。信頼の証ともいえるが、それが成り立つのは相手の後宮も男子禁制であるがゆえ、だ。

柔軟だと言われるレイ国王は、それならば、と晩餐会を男子禁制にした。

今夜このフロアの中に入れるのは、両国王以外は全員が女性！招待客から配膳スタッフ、王宮楽団の奏者、警備にも女性警察官を配備し、完璧であった。

順番に国歌の演奏が終わり、両国国王が着席すると他の全員も椅子に腰を下ろす。

こういった晩餐会の場合、国王が中央に並んで座り、相手国の王妃がその隣に座る。というのが慣例だ。しかし今回は違った。上座が設けられ、そこに国王が並んで着席。その一段下の中央に王妃たちの席を設け、後は通常の席次順となっている。

舞がレイ国王の隣にならないよう、配慮したテーブル配置であった。

「舞踏会がないのが残念ね。マイはとてもダンスが上手そうなのに」
ティナが微笑みながら恐ろしい話題を投げかける。

「と、とんでもありません。なくてホッとしてます」

「そんな謙遜しないで」

謙讓の美德は舞も持っているつもりだが、こればかりは百パーセント本心であつた。

「そんなことより、わたしのせいで踊れなくなってしまった。ティナも楽しみにしてたんじゃありませんか？ レイ陛下とのダンス見てみたかったなあ……なんて」

ちよつと冗談めかして言ったのだが、どうやらティナの耳には届いてないらしい。

じつと見ていると、？白トリュフを散らした舌平目のソテー？も？牛フィレ肉のステーキ？も？ブロッコリーのクリームスープ？すら半分も口にはいなかった。

「あの……ティナ？ 具合でも悪いの？」

小さな声で話しかけるが、ティナは顔を真つ直ぐ前に向けたまま、虚ろな瞳をしていた。

「ティナ？ ティーナ？」

「あ……ごめんなさい。お食事は口に合うかしら？ えっと……今日のメインは何だったかしら」

メインのステーキを食べた後でそんなことを口に出している。

「えっと、多分、次は？チョコレートムースのバナナアイス添え？
だったんじゃないかなーと」

「あ、ああ、そうね。メインはもう頂いたわね」

そう言って口元だけ微笑むと、今度は視線を下に向け、ジツと水の入ったグラスを見つめるティナであった。

$$\begin{array}{c} \wr \\ * \\ \wr \\ * \\ \wr \\ * \\ \wr \end{array}$$

『昨日は妃が世話になったと聞いた。非常に喜んでいた。クリステイーナ王妃に礼を言う』

ミシユアルはとりあえず礼儀正しく声を掛けた。

しばし返事を待つが、レイは一段下の席に舞と並んで座る、アズル・ブルーのイブニングドレスに身を包んだティナを凝視している。それに気付いたミシユアルは、わざとらしく咳払いしつつ……。

『昼間の会議もまともに聞いていなかったな。君が女に呆けるとは……珍しいことだ』

ハッとして横を見るレイに向かって、してやっつたりの笑みを浮かべる。

レイは水の入ったグラスを取り一口飲みながら、彼らしくない不機嫌な声で答えた。

『疲れが溜っている。その上、寝不足なんだ』

『結構なことだ。しかし、言い訳は君らしくない』

夜の寝不足といえど何を指すか……言わずもがなであろう。ミシユアルは自分の基準で答えを返す。

『シーク・ミシユアル、新婚の君と一緒にするんじゃない』

『妻を持つ男が夜に行うべきことは一つだ。結婚年数など関係ない。夫の義務だ』

その何気ない言葉に、レイの表情は凍りつく。

しかし、心の機微を察するのは、ミシユアルにとって苦手なことの一つだったのである。

(10) 孤独な二人

晩餐会はそのまま舞踏会になるのが通常だが、まさか、国王夫妻だけ踊り続ける訳にもいかない。その為、食事が終わると会はお開きとなった。

その代わり、国王たちは続きの間で、締め出しを食らった男性招待客との謁見が控えているという。

舞とティナは？ 貴婦人の間？ に案内され、王族女性との歓談が予定されていた。

「クアルン王国の王妃様がわたくしと同じ日本人だなんて、光栄でございますわ」

オーホッホッホ！ と高笑いをしているのが前国王の生母、レディ・チカコだと紹介された。彼女は綺麗な日本語を話し……というより、日本人なのだから当然かも知れない。

「王弟殿下のお妃様がご懐妊とか、おめでとうございます。やはり後継者を産むことは、王家に嫁いだ者の義務ですものね。お若い妃殿下なら、ご懐妊もすぐですわ！」

ティナに向けたあからさまな嫌味に、舞はカチンときた。

おそらく、横で見てもムツとした顔をしたのだろう。ティナは慌てたような口ぶりで、

「お祝いは結構ですが、プライベートに関するお話はお止めください」

「あら、おめでたいお話ですもの。クリスティーナ様、あなたにご

懐妊の兆しがないからといって、あまり周囲に気を遣わせるのはどうかしら？」

チカコはティナの言葉など鼻で笑う様子だ。

その時、

「王后陛下に失礼ですよ。言葉を慎みなさい」

厳しい口調で言ったのはレイ国王の叔母にあたるルシール王女であった。髪と瞳の色はブラウンだが、全体的なイメージは西洋風の女性であった。

このアズウォールドは混血が多く、現在も国際結婚が多い為、様々な印象の人たちで溢れている。

ちなみにこの歓談に出席しているのは、レディ・チカコの娘マリナ王女と、リユーク王子の妻リハンナ妃、その娘のローザ王女、ミシガン王女、そしてルシール王女の娘レディ・アンナの七名であった。

ティナが二十六歳、ミシガン王女とレディ・アンナが三十代、他は全員四十歳は超えている。ようするに、この中で断トツに舞は若いことになる。

チカコはそんなルシール王女にも文句を言い始めた。

「あら、ルシール様のお嬢様、アンナ様にもお二人目とか。おめたいお話なのに、どうして話題になさいませんか？ あれほど子供好きでお優しい陛下でしたのに、最近では臣下の子供を王宮に呼ぶこともなくなったとか……」

言葉に詰まるルシール王女に代わって、隣に座った黒髪の女性――レディ・アンナが声を上げた。

「そんなことはありません！ 陛下はつい先日、息子ブライアンの誕生日にアジュール島までお越し下さいました。クリスティーナ

様と一緒に選んだというお祝いを持って」

「まあまあ、王妃様はご一緒なさいませんでしたの？ アジュール島はお二人でよく行かれてましたの？」

わざとらしい嫌味に舞の怒りはメラメラと燃え上がる。

「加減がすぐれませんでしたの。それだけです」

「お加減が？ では、いよいよおめでたかしら？」

『王妃だったって繁殖牝馬じゃないんだからね！ そんなポコポコ産めるわけじゃないっ！』

舞は思い切ってアラビア語で怒鳴った。

一斉に？ 貴婦人の間？ は静まり返り、全員がポカンと舞を見ていた。

一応、通訳の女性は舞の横に待機している。しかし彼女は青褪めていた。どう訳していいものか、困っているらしい。

（そ、それもそうか……訳されたらヤバイかも）

「全てがアッラーの思し召しです。申し訳ありませんが、イスラムではそういった話題は禁じられております。これ以上続くようなら、わたしは退出しなければなりません」

舞が挑戦的な笑顔を作ってそう言うと、さすがのチカコも黙り込んだのだった。

「アーイシャ殿下。さきほどのイスラムの掟はお見事でしたね」

予定されていた歓談の時間が過ぎ、舞は王宮の庭でミシユアル国

王の帰りを待っていた。この国はいたる所に緑と水が溢れている。日本も豊かだが、それ以上だ。満点の星を見上げつつ、マイナスイオンを胸いっぱい吸い込んで、舞は庭の噴水を見ていた。

そんな彼女に話しかけたのが、レディ・アンナであった。

身長は舞と遜色ない。真っ黒の髪を肩までで切り揃え、額の中央で綺麗に分けていた。母親のルシル王女にはあまり似ておらず、東洋人っぽい顔立ちをしている。

「えっと……レディ・アンナでしたね。まさかとは思いますが……
…アラビア語は」

「少しだけ」

そう言うのとクスツと笑った。どうやらハツタリに気付かれたらしい。

舞は思わず愛想笑いを浮かべつつ、

「あんまりしつこいので、つい。……レディ・チカコはティナが嫌いなんでしょうか？」

美人の割にアンナの表情が人懐こい印象だったので、舞も親しげに尋ねてみる。

「レイに子供が出来なければ、次の国王は彼女の息子ソーヤになるの。だから、気になって探りを入れてるんじゃないかしら。ソーヤは妙に意地を張って、結婚しようとしなないし」

それはそれで余計にプレッシャーなんじゃないかな。舞がポロリと口にする。

「そうなの！ ティナが一生懸命になり過ぎるから、少しは考えてくれたらいいんだけど……」

アンナは従弟のレイ国王はもちろん、ティナとも仲が良かったと

いう。

彼女の夫はレイ国王の専属護衛官ニック・サトウ。ニックの父は国王の首席補佐官、母はレイ国王の乳母だった関係から、国王夫妻とは家族同様の付き合いをしてきた。

アンナはこれまで、ずっとティナの相談に乗っていた。しかし、四ヶ月前にレイ国王の元婚約者が第二子を出産。その直後からティナは一層神経質になってしまふ。そんなティナに、アンナは第二子の妊娠は告げることが出来ず……。

レイ国王も同様で、一人でアジュール島を訪れることにしたらしい。しかし直後に、事実がティナの耳に入ってしまったのだ。

「色々揉めたみたいね……。レイは何も言わないけど」

それ以降、ティナはアンナを避けるようになった。

彼女の話聞き「なるようにしかならない気がする」と思うのは、まだ切羽詰っていないせいだろうか？ 舞はそんなことを自分に問い掛けてみる。

「アーイシャ殿下。新婚さんとはいえ、同じ一般人から王妃になられたあなたの言葉なら、ティナも耳を貸しそうな気がするの。あんまりレイを追い込まないように、ティナに言ってあげて欲しいのよ」
「お、追い込む？」

「そう、レイは表に出さないから判り難いんだけど……。プレッシャーを感じてるのは彼も同じだから。レイにはティナしかいないの。それを彼女に思い出して欲しくて」

どこことなく頑張っているティナとは違い、アンナはごく自然に王宮の似合う女性だった。

「――アーイシャ。ここに居たのか」

舞が返事を迷っていると、背後からミシユアル国王の声が聞こえた。

アンナは一步下がると、さらに右足を引き、腰を落とす。

「アンナ・クリステイーヌ・サトウと申します。御目に掛かれまして、光栄に存じ上げます」

「ああ、レイ国王の従姉殿か。頭を上げるがよい。……子がいるようだな。何ヶ月だ？」

「五ヶ月目に入りました」

「丈夫な子を産むように――そなたにアツラーフ・ヤハミーキアツラーフ・ヤハミーキのご加護を」

アンナは『感謝申し上げます』アラビア語で答え、舞に小さく目配せして下がっていった。

舞はさっき言われたことを思い返し、ボンヤリと彼女の後姿を見つめる。

「どうした？ 何か言われたのか？」

何を勘違いしたのかミシユアル国王の声が陰しくなった。

舞は慌ててアンナの言葉を伝える。特に誰の悪口でもないし、レイ国王とミシユアル国王は仲が良さそうだ。ひよっとしたら何か力になってくれるかも知れない。

そう思った舞に彼が言った言葉は――。

(11) 愛と怒りの女神

——アジュール島・アジア国際図書館オープニング記念式典——
と書かれた横断幕の前にティナと舞は並んで立っていた。

舞はもちろんフル装備だ。大勢のマスコミがカメラを構えて並び、テレビ局も来ているという。そんな中で舞が素顔を出せるはずがない。

この図書館は司書であるティナが設立に携わったものだった。

元々、彼女がこの国に招かれた理由が「新しい図書館の設立に向けて」というもの。単なる建前だが、それは言えない。この国にはすでに蔵書一千万冊を誇る国立図書館があった。それと区別する為に、アジア各国の本に限った専門的な図書館を設立したのである。

アジアの中でも、東アジアに関する全てがここに揃っている——そんなことを教育省の女性大臣が、ティナと舞の横で来賓やマスコミに向かって話していた。

それを訳してくれる女性に視線を向けつつ、さも聞いていますとばかり舞は頷くが……。

(アルの馬鹿っ！ 何よ、冷たいことばかり言って。勝手にしたらいいじゃない！)

頭の中にはミシユアル国王に対する文句ばかり浮かんでくるのだった。

くくくくくく

「彼らの問題は彼らが解決する。お前は余計なことをしてはならぬ」

スッパリ言い切ると彼は舞に背を向けた。

確かに、ミシユアル国王の言う通りだろう。他人がどうこうできる問題じゃないのは、舞も承知している。

だが、悩みは言葉にしたり、誰かに聞いて貰うだけでも心が軽くなるものだ。アメリカの一市民だったティナがアズウォルドの王室に嫁ぎ、たった一人の味方であるレイ国王との仲が気まづくなれば……。

舞にはとても他人事なんて思えない。

それこそ？明日は我が身？である。

「国内の内戦だって、解決する為に国連とか他国が介入することもあるじゃない！色々言われて、本当にティナは辛そうなの。それだけでも伝えてくれたっていいでしょう？」

舞の言葉に、ミシユアル国王は大袈裟なほどため息を吐く。

「レイはそれに気付かぬほど愚かな男ではない。クリスティーナは夫の指示に従わず、問題を大きくしているに過ぎぬ。王妃の自覚を持つよう、伝えるがよい」

それには舞もカチンときた。

「なんでそうなるのよっ！？　じゃ、私に子供が産まれなかったら、アルも同じように言うんだ！」

「……他人の苦しみを我が事のように思うのは、お前の長所であり、欠点でもある。舞、間違っても他国で面倒は起こさぬよう。よいな！」

何が一番頭にくるかと言えば……。

新妻まよのお願いを素気無く跳ね返しておきながら、ベッドの中では

しっかり手を伸ばしてくるのだ。

（一体、どういう神経してんのよっ！）

ソレはソレ、コレはコレ、にも程がある！

舞が無視すると、今朝は一言も話さず公務に出て行った。

それだけじゃない。

『今朝の陛下は随分ご気分を害されている様子。閨室^{けいしつ}で陛下のお心を損ねるなど、妃にあるまじき失態。ラシード殿下はクアルン女性を娶り、アッラーのご加護をいただいて早々にお子に恵まれました。この分ですと、ご帰国と同時に第二夫人を娶っていただくことになりそうですな』

側近ダーウッドは、自慢の髭を撫でながら舞に言う。

そのふんぞり返った態度は、王子を産むまでは正妃として認めるもんか！　ということらしい。

しかも、少し距離が離れていたとはいえ、ミシユアル国王の耳にも入ったはずなのだ。なのに、彼は何もフォローしてくれなかった。それに気付いたとき、舞の怒りは沸点に達したのである。

くくくくくくく

「……妃殿下。アーイシャ妃殿下。テープカットでございます」

女性通訳の言葉に舞はハツとする。

慌てて笑顔を作り、手にしたハサミでティナと同時に目の前に張られた紅白のリボンをカットした。後から、笑っても誰にも見えな

いことに気がつく舞だった。

「そんな……シーク・ミシユアルの仰る通りだわ。私たちのせいで夫婦喧嘩なんて駄目よ。今夜はちゃんと謝って、仲良くしてちょうだい。ね、マイ」

——男って本当に無神経。なんでちょっと気遣ってくれることができないの。馬鹿みたいにプライドとか面子ばかり気にして！

医療施設を視察した後、アジュール島内にある離宮・瑠璃宮ラビスラズリに二人は入った。

舞は彼女を元気付けようとするあまり、ついつい悪態が口に出る。すると、逆にティナの方が心配して、舞を宥め始めたのだった。

「あなたの気持ちは嬉しいわ。でも、王妃としての役目を果たしていない私が悪いのだから……」

ティナは一般人だったとはいえ、舞のような庶民ではない。ニューヨークの五番街に大邸宅を持つ、富豪の娘なのだ。だが家族仲は、というと……。結婚から二年、ティナが実家に戻ったのは国賓としてアメリカを訪れた一度だけだった。

もし舞なら最悪の場合、月瀬の両親の元に逃げ帰っても追い返されることはないだろう……。多分。

だが、ティナには帰る場所がない、という。

「去年、帰った時も……お前は子供の一人も産めないのかって、父に叱られたわ。焦っては駄目だというレイの言葉もよく判るの。でも、周囲が私のせいだっていう目で見えるのに、何もせずには居られないのよ」

「検査とか、受けたんですか？」

舞は慎重に尋ねる。

ティナもそれに気付いたのか、舞に向かって柔らかく微笑み、首を振った。

「いいえ。レイが必要ない、って」

——ティナはまだ二十六歳。焦るような年齢ではない。事情があるにせよ、ないにせよ、健康に問題がないなら特別な検査は不要だ。生殖能力の有無は愛情の重さに比例しないのだから……。

「そういつて検査を受けさせてはくれないの。確かに、私に問題があっても離婚は出来ないのだから、意味がないと言えそうだけど」

カトリックのアズウォルドは離婚できないのが建前だ。もちろん、ズルイ手段はいくらでも使える。でもレイ国王はそういうタイプではなかった。側室を持つような国民感情を逆撫でする？不貞行為？もしない人だとティナは言う。

それを考えれば、クアルンの方が楽といえば楽なのだ。離婚も出来るし、ミシユアル国王がその気になれば、あと三人もお妃を娶れる。

（フン、だ。クアルンの由緒正しいお嬢様を何人でも娶ればいいじゃないっ！）

舞だって不安なのだ。まだまだこれから、と思っていたところにライラの妊娠が知らされた。

もし、ライラが王子を産んだら……。

そして舞に何年経っても子供が出来なければ……。

間違いなく、ライラを妻にしておけば良かったのに、と言われる

だろう。ミシユアル国王に「そんなことはない」と言って欲しかった。それを「面倒は起こすな。王妃の自覚を持て」なんてあんまりだ。

二人の王妃が揃って意気消沈している所に、離宮の女官がやって来た。昼間の式典の様子がテレビで放送されている、と伝えにきたらしい。ティナの指示でテレビが付けられ、チャンネルが合わされた。舞とティナが新しい図書館の中を見て回ったり、他の施設を訪れたシーンなどが次々と流れる。

直後、スタジオにカメラが戻り、「不仲説が囁かれる国王ご夫妻ですが……」などと司会者が言い始めたのだ。

「もういいわね。切りましょうか」

そう言ってティナがリモコンに手を伸ばした時、

『ハリウッドでは女優のローラ・ウィリアムズさんが妊娠五ヶ月と発表されましたが……。結婚はしない、父親の名前も公表しないとのこと。レイ陛下はクリスティーナ様とのご結婚直前まで、ローラさんと交際されており、ちょうど今年の二月にローラさんがアズウオールドを訪れたことから――』

(12) 危険なゲーム

「――では、車が一台消えているんだな」

ミシユアルはレイと王室専用船に乗り、アジュール島に向かっていった。

全長二十五メートル、全幅十メートル、二百トンにも満たない船だ。しかし、国内の島々を巡る分には充分だという。

レイが携帯電話で話しているのは、どうやら王妃の護衛官らしい。

(護衛官を煙に巻いて出奔とは……全く、妃にこういう教育をしているのだ)

それもこれも、レイがクリステイーナに甘いからだ、と心の中で舌打ちする。いくらアジュール島が安全で、しかも舞の為に不慣れた女性護衛官を多用しているからと言っても……。

「いや――向かった先は判っている。君たちはそのままアイシャ妃の警護に回って……何っ!? ティナはアイシャ妃を伴って宮殿を出ただと!」

その台詞に、ミシユアルは口に含んだ? シャルバート? を吹き出した。彼のために作られた、ナツメヤシの実や乾したブドウの入った甘いドリンクだ。

ミシユアルはわなわなと手を震わせ、レイに向かって怒鳴る。

「伴って、とはどういう意味だ! お前の妃がアイシャを連れ出したのか?」

「ミシユアル、少し黙っていてくれ」

レイは電話口を押さえ、ミシユアルに命令した。

再び電話の相手と会話を始めるが、

「黙れとは失礼であろう！ 我が正妃に何かあれば、お前の妃と言えどもただでは済まさぬぞ！」

直後、紺碧の瞳が冷ややかな視線を怒声の主に向ける。

「――では、宮殿の監視カメラで確認したんだな。使用人の車を運転していたのは、アーイシャ妃である、と」

「……！」

（どうしてお前が出奔する！ 私が何をしたというのだっ!?!）

吹き付ける潮風に眉を顰めるミシユアルであった。

レイがああ情報を知ったのは、舞たちが観ていたテレビ番組の放送直前のこと。

「困ったことになった……」

国務省報道室から緊急連絡と聞いたが、その報告を受けた直後、レイが青褪めてミシユアルの前に座り込んだ。そのままテーブルに置かれたコーヒークップを取り、一気に飲み干す。

「……」

ミシユアルは、レイの動揺に驚いていた。

なぜなら、レイが飲んだのはミシユアルのカップで、入っていたのはクセのあるアラビアカーヒーだ。緑茶を好み、コーヒーもアメリカンにするというレイである。何事が起こったのか、ミシユアルも自然と緊張を高めた。

「ハリウッドのある女優が、未婚の母になるというんだ」

「……それがどうした？」

懸念される国際問題は山のようにある。火種は合衆国にも日本に

も、そしてイスラム諸国にもあった。それが、いきなりハリウッド女優の話に飛び……ミシユアルにはサッパリ判らない。

「私は結婚前、ことさら派手な女性関係を演出していた――」

それにはミシユアルも心当たりがある。やれパーティだ、バカンスだと言い、その都度レイは様々な女性を同行していた。世界中のマスコミに？プレイボーイ・プリンス？と書き立てさせたと言ってもいい。真偽の程はミシユアルも知らない。重要なのは、彼が国王として信頼に足る人物か否か、ということだけだ。

そして、ミシユアルはレイを信用していた。

「その時にエスコートした女性の独りが、このミズ・ローラ・ウィリアムズだ」

レイは雑誌を一冊、ミシユアルに差し出した。表紙に金髪碧眼の女性が下着同然の姿で載っている。肢体をくねらせ、男を誘惑する売春婦そのものだ。このような雑誌をクアルンに持ち込もうものなら、即刻逮捕されるだろう。

ただ、ミシユアルとて男である。度を越したダイエットで針金のようになった裸体に比べれば、ローラの健康的で豊かなバストとヒップは観賞用には悪くない。

「そして彼女は四ヶ月前に、この国を訪れている」

「――言い訳も説明も要らん。君の子供なら認めて養育費を払え。この女が偽りを口にしたなら、制裁を加えれば済むことだ」

「ごもつとも。だが、彼女は個人的事情でノーコメントを通すそうさ。私は否定すると言ったが、報道室長は表面的事実のみ書かれている以上、こちらから騒ぐのは不利になるという」

数年前の一時期、レイと交際があったということ。ローラが妊娠しており、父親の名前を決して明かそうとしないこと。そして、子供の父親と関係があったと思われる時期、アズワールドを訪れていることが報道されていた。

厳密に言えば、『父親＝レイ』と思わせる報道は規制することが可能だ。しかし、規制した、という事実が残る。アズワールドのような検閲や報道規制が少ない国では、余計に噂を煽ることもなり兼ねない。

「身に覚えのないことなら放っておけ」

「問題は……ティナがそう思ってくれるかどうかだな」

「一国の王たる者が！ 情けない言葉だ」

「では、シーク・ミシユアル、君ならどうする？ アーイシャ殿は無条件で君を信じてくれると思うかい？」

ミシユアルは三秒ほど考え、「当然だ」と答える。

レイは苦笑いを浮かべつつ、

「そう言い切れる、君が羨ましい」

深いため息をついたのだった。

くくくくくくくくくくく

「ねえマイ……あなたまで出て来なくても……」

さっきから何度となくティナが口に行っている言葉だ。

しかし、動揺しながらも「私は大丈夫だから、一人になりたいだけだから」そう言って宮殿から出て行こうとした。そんな彼女を、舞は黙って見送ることが出来ず……。

アバヤを脱ぎ捨て、女官の私服を借り、舞は一見すると？日系アズワルド人？に早変わりである。そして、ちょうどその女官が乗っていた日本製の軽四自動車まで借りた。二人の王妃に詰め寄られては、女官も逆らえないだろう。

それに――『無断で借用します。女官のせいじゃありません。舞』と、日本語で書き置きも残してきた。

（アルってば、あの女官を罰したりしないよね……それだけがすごく不安）

「マイ、ミシユアル陛下が心配すると思います。やはり、引き返しましょう」

舞のことを気にして、ティナは戻ろうとまで言い始める。

「ティナはそれでいいの？　もし、本当にレイ陛下の子供だったら……」

「その時は私はこの国を出るわ。離婚の手続きだって、レイがその気になれば出来るはずよ。彼は……庶子は作らないと言っていたから……きつと」

そう言うともた涙をこぼし始める。

あの放送を見た時、「まっさかあゝそんなことありませんよね」と舞は必死で笑った。隣に座るティナが見る見る蒼白になっていたからだ。

そしてティナは、ローラの子供の父親はレイ国王に違いない、とちょうどその頃から、夜の生活が遠のきはじめ……とうとう二カ月くらい前から、ティナの誘いに全く応じてくれなくなったと告白した。

（二ヶ月も、なんて最っ低！　そもそも、ヤルことヤラなきゃ子供

なんて出来っこないじゃない!」

さすがの舞も、ストレートに言ったらティナを傷つけると思っ…。

「いくら国王様だって、浮気なんて酷いわ!　しっかりお灸を据えてやらないと」

「浮気ではないわ。レイは浮気をするような人じゃないの。本気なのよ。だから、子供を作ったんだわ。だから、私のことも……」

そのまま、打ちひしがれたようにポロポロ泣き始める。

もうすぐレイ国王がここに来る。でも今は、彼と顔を合わせたくない。酷いことを言っ、これ以上嫌われるのはイヤだから。誰とも顔を合わさなくて済む場所がある。レイも知っている場所だから、そこで頭を冷やして、冷静になって彼と向き合いたい――。

「ティナ、この道でいいのよね?」

「え?　ええ、そう。レイが個人的に所有しているコテージがあった……きゃ!」

不意に背後から大きな音と揺れを感じた。舞は慌てて車のブレーキを踏み、急停止する。

舞は地震の多い東京育ちだ。多少の揺れで大騒ぎはしないが、彼女が感じたのは地震の揺れではないような……。

――この時、コテージに繋がる一本道が崖崩れにより寸断されたことなど、判るはずもない舞だった。

(13) 恋はスコールのように

コテージに車を横付けし、舞とティナは中に駆け込んだ。

突然の雨、これをスコールと言うらしい。雨季に入ったので数ヶ月は続くとティナが説明してくれた。

「マイ、大丈夫？」

「あ、はい。大丈夫です……たぶん」

幾分心もとない返事だ。しかし、全身が濡れネズミの状態ではそれも仕方ない。雨に濡れたことくらいあるが、グレーのカーテンが引かれたような雨は初体験だった。

ティナも同じようにズブ濡れだが、さっさと奥に入り舞を手招きする。

「シャワーはそこ、ワードローブはこっちよ。私のほうが背が低いから、少し小さいかも知れないけど……」

縦もそうだが、横もワンサイズ違う気がする。ティナから借りた服が、ファスナーが上がりません、なんてことになったら赤っ恥もいいところだ。

(こんな時こそアバヤが欲しいな……アレって万能だし)

舞の期待とは裏腹に、ティナは若い舞に似合う服を、とアレコレ選んでいる。

結局、エスニック柄の五分袖チュニックとロングスカートという、庶民的な組み合わせを舞は選んだ。サラサラのインド綿が肌に心地

好かったし、スカートのウエストがゴムなのも気に入った。ティナだどくるぶし近くまで丈がありそうだが、舞にはふくらはぎ辺りまでだ。

なんとなく、あまり露出がない方がミシユアル国王が来た時に無難かな、と思ったのが本音である。

（ご機嫌取ってるみたいでちょっと悔しいけど……）

舞がシャワーを使わせてもらいリビングに出ると、ティナはすでに着替えていた。違う部屋のシャワーを使ったという。彼女はオフホワイトのワンピース姿だった。マキシ丈だがノースリーブの肩はむき出しになっており、舞より露出度は高い。

キッチンに立っている彼女の姿は？王妃様？というより、ごく普通の若奥様みたいだ。

「待っててね。あ、紅茶でよかったかしら？」

「あ、はい。何でも……。あの、随分手慣れてるんですね」

意外だった。彼女は大富豪のお嬢様で、お皿の一枚も洗ったことがないようなイメージだ。

「このコテージでは何でも自分でするのよ。空からの侵入さえ阻めば自然の要塞だからって、護衛なしでも許されてるの。レイと二人きりで……」

そこまで言い掛け、ティナは口をキュッと閉じた。

「あ、あのっ！ ひょっとしたら、何かの間違いかも知れませんよ。だって、レイ陛下はティナのことを本当に優しい眼差しで見てるし」
スコールで程よく頭も冷え、舞は前向きに考えようとするが、
「愛していたら、二ヶ月も触れないなんて有り得ないわ……マイはそう思わない？」

ティナも同じくらい冷静になったのか、静かな笑みを湛えながら、

温めたティーカップに紅茶を注いだ。

二人はそのままソファに移動し、向かい合って座った。

さっきは急いで駆け込んだので気付かなかったが、世界で一、二位を争うほど豊かな国王が所有するにしては……質素なコテージだ。舞がそれとなく尋ねると、

「ここはレイのおばあ様が持っていたコテージなの。この島の出身で……戦時中に、国王の弟であったおじい様と愛し合って結婚なさったんですって。日本人の血を引いていて、身分も低くて……反対されながらも、二人は思いを貫き通したの。でも、ご長男がたった六歳で……米軍の爆撃で亡くなって、日本の血を引くご自分のせいだって悲しまれたそうよ」

その為、次男を終戦処理が終わるまで、なんと十四年間も日本の親戚に預けたらしい。彼は十八歳になってアズウォルドに戻り、皇太子となった。それがレイ国王の父親である。彼は祖国より日本を愛したという。身の安全に配慮して決められたアメリカ人婚約者から逃げまくり、幼馴染の女性と結婚した。

それが、あのティナに嫌味を言っていたレディ・チカコというから……。

（なんかいまいち、素直に感動出来ないっていうか）

舞がボソツと口になると、ティナも苦笑する。

「彼女が以前言っていたわ。自分たちは無理に離婚させられた、犠牲者だ、と。——確かに、そうならなければ、彼女はこの国の王妃だったわけだし、レイはこの世にいなかったんだものね。アーロン王子も、生まれていなかったかも知れない」

紅茶を少しずつ口に運びながら、彼女は寂しげに話す。

「だから……私はこの国を離れるわ。メイソン家には戻れないから、この容姿でも目立たないヨーロッパにでも行こうかしら。レイには私から離婚を申し入れるつもり、慰謝料とかタツプリ要求したら悪女ってマスコミに書かれるわね」

ティナはふふふっと笑い、「慣れてるから、全然平気よ」と付け足した。

「そ、そんな。落ち着いて、話し合おうって」

「レイには優しくして貰ったわ。とつても愛してるの。傍に居たら、彼に関係を強要したり、我がまま言うと思うから……もう苦しめたくないの。あんなに苦しそうに、顔を背ける彼を見たくはないのよ」

舞はティナの言葉があまりに切なく、口を開くだけで声が出なかった。

どれほど愛し合っている、ほんの些細なことからすれ違い、離れてしまうこともある。判ってはいても、目の当たりにするのは辛かった。

ここにミシユアル国王が来たら、個人的事情に舞を巻き込んでしまった、と謝罪するから、舞も素直になって欲しい。ティナは諭すように言う。

「ハネムーンに来たのに、嫌な思いをさせてごめんなさい」

頭を下げるティナに、舞は唇を噛み締めた。

直後——コテージ内の電気が一斉に消えたのだ！

「な、なに？ 停電？」

「ブレーカーが落ちたのかも知れないわ」

ティナが廊下の突き当たりまで行き、ブレーカーを確認するが上

下に動かしても電気が点く気配はない。

外は、一旦止んだはずのスコールが再び凄い勢いで降り始める。

「ねえ、ティナ。スコールってこんなに続くものなの？」

「い、いいえ……こんな時間まで降り続くんなんて」

コテージに到着したのが夕刻、辺りはもう真っ暗だ。

舞は思わず不安になる。

「海の近くだけど、満潮で高波が来るってことは……」

すると、ここは入り江になっており、小型のクルーザーがどうか通り抜けられる程度の水路しか外と繋がっていないという。どんな高波も、グルリと囲んだ断崖が自然の防波堤となり、入り江にはさざ波程度の影響しかない。ましてや、このコテージが何かの被害を受けたなど、ティナは聞いたこともない、と。

ところがその時、派手に窓ガラスが割れる音が聞こえた！

「きゃ！」

ティナは両耳を押さえ、屈むような仕草をする。

それは、さつき舞がシャワーを借りた部屋だった。彼女はティナを気遣いながらも、一人で部屋に飛び込む。すると、コテージのすぐ外にあった大木の枝が折れ、窓に突き刺さっているではないか。部屋の半分に割れたガラスが飛び散り、ゴウゴウと音を立て雨風が吹き込んで来る。とても女手で收拾出来そうな事態ではない。

舞は手にした携帯電話を見つめ、アンテナが立っていないことを確認して、呆然とした。

そこに、逼迫した声でティナが叫んだのだ。

「大変だわ、マイ！ 電話が繋がらないのよ。……どうしたらいいの？」

(……なんか、ちょっとヤバイかも……)

(14) 嵐に閉ざされて

舞とティナがコテージに到着した同じ頃――。

ミシユアルとレイは瑠璃宮殿に到着した所であった。

「二人とも荷物を持って出ているということは、やはり？ 覚悟の家出？ らしいな」

「アーイシャは君の妃に同情しただけだ。同じにするな！」

レイの言葉にミシユアルは一々不満を唱える。

「どちらにしても大した差はない」

「違う！ 私の下から逃げ出したとなれば……年寄り連中はこぞって離婚を口にするだろう。クアルンはこの国とは違うのだ！」

「……済まない。私自身が動揺しているようだ」

二人の間に気まずい沈黙が広がる。

直後、レイの護衛官ニック・サトウが走り寄った。

「陛下！ 確認が取れました。お二人の乗った車はフサコ様のコテージに向かったとのこと」

レイのホッとした表情にミシユアルも胸を撫で下ろす。ところが――。

護衛官のニックは顔を強張らせたまま……「実は、問題が生じております」

アジュール島の北側にそのコテージはあった。

コテージまでは深い森を抜ける一本道で、崖に挟まれた箇所もある。森の入り口には監視棟があり、島の警察官が常駐していた。ここ数年、コテージを使用するのは国王夫妻のみ。彼らが滞在中は、

衛兵も警戒にあたることになっている。

道中はもちろん、森の中にも随所にセンサーが取り付けられ、管理体制は万全のはずであった。

「崖崩れ、だと……」

森の入り口にある監視棟に入り、担当者の報告を聞いた途端、ミシユアルは声を荒げた。

「まさか、二人の乗った車が土砂に埋まったなどと戯けたことは言うまいなっ!？」

「シーク・ミシユアル、頼むから落ち着いてくれ! ——それで、コテージと連絡は取れたのか?」

「……それが、電気系統に問題が発生したのか、ルートของセンサーが反応していません。コテージとも連絡が取れず……」

担当者の青褪めた表情と震える声に、ミシユアルは眩暈を覚えていた。

舞には携帯以外に、本人も知らぬ場所にGPSを潜ませてある。盗賊団に攫われた時も、その装置が役に立った。GPSのおかげで、早急に舞の居場所を特定することが出来たのだ。

しかし、今回ばかりは役に立ちそうにない。この狭い範囲では、居場所がコテージか土砂の中かまでは判別不能だ。しかも、GPSには生体反応までチェックする機能はついていない。

こんなことなら昨夜、「判った、力になろう」と言えば良かったのだ。そうすれば、舞はミシユアルに一本連絡を入れたかも知れない。いくら正しいことをしたつもりになっても、相手を納得させられぬなら意味がない。

ミシユアルは苛立ちを抑え切れず、スコールの中、外に飛び出し

た。

「何処に行くつもりだ！」

ふいに肩を掴まれる。思った通り、レイだった。

「決まっておろう。森に入るのだ。土砂の下に舞がないことを私自身が確認する！」

「それは大丈夫だ」

「何をもってそう断言できる！ あの担当者とやらも、判らぬと言っていたではないかっ！」

スーツが水を吸い、シャツはおろか下着まで染み込んでいた。

彼の体にも痛いほど感じる雨が、もし傷ついた舞の頭上にも降り注いでいるとしたら……。とても、ジッと待ってなどいられない。

「確かに連絡は取れていない。だが、コテージの電源が入ったことを確認している。これは二人がコテージまで辿り着いたという証だ！」

「間違いないな！ 気休めなら許さんぞ」

「気休めを言ってどうする！？ 私のティナも一緒にいるんだ！」

同じくズブ濡れになりながら、レイも堪え切れず叫んだ。

ミシユアルはアズルブルーの瞳を睨みつけ、やがて、目を逸らした。

「判った。君を信じよう」

「——感謝する」

「だが、森の向こうは海ではないのか？ そのコテージが海岸沿いに建っているなら、高波に攫われる危険があるのではないか？」

ミシユアルの尤もな疑問に、レイは安全性と救出に向かう問題点を口にした。

「……というわけで、海からの脅威に対してコテージは安全だ。だが、こんな長時間続くスコールは稀だと言える。おそらく、ここ数年の天候異常の一つだろうが」

コテージは元々、自家発電のシステムを採用していた。その自家発電装置の故障で電源が落ちたのだらう。しかし状況が判らない以上、一刻も早く二人を救出する必要がある。

ところが、森の中の一本道は崖崩れで使えない。さらにはこのスコールで地盤が緩み、他の場所も崩れる危険性が出て来た。この状況で迂闊に森を抜けようとするのは二次災害を招く恐れがある。

本来、コテージのある入り江には空からが一番の早道なのだ。しかし、王室へりに夜間飛行の装備はなく、軍用ヘリを使うにしてもスコールが止むまで飛べないという。

「ではどうするつもりだ？ 指を啜えて見ているのか。それとも、雨が止むよう神に祈るか？」

舞が土砂の中にはないと聞き、若干の余裕が生まれたミシユアはレイを揶揄した。

すると、レイも余裕の笑みを浮かべ……。

$$\begin{array}{c} \hookrightarrow \\ * \\ \hookrightarrow \\ * \\ \hookrightarrow \\ * \\ \hookrightarrow \\ * \\ \hookrightarrow \end{array}$$

内心、無駄だよ、ね、と思いつつ、舞はティナに傘を差しかけた。二人は土砂降りのスコールの中、コテージの裏までやって来た。ティナが言うには、そこに自家発電機が置いてあるのだという。

（なんか……年季の入った建物というか、やっぱり小屋？）

ティナが「裏の小屋にあるはずよ」と言った時、？小屋？はあんまりだろう、と思ったが……謙遜じゃなかったらしい。コテージより一階分低い場所に、木で作られたまさしく？掘っ立て小屋？がある。

「何度も修繕はしているのよ。でも、コンクリートで囲んでしまうと風情がなくなるって、レイが」

ティナは言い訳をしていたが……。

小屋の屋根は見事に吹き飛び、まるで巨大なバケツ状態になっている。発電機が水浸しではハッキリ言って使い物にならない。

それでもティナはどうにかしようと思ったのか、木のドアを開けようとする。

「待って！ 大量の水が飛び出して流されちゃったら大変ですよ。諦めましょう」

「でも……電気がないと連絡が取れないわ。公用車で来ていたら無線を積んでるんだけど」

公用車を無断拝借したら、後々問題が大きくなるかも知れない。舞がそう言って、自分が運転しやすい軽四を選んだのだ。

とはいえ、このスクールの中、万に一つも海まで流されてしまったら洒落にならない。アズウォルドのビーチに憧れて、泳ぎたいと思ったのは確かだ。しかし、この状況で海に放り込まれるのは勘弁して欲しい。

「とりあえず、コテージの中に戻りましょう。こういう時に動くのって危険ですよ。着替えて救助を待ちましょう。雨が止んだら、こっちから車で引き返してもいいし」

その直後、舞とティナの耳にギシギシと妙な音が聞こえてきた。舞が周囲を見回すと、どうやら自家発電機の置かれた小屋から聞こえてくる。

「ね、え……ティナ。コレって何の音？」

「判らないわ。マイ、急いで戻りましょう」

ティナに急かされ、舞がコテージに向かう階段に足を掛けた時だった。

二人の背後で掘っ立て小屋の壁が、内圧に耐え切れなくなったようにメリメリと壊れ始め——次の瞬間、水の塊が竜のようになり、二人に襲い掛かった！

(15) プリンセスの願い

(――正気の沙汰ではない)

ミシユアルは巡洋艦ハイドレンジアの上から、荒れ狂う大海原を見つめて呟いた。

彼らは巡洋艦に乗り、入り江と外海を隔てた岸壁が見える位置まで来ていた。これ以上は近づけないと言い、小型のモーターボートが下ろされる。レイたちはそのモーターボートで入り江に繋がる回廊付近まで行くと言う。

ミシユアルの目にそれは、どう考えてもまともな手段とは思えなかった。

「レイ……多くを尋ねたくはないが……。まさか、その小船でこの荒波を漕いで行くつもりではあるまいな？」

「小船とは失敬だな。着岸用のモーターボートだ。十人乗りでどれだけ波を被っても沈まない設計になっている」

そう言いながら、レイを含む十名が潜水服に着替えボーターボートに乗り込む準備を始める。

「待て。国王自ら行くつもりか？　なんという危険な真似を――どうして誰も止めぬ！」

「当たり前だ。私の潜水技術は国内トップクラスだぞ。それに我々は、上陸作戦だけならネイビーシールズにも劣らない自信がある」

呆れるミシユアルとは逆に、レイをはじめ潜水チームの面々は余裕だ。

昼間に見た美しい紺碧の海とは違い、海と空の区別すらつかない真っ暗闇である。ミシユアルにしてみれば、海中を行くくらいなら

多少地面が危うくとも森の中を進んだほうがマシだと思える。

だが、これが海洋の民というもののなのだろう。ミシユアルたちが自らを砂漠の民と称するように。

納得できないまでも、理解しようとする彼にレイが言った。

「シーク・ミシユアル。どれほど遅くなっても、あと数時間でこの雨は止む。このハイドレンジアにはヘリが搭載してある。止み次第、君はヘリで入り江のコテージに向かってくれ」

レイの言うことは判る。だがミシユアルより先に、彼らが舞の元に駆けつけるのを、黙って見ているわけにはいかないのだ。

そして同じ国王であるレイに出来ることを、出来ないと言口にするのは恥であった。

「馬鹿を申すなっ！　アーイシャを救う権利は私のものだ。他の誰にも譲るつもりはない。さあ、私の分の潜水服を用意してもらおう！」

「いや、それは……」

口籠もるレイを無視して、体格の似た男を捕まえると「その潜水服を私に寄越すのだ」と奪い取る。

およそ海軍の兵士かプロのダイバーと言った辺りだろう。一国の国王に命じられては？　ノー？　とは言えない。

「ここは砂漠ではないんだ、ミシユアル！　頼むから、余計な時間を取らせないでくれ。君の妻の顔を、私以外の男に見せないと約束する」

「無駄な説得に余計な時間を取るものではない。さあ、案内いたせ」
ミシユアルはさっさとモーターボートに乗り込もうとする。

その後ろを、青い顔をしたレイが追いかけてきた。

「ふぎゃーっ！」

舞は水圧によりコテージのほうに吹き飛ばされた。可愛らしく叫びたいところだが、とても叫び声を選んでいる余裕はない。

砂漠の上を逃げまくるのは大変だった。ジャンビーマを向けられ、殺されそうになったこともある。麻袋を被せられて荷物のように運ばれた時は、本当に売られるのかと思ったほどだ。

思えばここ数ヶ月、その前の二十年間とは比べ物にならないほど、貴重な経験を積んできた。

だが今回は……水に弾き飛ばされ、流されそうになったのだ。これも出来ればやりたくない？ 貴重な経験？ の一つだろう。

（何でっ！？ ハネムーンに來ただけなのにっ。何でこうなるのよっ！）

ミシユアル国王がいたら、『お前が勝手に動くからだ！』と怒鳴られるのは目に見えている。

それでも、舞はここに彼がいないことが、例えようもなく不安だった。

（わたしがこんな目に遭ってるのに……なんでアルってば、助けてに來てくれないのっ！？）

まさか舞たちの通って來た道が、直後に崖崩れで通行不可になったとは夢にも思わない。

すぐ後ろを追いかけて來てくれると信じていた。怒られるかも知れないけど、ティナを一人きりには出來ないという、舞の気持ちを判ってくれると信じたかったのだ。

でも、來てくれないってことは……。

（ひよっとして、わたし、見捨てられた？）

水に揉みくちやにされながら、悪い想像ばかりが頭をよぎる。

舞は地面を這うようにしてコテージの横に出た。どうにか水の拘束から逃れ、ホッと息を吐く。その時だ、自分のすぐ後ろにいたティナのことを思い出し、振り返った！

「……ティナ？」

真後ろにいたはずの彼女の姿がない。

周囲をキョロキョロ見回すが、舞より先に逃げられたはずがないのだ。と、いうことは……。

「ティナ！　ねえ……返事してよ。やだ、何でいないの？　ドコに行ったのよお……ティナ……ティナーッ！」

恐る恐る、舞は這い上がってきた方に戻る。

雨の激しさは変わらないが、小屋の壁を突き破って吹き出した水は少し弱まっていた。数秒間躊躇った後、舞は階段を下り始める。

——ひよっとしたら、あの水圧でティナは木か壁にぶつかり、意識がないのかも知れない。

その時はすぐにコテージに運び込み、無事な方のベッドに寝かせて、自分が助けを呼びに行かないと。舞は気丈にも良い方向に考えるが。

——だけど、もし、周囲を探してもいなかったら？　もし、海に流されていたとしたら？

(どうしよう。わたし、どうしたらいいの？ アル……アル、お願い、一生のお願い。二度と我がまま言わないから……助けに来て。ティナを助けて)

舞は胸の中で懸命にミシユアル国王の名を呼び続けた。

(16) 世界中の誰よりも

背後から襲い掛かった水に、搦め捕^{から}られた感じだった。

声を上げる間もなく、ティナは流されたのだ。海に落ちたことはあっても、流されたことはない。はたと気付いた時には、小型クルーザーを係留した栈橋の辺りまで流されていた。

(ここを越えたら海に落ちてしまう。なんとしても踏み止まらないと……)

ティナは手を伸ばし、栈橋の手すりに必死で掴まる。

スコールの中、海に叩き込まれて、泳いで戻って来れるほどティナは泳ぎが得意ではなかった。せっかく常夏の国にいるのだから、とレイに連れられ何度もこの入り江で泳いだが……。結局、ティナの運動能力がそれほど高くない、と証明しただけだった。

(レイは何でも出来るのに。私は……)

そんなことを考え始めると落ち込むばかりだ。

ティナにとってレイは、掛け値なしの王子様であった。父という魔王の呪いから解き放ってくれた英雄と言うべきか。それにレイは、国民からはもちろん、諸外国においても、身近な王宮スタッフからも慕われている。そんな素晴らしい国王の王妃として、この二年間、ティナはただ隣に立っていることしか出来なかった。

チカコの言う通り、レイは子供が大好きだ。兄弟は全て母親違いで、彼は家族らしい家族を知らない。何の取り得もないティナに出来ること、それは一日も早くレイに家族を作ってあげることだけ……。

（それだけ、だったのに）

胸に熱いものが込み上げ——意識が違うことに向いた瞬間、ティナの手は手すりから離れていた！

真っ暗な海中に体が沈む。

マキシ丈のスカートが足に絡み、ティナの自由を奪った。こんなことならミニにしておけば良かった、と思っても後の祭りだ。

（私はこのまま死ぬのかしら？）

もう一度、レイに逢っておきたかった。

でも、ティナが死ねばレイは心置きなく再婚できる。ティナも、わざと悪女のふりをしなくても済む。これで皆が幸せになれるのなら……。

ティナが無駄な抵抗を止め、覚悟を決めた時だった。

背後から抱き締められ、引っ張り上げられる。それは二年前、アズルブルーの海で味わったものと同じ感じがして——。

海面に顔を出した瞬間、同じ叱声が聞こえた。

「いい加減にしてくれないか、ティナ？ 君はよほどポセイドンが恋しいようだ……もう、私の妻なんだぞ」

目の前にレイがいる。

神様がティナの願いを聞き届けて、二年前の幻を見させて下さっ

ただ。ティナはそう思った。

「ああ……神様、ありがとうございます。もう一度、レイに逢えて……私は思い残すことはありません」

「ティナ、ふざけている場合じゃない！　アーイシャ殿は何処だ！？」

その言葉にティナはハツとした。

小屋から吹き出した水は、ひよつとして舞をも押し流したのだろうか？　ティナと同じように、この入り江に放り込まれたのだとしたら……。

「レイ……ああ、どうしましょう。マイは私の前に居たの。私は流されてしまって……マイがどうなったのか判らないわ」

ティナの言葉に、レイは目を伏せ低い声で呟いた。

「それは不味いな。君の金髪は暗闇に光って見えた。だが、アーイシャ殿の髪だと……」

夜の海で黒髪など見つけられるはずがない。それに、ティナはオフホワイトの明るい色のワンピースを着ているが、舞が着ていたのは彩度の低い色合いが多く使われたエスニック柄。

ティナはそのこともレイに伝えた。

「どちらにしても、君をコテージに連れて行ってからだ」

そう言うのと岸まで上がり、レイはティナを抱き上げようとする。

「私はいいの。お願い、マイを探して下さい。私はもう一度小屋の辺りを」

「いいから、黙って言う通りにするんだっ！」

それは聞き慣れないレイの怒声であった。

ティナは彼に抱き上げられ、緊張した面持ちでレイの顔を注視する。

「一国の王妃の身に何かあれば、ただでは済まないんだ。たとえば故であれ、クアルン王妃が我が国で命を落とすようなことにでもなれば……」

レイの声は深刻極まりないものであった。

彼の懸念する事態になれば、アズウォルドのような小国にとって国際的イメージの低下は免れない。テロにより国王を殺された事件が掘り起こされ、再び危険な国と呼ばれるだろう。

それに、あのミシユアル国王が許すはずがない。

無理矢理ではないにせよ、舞を入り江のコテージまで連れて来たのはティナだ。^{アクション}事故が異常気象により長時間降り続くスコールのせい、なんて言い訳も甚だしい。

「ごめんなさい。謝って済むことじゃないけれど……マイに何かあった時は、私が責任を取ります」

「責任？ 何をどうするつもりだ？」

「判らないけど……私がマイを連れ出したのだから。私も死んだら、きつとシーク・ミシユアルだってお許しに」

「馬鹿を言うな！ そんなこと……万に一つ、クアルンと戦争になったとしても、私は君を差し出すつもりはない」

レイの言葉にティナは目を見開いた。まさか、国王としての立場が第一の彼の口から、そんな台詞を聞くとは思ってもいなかったからだ。

ティナは、それどころではない、と思いながらも、つい気になって尋ねてしまう。

「で、でも……私がいなくなれば、あなたは再婚出来るのよ。私みたいな役立たずの女のために、この国を窮地に陥れるような真似だけは出来ないわ！」

すると、レイはコテージの前でティナを下ろし、濡れた髪をかき上げた。

「――この国も国民も、私は全力で守るつもりだ。だがティナ、君は違う。君だけは、私の命を盾にしても守る覚悟でいる。誓って言うが、ローラの子供の父親は私じゃない。君を裏切ったと思われるのは心外だ」

「でも……でも、彼女は二月の終わりにアズワールドに来ていたわ」
「二月の終わりに我が国にいて、妊娠五ヶ月の女性が何人いると思うんだ？」

「二人で、会っていたって、タブロイド紙に……」

ティナの声がだんだん小さくなる。

「映画の撮影現場を視察して、挨拶をしたただけだ。それに、私が会うだけで女性を妊娠させられるような男じゃないのは、君が一番知っているはずだが」

レイの返事にティナは再び声を上げた。

「そ、そうよ！ 判っているもの。あなたがもう、私に興味がないってことは……だから」

「そうじゃない！」

レイは一旦言葉を切ると、ティナの頬に手を添えた。

「アーイシャ殿の搜索に私も加わる。君はコテージから一步も出るんじゃない。説明はその後だ。……いいね」

軽く口づけられ、ティナも頷くよりほかない。

「マイを助けて……お願いだから。マイが無事なら、私」

「えーっと？ わたしがどうかした？」

突然、コテージの中から声が聞こえ……そこに立っていたのは、

クアルン王国アーイシャ妃、もとい、舞であつた。

(17) ロマンスに向かない男

さすがの舞でも、まだ水が噴き出している小屋には近寄れなかった。

コテージの正面に回り、入り江の砂浜方向を目指す……。――

(どこからが海か判んないじゃない！)

夜の海と言うのは本当に真っ暗だ。ましてや、海面を叩く雨音が激しくて、どんな気配も感じ取ることが出来ない。

無駄にウロウロするくらいなら、車を走らせて助けを呼びに行こう。舞はそう考えた。

森の入り口には警官が立っていて、舞たちは引き止められたのだ。乗っているのがティナと判り、「この後に陛下たちもお見えになるのよ」と彼女が言うと、警官たちは最敬礼で通してくれた。

(アソコまで行けば、きっと警官が助けてくれるわ。大勢で探したほうが絶対にマシよ！)

舞はティナのことを思って泣きそうになる。

でも、呑気に泣いている場合ではないのだ。パンパン顔を叩くと、邪魔なスカートを腰の辺りまでたくし上げ、裾をウエストに押し込む。そのまま、コテージに駆け戻った。

窓が割れ、雨風が吹き込む部屋に飛び込み、バッグの中を床にぶちまけて車のキーを探す。

(何でないのよ……絶対この中に入れたのに……)

舞が半泣きでぶつぶつ言っていると、ふいに話し声が聞こえたのだ。

（え？ ティナ？ でも、男の人の声が聞こえるような……）

走って出て行こうとした時、ティナが舞を呼ぶ声ではなく、男性の話し声が聞こえたので少し迷った。どうしてここに男性がいるのだろうか？ まさか……ミシユアル国王たち？ それともレスキュー隊だろうか？

まだ数ヶ月とはいえ、クアルン王妃の自覚が芽生えつつある舞である。不特定多数の男性がいる場所に、アバヤやヒジャブも身に着けず出るわけにはいかない。

そんな気持ちで恐る恐る覗き込めば……。

コテージの入り口にティナとレイ国王が立ち、悲壮感漂う顔で見つめ合いキスを交わしている。

舞の場所からでは、二人が何を言ってるのかよく聞こえず……。

（今、出て行ったら、ひょっとしてお邪魔？）

悶々と悩んでいると、ティナが「マイ」の名を呼んでいることに気付き、思わず声を掛けたのだった。

「マイ！ 良かった……マイ、無事だったのね」

「ティナも海に流されたんじゃないかなかったんだ！ 良かったあ。本当に良かった」

駆け寄るティナと抱き合いながらお互いの無事を確認する。

ティナも舞と同じ心配をしていたらしい。だが、ティナのほうは本当に海に落ち、冗談では済まなくなるところだったのだ。

ティナは夜目にも頬を染めながら、「レイがね……助けてくれたの」と小さな声で言った。

「さっすがー！ ヒロインのピンチに駆け付けてこそヒーローよね！」

と言いつつ、自分のヒーローはどうなったのだろう、と考える。

「アーイシャ殿が無事で何よりです」

レイ国王はそう言うのと浜辺に向かって歩いた。海から上がってくる潜水服を着たダイバーたちに、何事か命じ始める。

舞は濡れるのも構わず、

「レイ陛下！ あの、アルは……ミシユアル陛下はどこに」

レイ国王にミシユアル国王のことを尋ねようとした。

しかし、彼は慌てた様子で舞をコテージに押し戻そうとする。

「アーイシャ殿、こちらに出てきてはいけない。妻のそんな姿を他の男が目にしたことを知れば、彼に決闘を申し込まれかねない」

舞は丸出しになっている太腿に気付くと、慌てふためきスカートの裾を下ろす。

レイ国王は海のほうに視線を向けながら、

「シーク・ミシユアルは巡洋艦で待機して貰っています。スコールが止み次第、ヘリで来るは、ず」

そこで彼の言葉が止まり、紺碧の瞳を見開いた。

舞も自然にそちらに視線が移る。

すると、海から上がってくる大きな影が一つ。他の皆と同じ鮮やかなオレンジの潜水服を着込んでいるが、あれは……。

「ア……ル？ アル、アルッ！」

ミシユアル国王は来てくれた。

やっぱり、舞にとって王子様は彼しかない。そんな思いを込め、舞はミシユアル国王の名前を叫びながら浜辺に向かって走る。

（何て言おう……やっぱり、ゴメンなさい、かな？　それとも、愛してる、のほうが）

色々な感情が胸の中を錯綜した。

そして、抱きつこうと思った瞬間——ミシユアル国王は舞の横を大股で駆け抜けたのだ！

「さあ、ここまで泳いできてやったぞ！　レイ、この私が？　足手まとい？　だと言った言葉を取り消せっ！」

舞には何のことかサッパリ判らない。しかし、ミシユアル国王の向こうで、レイ国王は水の滴る前髪をかき上げながら、「ああ、判った。前言を撤回する。君は素晴らしい勇者だ」困ったように笑ったのだった。

$$\begin{array}{c} \hookrightarrow \\ * \\ \hookrightarrow \\ * \\ \hookrightarrow \\ * \\ \hookrightarrow \\ * \\ \hookrightarrow \end{array}$$

「まったく。他国で面倒を起こすなど言つたであらう。舞、少しは反省しているのか？」

⋮

約二時間後、嘘のようにスコールが止んだ星空の下、舞はミシュアル国王とヘリに乗っていた。

コテージに避難していた時は他の兵士やレイ国王たちが居た為、ひたすら舞を隠すようにしていたが……。二人に一旦別れを告げ、ヘリで入り江を離れた途端、ミシユアル国王は小言を言い始めた。

舞が崖崩れのことを聞いたのはコテージに避難していた時だ。

携帯も固定電話も繋がらず、崖崩れでたった一つの道路は通行できず、地盤の状態が悪くて森の中に入ることも出来なかったという。追いかけて来なかったのではなく、来れなかったと知り、舞は心の中でホッと息を吐く。

スコールのせいで軍用ヘリすら飛ばせず、レイ国王は海軍の巡洋艦と潜水チームを呼び寄せた。二人の王妃の安否確認の為、入り江と外海を繋ぐ狭い回廊を通り抜け、上陸作戦に出たのだった。

その作戦に周囲の制止も振り切り、ミシユアル国王が同行してくれたとなれば、本来なら感激ものだろう。

「舞、聞いておるのか？ 返事をいたせっ！」

苛立たしげなその声に、舞は背中を向けた。

（何よ……どうせアルにとって一番は国王としての名誉で、わたしはオマケなんじゃない！）

レイ国王はティナを抱き締めていた。

浮気騒動は？ 離婚の件はどうなったの？ とわざわざ聞くのは野暮と言うものだ。二人は朝までコテージに残り、その後、本島に戻ると言っていた。ティナは舞を見送りながら、

「クアルンと戦争になっても私を守るって言ってくれたの。だから……私、レイのことを信じるわ。何があっても、もし子供が授からなくても、愛は変わらないって」

ピンチに颯爽と現れて、女が一番聞きたい言葉をくれる。ティナが全部、水——今回の場合、海に流しても当然だと思う。

だがミシユアル国王に言わせれば……。

「あのレイが、国際的にダメージを受けるような問題を起こすはずがなかろう。全く、女というものは、なんと短絡的な……」

そりゃそうだろう。舞にだってそれくらいのことは判る。重要なのは、そう言って欲しいのであって、本当に戦争を起こして欲しい訳じゃない。

（なんでアルには、そういう女心が判んないのよっ！）

舞が黙り込んでいると、ミシユアル国王はブツブツ言い始めた。

「それほどまでに、レイに遅れを取ったことを怒っているのか？昨夜ほどの激しい雨に打たれたのは、人生で初めての経験だ。それに、海で泳いだことも数回しかない。他国の軍を勝手に動かすことなど出来ぬし……」

その言葉を聞き、舞は振り返るなりミシユアル国王に抱きついた。ちよっとだけヘリが揺れてビククリしたが……操縦士からクレームは出なかった。

「最初に名前を呼んで欲しかったのっ！無事でよかった……死ぬほど心配したって、嘘でもいいから言って欲しかった。ただ、それだけ」

「馬鹿者！心配どころで済むわけがなかろう。舞、今後はせめて、私の手が届く範囲で窮地に陥るようにしてくれぬか？」

はい、と答えるのも間違っている気がする……舞は小さく頷き、
キスで応えたのだった。

(18) キスの誘惑

コテージの中は静まり返っていた。

雨は降り出した時と同じく突然止み、迎えに来たヘリがミシュアル国王と舞を乗せて飛び立った。リビングにいた海軍の兵士や潜水士たちも別のヘリで引き上げる。代わりにやって来たのは護衛官や衛兵だ。

彼らを伴い、レイは崖崩れの様子を確認に向かった。

(あの凄い音が崖崩れだったなんて……)

舞と一緒に話を聞き、ティナは背筋が寒くなる。

もし舞を巻き込んでいたら、とんでもない事態になるところだった。舞の好意に甘えて、年長者でありながら瑠璃宮殿を飛び出すなんて……。王妃にあるまじき行いだと、責められても文句は言えない。

ティナは無事であったほうの部屋に独り佇んでいた。ベッドの端に腰掛け、テーブルに置かれた電池式ランタンをジッと見つめる。

レイはティナの身を案じて、スコールの降り注ぐ海を泳いできてくれた。

何でもないことのように言っていたが、本当は国王として許されぬことだろう。その証拠に、巡洋艦の出勤履歴を消し、公表しないように密かに命じていた。おそらく、サトウ補佐官にも報告しないつもりなのだ。

それにこの騒動自体も、レイは自分の責任だと軍や警察関係者に

告げていた。

ミシュアル国王と舞をコテージに招いたのは自分で、ティナに舞を連れて先に行くよう命じたのも自分である、と。

夫婦生活がなくなったことと、ローラ・ウィリアムズの件は別なのだ。

レイは浮気などしない男性だから、ティナ以外の誰かと関係したのなら、それは本気に違いない。だが二年前、どれほどティナが誘惑しても、レイが落ちることはなかった。初めてティナを抱いたのは、正式に結婚した後だったのだから。もし他の誰かを愛したなら、ティナと離婚するほうが先だろう。

レイは十代の少年のように、自制心を失って女性に飛び掛かるような真似はしない。

（愛されていたのに、こんな愚かなことをしてしまつて……。呆れて、今度こそ捨てられてしまうかも知れないわ）

オレンジ色のランタンの灯りは、しだいにゆらゆらと揺らめいた。それは、ティナの涙のせいだった。

「また、泣かせてしまったようだね。長い間、独りにして済まない」

ドアが開くと同時に、レイの声が聞こえた。

ティナは慌てて手の平で頬を拭い、顔を上げる。

「いいえ。あの……私たちはいつまでここに？」

「さあ、いつまでかな」

「……？」

レイの言葉の意味が判らず、ティナは首を捻る。

「無線で呼ぶまでコテージには近づくな、と命じてきた。ここでのな

ら、正直に話せるような気がしてね」

「……正直……話って」

胸の奥がざわめき、ティナの涙腺は一気に緩んだ。

「ごめんなさい……本当に、ごめんなさい。でも今は信じてるわ……あなたのこと。もう、遅いかも知れないけれど、私はあなたの妻でいたい……」

手で口元を覆い、ティナはしゃくりを上げながら気持ちを伝えた。
「愛してるの……二年前と変わらず、ううん、それ以上に。相応しい妻でいたただけなの。みんなに、そう思ってた……それだけだったのよ。あなたが子供は要らないと言うなら、私も要らない。もっと、魅力的な……あなたが好む女性になるから……お願い、レイ」

直後、ティナはレイの胸に抱き締められていた。

「マイ・エンジェル——それ以上魅力的になっても、私の愛はこれが精一杯だ」

レイは柔らかな笑顔で彼女の顔を覗き込み、甘い声で囁いた。

「そ、そんな……だって……」

二ヶ月も妻として愛して貰えないのに。ティナはその言葉を飲み込む。

すると、レイは彼女の隣に座って優しく肩を抱き寄せ、信じられない言葉を口にしたのだ。

「ティナ……君の？妊娠しなければならぬ？という、同じプレッシャーを私も感じていた。素直に血の繋がった家族が欲しいという気持ちと、君に子供を与えてやりたいという願い。努力が結果に直結しないのは初めての経験だね。どうすればいいのか判らなくなり……」

？抱かなかった？のではなく？抱けなかった？彼は悲しそうに告白する。

「どうして？　どうして言ってくれなかったの？」

話してくれていたなら、こんなに悩むことはなかったのに、とティナは思う。

だが、レイは伝えたという。そう言われたら、最初の数回『駄目だな、疲れているらしい』『今日は無理みたいだ』そんな言葉を口にしていた。

ティナは自分のことに必死で、レイの表情をちゃんと見ていなかったことに気付く。きつと今と同じように、アズルブルーの瞳が悲しみに沈んでいたはずなのに。

「ごめん……なさい。最低だわ、自分のことしか見えてなかったの……」

「いや、君に伝わってないことはすぐに判ったんだ。何が駄目なのかハッキリ言えばよかったんだが……私にも男の見栄があって言葉には出来なかった」

女性より男性のほうが繊細だと聞いたことがある。

ティナは自分が不幸だと嘆くあまり、思いやりの心を忘れてしまっていたのだ。

「この間もそうだ。シーク・ミシユアルは何においても自信に満ち溢れている。彼ならこんな情けないことには……そう思うと、？種付け？なんて酷い言葉で君を傷つけた。悪かった……私を許してくれるかい？」

もう、謝る言葉すら口に出て来ない。

ティナは黙って頷くだけだった。

レイが不妊検査を拒んだ理由もティナの為であった。

彼は自分がアズル王室唯一の王子となった時、生殖能力を確認す

るため一通りの検査を受けていた。当時、庶子に王位継承は認められておらず、万一の時は法改正が必要となるからだ。

そして、自分には問題がないと知りながら、彼は一言も口にしなかった。

軽い不妊治療で済むような問題であればいいが……そうでなければ、ティナが離れて行くことが怖かった、とレイは言う。

「でもティナ、君がそれほど望むなら検査を受けてみればいい。私も一緒に心理セラピーを受けるのも悪くない。そう思ったんだが……」

「もういいの！ もう、そんなことどうでもいいの。傷つけてごめんなさい。私、あなたの傍に居られるなら、何も要らないと思ってこの国に来たのに。一番大事なあなたを踏みつけにしたなんて」

「いや、ティナ、そうじゃなくて」

「もう私の為なんて思わないで！ お願いだから、あなたの為に、私にも出来ることを教えて」

ティナは真剣に言ったつもりだが、予想に反してレイは声を立てて笑い始めた。

「レイ？ あの……」

「君は本当に早とちりで、人の話を聞かないな」

そう言うとティナを抱き上げ、膝の上に横抱きにする。そのまま強く抱き締められ、激しいキスに唇を開かされた。先ほどの軽い口づけとは違い、スコールのような激しさでレイは彼女の唇を奪う。

唇が離れた瞬間、ティナはあることに気付き真っ赤になった。

「う、うそばかり……だって、あの」

「駄目なままの方が良かったかい？」

「そうじゃ……ないわ……でも」

ヒップの下に硬いものが当たっている。レイのように誇り高い男性が、言い訳にあんな嘘をつくとは思えない。

「欲望に忠実で、底抜けに楽しそうな新婚カップルを見ていて思い出したんだ。私たちは一年以上、妊娠を目的としたセックスばかりだったね。――今はただ、君と楽しみたい」

誘惑の言葉を聞き終える前に、ティナはレイの唇をキスで塞いだ。

(19) 幾度も愛をささやいて／R (前書き)

★性描写があります、R15でお願いします。

(19) 幾度も愛をささやいて／R

レイの反応を感じ取った瞬間、我慢できなくなったのはティナのほうであった。

着替えたばかりのシャツを彼女自身の手で脱がせる。彼の言う通り、妊娠のためじゃないセックスなんて何ヶ月ぶりだろう。純粹に彼を欲しがっている自分に、ティナは驚いていた。

そして、久しぶりに触れたレイの体だった。

無敵の逞しさではないが、均整の取れた見事なボディラインである。適度に泳いでいるせいだろう。規則正しい生活を好むレイなら、きつと十年後もこの体を維持しているに違いない。

ティナも、絶対に手は抜けない、と決意を新たにしつつ……。

「何を焦っているんだい？ クリスティーナ」

上から涼やかな声が降ってくる。

顔を上げると、少し湿って黒っぽく見える髪を揺らしながらレイは笑っていた。ランタンの灯りに照らされ、アズルブルーの瞳がきらきら光る。

レイは公式の席以外では、ティナを誘うときだけ『クリスティーナ』と呼ぶのだ。

ティナを膝から下ろすと、彼は上半身をはだけたまま、ベッドの中央に横たわった。

「焦らずに全てを脱いで、ここまでおいで、マイ・スウィート」
悪戯っ子のようにレイはウインクしている。

「それって……私にストリップをしろってことなの、レイ？」

「ストリップかい？ それはいいね。ポールがないのが残念だ」

レイの返事にティナは口を尖らせ、

「国王陛下はポールダンスがお好きなのね。皆に言いふらしちゃうかしら」

「では、毎夜、王妃が楽しませてくれる、と答えておこう」

「私はそんなことしませんっ！」

背後でクスクス笑いが聞こえていたが、ティナが脱ぎ始めるとピタリと止んだ。

彼女はレイに背中を向けたまま、袖つきのシンプルなワンピースタイプの部屋着を脱ぐ。そして下着も順に外していく。ショーツを足の先から外した直後、後ろから抱き上げられベッドに押さえ込まれた。

レイはすでに裸である。

情熱的なキスの嵐に、ティナはあっという間に訳が判らなくなった。白い磁器のような肌は見る間に紅潮して熱を帯び、息が上がる。彼の唇も指先も……まるで魔法のようだ。激しく揺さぶられ、ふいに止められ、気が付くと啼くような声でティナからねだってしまう。

「ティナ……私のクリスティーナ。いつまでも、私だけの天使でいて欲しい」

「好きよ、レイ。あなたに？クリスティーナ？と呼ばれるのが凄く好き」

「いつも呼ぼうか？」

「それは……だめ。だって」

背筋がゾクリとして、しだいに下腹部が火照ってくる……公務中にそんな風になったら、想像するだけで恥ずかしい。

「ああ、なるほど」

レイはティナを背後から貫きながら、納得したように囁いた。

「ここがこんな風になるのなら……それは恥ずかしいね、クリスティーナ」

「やだ……あっん、もう……レイったら」

「なんだい、クリスティーナ？　もつと、激しく動いて欲しいのかな」

ティナは愛する人に組み伏せられ、快楽の奔流に飲み込まれる。

「愛してる。君を愛しているよ。どんな未来も、二人で乗り越えて行こう」

数え切れない悦びの果てに、レイのそんな言葉を聞きながら……

$$\begin{array}{c} \hookrightarrow \\ * \\ \hookrightarrow \\ * \\ \hookrightarrow \\ * \\ \hookrightarrow \\ * \\ \hookrightarrow \end{array}$$

舞が目を覚ました時、異常なスコールが嘘みたいな晴天だった。太陽は中空にきている。記憶があるのはヘリの中で、ミシユアル国王にキスしたところまで……。

（まあ、女心とか……。全然計算しないのがアルのいい所だし、ね）

あれがレイ国王だったら、まず舞を抱き締めて無事で良かった、とか言ってから文句を言うだろう。本当はどっちが一番か微妙でも、君が一番、と答えられる人だと思う。そのほうが嬉しいし、女としても気分がいい。

でも、ホントは違うんだろうな、と思えてしまうことは……。

（わたしって、やっぱリアルが好きなんだ）

と、再確認した。

そういうレイ国王はズルイような気がするのだ。朴念仁で無神経でもミシユアル国王のほうが誠実で嘘がないように感じる。

舞はそんなことを考えつつ周囲を見回した。

彼女が寝かされていたのは天蓋つきのベッドである。

だが、王宮にあるようなゴージャスなものではない。シンプルな木枠のベッドで、天蓋に掛けられたレースも……例えは悪いが蚊帳かやのような印象だ。

それをぐり抜け、舞は素足で床に下り立った。

（こ、ここってドコ？）

アジュール島の瑠璃宮殿か、本島の王宮に戻るのだろう、と思っていた。しかし……。

その部屋は見たことのない内装だった。宮殿やホテルの一室というより、平屋のコテージに近い。庭が見える窓はフルオープンでそこから出入りするらしい。庭にはヤシの木が見え、その向こうにプールがある。でも、反対側の大きめの窓から見える景色は……紺碧の海！

「お目覚めでしょうか？」

背後から声を掛けられ、飛び上がるほどビックリした。

「あ、申し訳ございません、アーイシャ妃殿下。わたくしは当リゾート・スパの女性バトラー、クロエ・アディソンと申します」

長い黒髪を編み込みでビシッと整え、さらにアップにしている。ほつれそうな部分はピンで留める、という念の入れようだ。制服なのかタキシードのようなスーツを着て、細身のズボンが凄くカッコいい。

王宮で出会ったレディ・アンナと同世代かな、と舞は想像した。

「えっと、ここは……リゾート・スパ？ あのバトラーって」

「ここは国内で最も美しい砂浜があると言われる、セルリアン島でございます。リゾートホテルが数多く並び、そのほとんどにヘリポートが設置され、中でも当リゾートでは観光用の飛行艇もご利用いただけます——」

セルリアン島は王国内のほぼ中央に位置する島だった。

本島やアジュール島近くの海より、少し碧の掛かった優しいセルリアンブルーの海。肌理きめの細かいサラサラの砂浜と合わせて、観光客に人気の島だという。

そしてこの国立リゾート・スパは全室スイート仕様で、さらに、ヴィラがあった。上流階級を意識して、全てのヴィラにバトラーが置かれている。滞在中、客は主人となり『旦那様』『奥様』と呼ばれる。ほとんどのことをバトラーに頼むようになっていて、命令されなくても、主人が過ぎしやすいよう配慮するのが仕事らしい。

このバトラーは男性が多い。だが、女性だけで過ごす場合、女性バトラーを希望されることもあるためクロエの他に二人の女性バトラーがいるという。

「この度、ミシユアル国王陛下、アーイシャ妃殿下のご滞在に合わせまして、全室貸切になっております。妃殿下がどちらに行かれましても、館内は全て女性の従業員のみでございますので、ご安心下さいませ。この下に見えますプライベートルームも同様でございます」

クロエはにっこり笑って、綺麗な日本語で答えてくれた。

一番人気の島の国立リゾートを貸切なんて……相変わらず、ミシユアル国王のやることは桁違いだ。多分、舞の？ 憧れのビーチサイ

ド物語？を叶えようとしてくれたのだろう。

「あ、あの……陛下はどちらに？」

「はい。プライベートビーチに向かわれました」

舞は大きめの窓からビーチに目をやる。

人影は見えないが、木で出来た階段を見つけ……舞はヴィラを飛び出した。

(20) 情熱は嵐のあとで／R (前書き)

★性描写があります、R15でお願いします。

(20) 情熱は嵐のあとで／R

観光用パンフレットの宣伝文句に載っていそうな、本物の白いサラサラの砂浜に舞は足を下ろした。ビーチサンダルを履いているので足の裏は熱くない。

広いビーチでどうやってミシユアル国王を探そう、と悩んでいたが杞憂に終わった。

白い砂浜のほぼ中央、海を睨むようにミシユアル国王が立っていた。

それも随分久しぶりに見た、真っ白のトーブ姿である。同じく白のグトラを被り、黒のイガールで留めていた。トーブが潮風にはためく。その姿は？砂浜に立つシーク？とでもタイトルがつきそうな、不思議な光景であった。

舞は生成りのワンピース姿だ。

他には……なんとショーツ一枚しか身につけていない。ノーブラで素足にサンダルなんて、クアルンの歴史上、ありえないほどラフな格好の王妃かも知れない。

「えっと……アルーッ！」

ちょっと離れた距離で舞はミシユアル国王に向かって手を振った。勢いをつけたまま彼に駆け寄るが、舞は抱きついていいのかどうか直前で悩む。

次の瞬間――ミシユアル国王の手が舞のウエストを捉えた。そのまま一気に抱き上げ、ギュッと抱き締める。

「舞……私に昨夜と同じキスを」

「で、でも、人前でしたらダメなんじゃ」

「ここはアズウォールド。そんな法律はない。それに、誰も見てはおらぬ」

浜辺でキスなんて、ロマンス映画みたい！

舞はグトラの下に隠れた濃いブラウンの髪に手を添え、そっと口づけた。

「これだけか？」

「え？　だって……昨夜のキスって」

こんなもんだったんじゃ、と舞が言おうとした時だった。

舞の身体は砂浜にストンと下ろされ、直後、掬い上げるように唇を奪われた。息苦しいほど乱暴に口の中を蹂躪され、舞は思わず抗議の声を上げたくなる。

「ちょ、ちよっと……アル!？」

「王である私を欲情させ、さっさと眠ってしまった罰だ」

(よ、よくじょうって、わたしって何したのっ!?)

言われても全然思いつけない。

ただ、そう言えば

「アルが来てくれるのを待ってたんだからねっ。何で、レイ国王より早く来てくれないのよお。海でも砂漠でも、誰にも負けちゃダメ。アルは世界一の王様なんだから。世界で一番のわたしだけのヒーローなんだからあ」

とか何とか、半分寝ながら叫んでいた気はする。

でも、あんな台詞で欲情はしないんじゃない？　と舞が笑いなが

ら言う。

「キスした後、私の膝に乗り、しなだれ掛かりながらあの台詞を言ったのだぞ。それも、臀部で私の股間を刺激しつつ……さらには、柔らかな手の平で私の裸の胸元を撫で擦った！ ヴィラに到着した時、私はすっかりそのつもりであった。それを……」

この砂浜にヘリを着陸させ、階段を駆け上がり、ヴィラのベッドに舞を押し倒したという。

ところが、その時には舞はスースー寝息を立てていたと言うから、何ともフォローしがたい。ミシユアル国王は百パーセントその気になったムスコを宥めるのに必死だったらしい。

「ヘリポートではなく、砂浜に無理やり着陸させ、人払いまでしたというのに」

口惜しそうに言われると、何と言うか、本当に申し訳ない気持ちになる。

こんな真っ昼間から言ってもなあ、と思いつつ、

「えっと……じゃあ、今から……スル？」

馬鹿もの！ と怒鳴られるのを覚悟して身構えていると、予想外の返事が返ってきた。

「当たり前だ！ お前が目覚めるまで、ずっと待っておったのだからな」

「え？ えっ？ ええーっ!？」

（ビーチのど真ん中なんて、嘘でしょーっ）

なんと、ミシユアル国王の瞳は爛々と輝き始める。

舞がアタフタしていると、そんな心の声が聞こえたのか、彼はとんでもないことを口にした。

「そう言えば……アサギ島のビーチで、レイたちもコトに及んだとか、どうか聞いたが」

「コトってアレのコト？ う、うそっ！」

「婚姻前という噂だ。まさに、アズウォルドは楽園だな。それに比べれば私たちは夫婦なのだから。誰も文句は言うまい」

楽園でそういう意味じゃないんじゃ……。

言い返す間もなく、理性を溶かすようなキスが舞を包み込む。確かに、三六〇度どちらを向いても人影はなさそうだった。青い海、白い空に囲まれ、開放的に砂浜の真ん中で……。

（エッチしたいなんて言ってないってばーっ）

「ム、ムリ！ 絶対にムリだって。集中出来ないよ」

ミシユアル国王の唇が首筋を這い、手が腰からヒップ、太腿と撫で始めた時、舞は泣きそうな声で伝えた。

すると、彼はため息を一つ吐き「仕方あるまい」と口にする。すると、今度は唐突に舞を横抱きにした。砂浜の上を飛ぶように走り、階段を駆け上がる。

ヴィラに飛び込むと、さっきの女性バトラーの気配はどこにもなかった。

「舞、寝てはおるまいな」

さすがに少し荒い息で、ミシユアル国王は尋ねた。

舞は気圧されるようにコクコクと頷く。彼はさも嬉しそうに、天

蓋から下がったレースのカーテンをくぐり抜け、ベッドに舞を下ろしたのだ。

そして、ミシユアル国王はトーブを脱ぎ捨てる……その下は舞より身軽な格好であった。

しかも、昨夜からその状態を維持してたの？ と聞きたくなるような、立派なジャンビアーがそそり立っている！

（わたしも……脱いだほうがいいかな？）

舞もワンピースに手を掛けるが、

「余計なことを致すな。お前を脱がせるのは私の役目……楽しみを奪うでない」

ミシユアル国王はそんな言葉と共に、ワンピースの背中についたファスナーを引き下ろした。肌触りの良いコットンは足元に滑り落ち、舞は明るい陽射しの中、ショーツ一枚になる。彼はそのショーツにも手を掛け、引き摺り下ろした。

二人は一糸纏わぬ姿で、ベッドの上に横たわった。

「ね……アル。わたし、覚悟は出来てるから……」

「何の覚悟だ？」

「もし、わたしが男の子を産めなかったらってこと。でも、不意打ちはやめてね。それから、もし心変わりした時は、わたしのこと日本に帰らせて。それだけ……約束してくれる？」

舞にすれば思いっきり譲歩したつもりだった。

レイとティナがどうやって乗り越えていくのかは判らない。でもお国柄で考えれば、舞に男の子が出来なかった時のほうが、あの二人より大問題になると思う。

しかし……。

「そんな約束は出来ぬ」

「アル……」

「？妻は生涯ひとり？だと、何度言わせれば気が済む。アッラーに誓ったであろう、私の妻はお前ひとりなのだ。お前以外の女に、私の息子を産む権利など与えぬ。お前が日本に帰る日など永久に来ぬ舞、諦めて心ゆくまで妻の悦びを味わうがいい」

そう言うとき琥珀色の瞳を煌かせ、舞の身体にキスの雨を降らせる。甘く熱い蕩けるようなキスの連続攻撃は、舞から考える力を奪っていく。

（信じていいの？ でも、ダーウッドが……）

「人生には努力や知識では動かせぬ？運命？があるのだ。私がお前にそれを教えてやろう」

ミシユアル国王は極上の笑みを浮かべつつ、舞の……とても言葉に出来ない場所に口づけた。そしてゆっくりと、生温かい舌先が何度もある場所を往復する。

「や……ん、アルの意地悪……もう、だめえ」

「駄目ではなからう？ お前の欲しいものは何だ？」

スルリと、舞の身体に太く長い指を押し込みながら、平然とそんな言葉を口にする。指先で弄ぶテクニクも日々進歩している感じだ。

舞の身体に変化が現れると、たちまち動きを変えてしまう。巧みに焦らされ、ベッドの上で教えられたアラビア語を口走ってしまうくらいに……。

「ア、アル？ 最後しか判らなかったんだけど……」
「この命尽きるまで、抱くのはお前ひとりだと誓ったのだ……不満か？」

舞はゴクリと唾を飲み込んだ。

「ふ、不満じゃない。けど、今夜はこれくらいで眠って、また明日
ってことで」

「安心致せ、舞。お前はゆっくり眠るとよい」

「それって、どういう意味？」

「知りたいのであれば、教えてやろう——」

眼下に広がる紺碧の海で泳げる日は果たして来るのだろうか？
そんなことをチラッと考えつつ……舞は、琥珀色に艶めく情熱の
海に身を投じた。

編
　　f i n

紺碧の海

——金色の砂漠　編へ続く——

(1) 胸騒ぎのハネムーン／R (前書き)

★性描写があります、R15でお願いします。

(1) 胸騒ぎのハネムーン／R

「無理！ 絶対に無理だってば」

「心配いたすな。そつと進めればよからう」

楽観的なミシユアル国王の言葉に、舞は必死で抵抗する。

「壊れるって、アルは加減を知らないじゃない。すぐに無茶するんだから」

舞の言葉にいささかムツとした表情をしつつ、

「ガタガタ言わずともよい。黙って見ておれ」

そう言つてミシユアル国王はゆっくりと奥に進める。壁を擦りながらも、どうにかねじ込んで行く。

舞はその様子を固唾を飲んで見守った。

「アル……がんばって、もう少し……」

「わかっておる。そう急かすな」

彼の額に噴き出した汗は、頬から顎を伝い滴り落ちた。真剣な表情で、琥珀色の瞳を煌かせるミシユアル国王の顔を、舞はじつと見つめる。

(なんかもう……可愛いなあ)

ミシユアル国王が貫通する寸前――

「あんっ！」

舞は思わず声を上げた。

最後の最後で力を入れすぎてしまったようだ。それとも、ミシユアル国王の腕が太すぎたのか。

「やん、もう！ アルの馬鹿っ！ せっかく作ったのにい」

舞は三十分かけて作った砂の城が崩れ落ちるのを、残念そうに眺めるのだった。

小さいころ、幼稚園の砂場で作るのが大好きだった――？王子様の住んでるお城？。

舞はそのことを思い出し、セルリアン島のビーチでせっせと砂の城を作り始めた。しかし、この浜の砂はサラサラしていて上手く固まらない。なるべく掘って濡れた部分でチャレンジし、ようやく形になってきたところだった。

「お城が出来たらトンネルを作るの」

「トンネル？ なぜ、城にトンネルなのだ？」

ミシユアル国王は当たり前のような質問をする。

「い、いいのよ、理由なんか何でもっ！とにかく、仲の良いお友達と反対側からトンネルを掘って行って、真ん中で指が合うのがすっごく嬉しかったの！」

同じ幼稚園の名前も覚えていない男の子だった。

舞が極秘で、クアルン王国ミシユアル王子の婚約者選ばれたのが五歳の時。それ以前は公務員の娘として普通の生活を送っていた。当然、舞が通っていたのは、近所の公立幼稚園だ。

懐かしい思い出を舞が語っていると、とたんにミシユアル国王が不機嫌になったのである。

どうやら、一緒に遊んでいたのが男の子と知り、ヤキモチを妬きはじめてらしい。

（なんで幼稚園児に妬くわけ？）

そしていきなり、「私もその城にトンネルを掘る！」と宣言したのだった。

「だから言ったでしょ？　ここの砂はサラサラで脆いから、アルの腕だと太過ぎて崩れるって」

「……判った。では人を集め、もっと頑丈な砂の城を」

「いいって！　もういいからっ」

舞がパンパン手を払って立ち上がると、ミシユアル国王は悔しそうな顔をする。

彼にとって、思いどおりにいかず？　諦める？　という行為は相当な我慢を要するらしい。それも、愛する正妃の願いを叶えてやれなかった、ってトコも重要だ。

でも、彼に任せていたら、どこまで徹底的にやるか判らない。

結婚前に日本で会って間もなくの頃、『白馬の王子様がよかった』なんて、舞は勢いで口にしてしまった。それを真に受け、ミシユアル国王は本物の白馬に乗ってやって来たのだ。

（本物の城を砂浜に建てる、とか言い出したら……ああ、アルならやりそう）

「も、もういいんだって。その、アルのせいじゃないから」

「だが、砂の城の中で手を繋ぎたかったのであろう？」

「それは……アルとだったらどこで繋いでも幸せだから、いいの」

舞は二本立てのビーチパラソルの下、砂浜に座り込んだままのミシユアル国王の隣に寄り添い、そっと手を重ねた。

海外で過ごせるハネムーンは、あと一週間だけ。

クアルンに戻ればまた、王家のルールや国の法律、ムスリムの掟

……たくさんの制約に縛られる。砂漠の国の王妃になった以上、覚悟はしているが、不安を完全に消し去ることはできない。

「舞……」

自分の手をひっくり返し、ミシユアル国王は舞の手をしっかりと握った。

「……あん……」

握った手をそのまま引っ張られ、舞は彼の胸に倒れ込む。

「私となら、どこでも幸せか？」

「ん。そう言ったじゃない」

滅多に見られない海パン姿のミシユアル国王である。カラフルなハイビスカス柄がかなり可愛い。

かたや、舞は真っ白なビキニであった。彼にとって女性のイメージは黒いアバヤ姿だ。ところが、東京の結婚式で舞は純白のウェディングドレスを身に纏った。それはミシユアル国王に、新鮮な衝撃を与えたという。

今回、白い水着を用意させたのは彼自身であった。

舞は甘いムードに気をよくして、ミシユアル国王の胸にもたれ掛かる。

（浜辺で水着姿なんて……思いつきりハネムーン！　って感じで最高！）

二人きりでセルリアン島の国立リゾートを貸し切り、ビーチをはじめリゾート内の色んな施設で遊び……。ヴィラに戻ったら、心ゆくまで夫婦の時間を楽しむ。それもベッドの上だけとは限らず、たくさんの場所でミシユアル国王は舞を楽しませてくれた。

舞がうつとりしていると、彼の唇が舞の頬に触れた。くすぐったいが何となく気持ちがいい。

そのままゆつくりとお互いの唇を重ねてきて……ふいに強く吸われる。キスはタイミングや仕草に癖があるんだ、と舞は初めて知った。ミシユアル国王のキスにもだいぶ慣れてきて……。

「あっ……ああん。アル、それ以上は」

唇だけのつもりが、彼の手は知らぬ間に水着をずらし、舞の胸に直接触れていた。

それこそリズムカルに、舞の感じるポイントを的確に刺激してくる。

「どこでも幸せと言ったではないか？」

「そっそれは……手、を」

「手を、こうすればよいのか？」

言うなり、するりと今度は水着の下に滑り込ませた。

「ひゃあんっ！ バカあ……アルのえっちい」

見る間にスルスルと下を脱がせ、砂浜に押し倒してくる。

いくら誰も見ていない、と判っていても、真昼に外で裸になるのは抵抗を感じて当然だと思う。だが、舞の抗議を軽く無視して、彼は舞の膝を割り、その部分にキスしてきたのだ。

ひとしきり、口付けて舞がフラフラになったところにミシユアル国王の言った言葉――。

「舞……私の上に乗ることを許す」

許されてもヤダ、と言いたい反面、しょうがないなあと思えてしまうのが？愛？かも知れない。

その後、舞は？愛を籠めて？ミシユアル国王をお尻の下に敷いたのだった。

く＊く＊く＊く＊

国王夫妻がハネムーンを楽しむアズウォルド王国から約一万二千里。八時間の時差があるクアルン王国では間もなく夜明けであった。

広大なアブル砂漠を一頭の馬が駆けている。

アラブ馬の駿馬であったが、やはり相当スピードは落ちていた。サラブレッドより小柄な馬体に二人の人間を乗せ、夜を徹して駆けてきたのだ。当然かも知れない。

それでも馬は主人の窮地を知ってか、懸命に馬銜はみを取り、砂を蹴り上げて目的地を目指す。

『シャムス、疲れたであろう？ 辛くはないか？』

腕の中の妻にそう問いかけたのは、ミシユアル国王の乳兄弟にして側近、ターヒル・ビン・サルマーンだ。妻とともに国王夫妻に仕えるため、彼もミシユアル国王のすぐ後に結婚式を挙げたのだった。妻のシャムスはわずか十八歳。とはいえ、十六歳の頃から王太子の宮殿に上がり女官の見習いをしてきた。クアルンの基準では立派に一人前の女性である。

『いいえ。あなた様と一緒にでしたら、私は何も辛くありません』

シャムスは疲れた顔に笑顔を浮かべ、きっぱりと言い切った。

妻の言葉を受け、ターヒルはしっかりと彼女を抱きしめる。小柄なシャムスの軀に女らしい曲線を感じながら、彼は器用に片手で手綱をさばいた。

『……すまん……』

ターヒルは小声で詫びつつ、目的地——隣国ラフマーンとの国境を目指すのだった。

(1) 胸騒ぎのハネムーン／R (後書き)

御堂です。

お待たせいたしました。

金色の砂漠編スタートです！

サイトがどうも携帯ユーザー様には不評のため、こちらもほぼ同時更新と致します(^^;)

出だしは…こういうの好きです(苦笑)

久しぶりにターヒル&シャムスの登場…何やらヤバそうな雰囲気。
アル&舞も浮かれてる場合じゃなくなります。

週2回更新を目処に頑張ります。

よろしくお付き合いくださいませ(^^)／

(2) 砂漠に落ちた涙

砂漠に朝日が昇る。

それはまるで、闇に襲い掛かる火の玉のようだ。決して逃がさぬとばかり、地平線を朱色の光が追いかけてくる。そんな錯覚に、ターヒルの手綱を持つ手は汗ばんだ。

『旦那さまっ!』

懷でシャムスが声を上げた。

国境に到着したのだ。印は何もないがそこを超えると確かに隣国ラフマーン王国。その証拠に、密かに手配したヘリが待機し、ターヒルの到着を待っていた。

白いトーブに身を包んだ数人の男が見える。ターヒルは手前で馬を下り、腰のジャンビアーに手を添えた。

『我が名はターヒル・ビン・サルマーン! あなた方の主人の名をお聞かせ願おう』

シャムスはターヒルの背後に隠れる。

もし、予想どおりの名前が返って来なければ、二人はこのまま銃弾の洗礼を浴びることになるだろう。そのときは砂漠に屍を晒すことになる。せめてシャムスだけでも逃がしたかったが……。

ターヒルがそう思った時、妻はギュッと彼のトーブの端を掴んだ。

(共に死ぬなら、それも良しとしよう。我々の無念は、必ずや陛下が晴らしてくれるはずだ)

覚悟を決め、ターヒルが剣の柄に手を掛けたとき——男たちが左右に割れた。

そして赤いグトラを被った長髪の男性が姿を現す。

『我が命はラフマーンの国王に、そして我が心はアッラーに捧げている。これでよいか？』

『サディーク王子！』

ターヒルとシャムスはほぼ同時に叫び、砂の上に膝を折った。

隣国ラフマーン王国のサディーク王子にターヒルは助けを求めたのだ。だが、まさか王子自らが彼らを迎えに来てくれるとは思わなかった。

『このたびのご厚情、深く感謝申し上げます。このお礼は必ずや』
律儀にも礼を言い始めたターヒルの言葉を遮り、サディーク王子が言った。

『挨拶は後だ。ヘリで空港まで行き、乗り継ぎを経てマニラからアズウォルドを目指す。パスポートは用意した。すぐに』

『では、妻だけお願いいたします』

『ターヒル！ 正気か？ 国に残ればお前は』

『私はミシユアル国王陛下より、不在中はカイサル陛下とヌール妃様、そしてラシード王子ご一家をお守りするよう命じられております。事態がどれほど変わろうとも、主君の命に背き、逃げ出すわけにはいきません。どうか、妻を……サディーク王子のご養女アーイシャ様の下にお届けください』

——女官を娘の下に送り届ける。

国外に出たのがシャムスだけなら、サディーク王子の名誉を傷つけずに済む。

ターヒルのそんな思いに気づいたのか、サディーク王子はそれ以

『ターヒルと連絡が取れぬとはどういうことだ！　もういい！　戻り次第、連絡を寄越せと伝えよ！』

呑気にリゾートに籠もり、ハネムーンを楽しんでいるように見えるミシユアル国王だが、定時連絡はちゃんと受けていた。

今回、本国にターヒルを、日本にはヤイーシュを残しアズウォルドにやって来たのだ。

ターヒルを残したのは彼が結婚を控えていたことが第一の理由である。他にも理由はある、ミシユアル国王の不在中、ラシード王子と共に王族の管理と首都の治安維持を任せて来たという。

ラシード王子だけではどうも心許ないらしい。

そのためなら、ターヒルは前国王の名を使ってもよいことになっていた。前国王は退位間もないこともあり、まだまだ権力・影響力とも衰えてはいない。そんな前国王の名前を出せば、国王の一側近であるターヒルにも相当の力が揮えるという。

「電話で怒鳴ってたのはヤイーシュなの？」

だいぶアラビア語の聞き取りが出来るようになった舞は、ミシユアル国王に尋ねる。

「いや、アズウォルド本島にあるクアルン大使館員だ。ヤイーシュから定時連絡が入っておらぬ。それをターヒルに確認しようとしたら、奴とも連絡が取れぬのだ」

かなりイライラした様子で部屋の中を行ったり来たりしている。

「あ、ほら、ターヒルは新婚さんだしさ。ヤイーシュもモテそうだから、日本人の恋人を見つけてデートしてるのかも」

「馬鹿者！　そんな理由で連絡を怠ったのであれば、二人ともクビだ！」

ミシユアル国王の気持ちを和ませようと言ったのだが、余計に怒らせたらしい。

とは言え、舞にしても訳が判らない。第一、連絡がないのは舞のせいではないのだ。

「ちよつとアル！ わたしに怒ったって仕方ないでしょ！ 違う人間に連絡してみる、とか。別の手段を考える、とか。動物園のライオンみたいにくろくろしてないで、もっと有益なことに時間を使えば？」

舞の言葉を聞くなり、ミシユアル国王はニヤリと笑った。

（そ、その笑顔って……）

「確かに、お前の言うとおりだ。どうせ待つしかないのだから、もっと有益に待つことにしよう」

そう言いながら、ラタンのカウチソファーに座る舞の隣に腰掛けた。

舞が手にしていたオレンジジュースの入ったグラスを取り上げ、ソツとテーブルに置く。

「ア、アル、まだ夕方だよ。夕食だってこれからだし……」

「では、夕食前に軽く運動することにしよう」

（絶対に“軽く”じゃ済まないくせにっ！）

舞はそう抗議しようとするが……開きかけた口を塞がれ、あつという間に深いキスに突入する。

「昼間も砂浜で頑張ったんだしさ……ねえアル、せめて夜まで休んだほうが」

「有益なことに時間を使え、と言ったのはお前ではないか？」

「他にも何か、することが」

「ない！ 愛する妻がしどけない姿でカウチに横たわり、私を誘惑しているのだぞ。夫のするべきことは一つだ」

昼間は砂まみれにされたのだ。シャワーでようやくさっぱりして、寛いでただけで……。

（誘惑なんてしてないってば〜〜！）

叫ぶ暇もなく、舞はスルスルと部屋着を脱がされた。

(3) ささやかな楽園／R(前書き)

★性描写があります、R15でお願いします。

(3) ささやかな樂園／R

カラン、とグラスの中の氷が崩れる音がして……冷たい唇が舞の胸元に落ちてきた。

「ひゃっ……あん」

冷たさにびっくりして声がこぼれる。同時に、ゾクリとした快感を覚え……舞は誘惑に近い声を上げた。

「昼間は暑かったであろう？ 私が冷やしてやろう」

ミシユアル国王は上目遣いにそんなセリフを呟く。先ほどの不機嫌は何処へやら、随分楽しそうな声である。

「冷やすって……氷？」

「ああ、そうだ。舞、お前の身体からはオレンジの匂いがするぞ」

それはグラスにオレンジジュースが入ってたから……と言いたいのだが、冷たい舌先で舐め上げるように先端を刺激され、不思議な感触に舞のバストはどんどん敏感になってくる。

気持ちよさに身体をくねらせ、舞は懸命に我慢していた。すると、冷たい舌は脇腹を伝って下に向かい、腰辺りに吸い付いたのだ。

肌がぴりぴりと痛むほど吸い上げられ……。

（もうっ！ キスマークは恥ずかしいからヤダって言ってるのにな！）

場所なんてお構いなしに、楽しそうに“自分のモノ”である証を付けて回る。舞が何度抗議しても無視だ。ミシユアル国王の返事はいたって簡単。

「お前の素肌を見る権利は私にしかない。男の目を気にして恥じる必要がどこにある？　女たちは夫にこよなく愛されるお前を羨むだろう」

などと自信満々に言っている。

「やあっ！　ちよっアル……何してる……きゃ」

冷たい唇からいつもの熱を感じ始めた直後、彼は再び氷を口に含んだ。そして今度は、なんと脚の間に口付けた！

ヒンヤリとした空気をその場所を感じる。ミシユアル国王の触れていない部分まで、冷たい風にくすぐられる感じがした。

「お前の身体から溢れるのは、ジュースよりもっと甘い液体だ。氷で冷やしていただくでしょう」

言うなり、冷たい物が体内に押し込まれた。

「やっ……やだ、もう！　アルの馬鹿っ！　変態国王！」

「舞、それはムツツリスケベと同じ意味か？」

「へん、変なエッチが好きってこと！」

ちよっと違う気もするが、変態を上手く説明するのは難しい。

すると、ミシユアル国王は何を思ったのか、

「夫が妻の身体を愛でてどこが悪い」

「わ、悪くはないけど……こ、氷とかっ……使うのはっ」

冷たい吐息で胸よりもっと敏感な場所を撫でられては、とてもまともに喋れない。

「様々な手段でお前に悦びを与えたいだけだ。正直に言ってみよ」

舞が答えるより早く、身体のほうが敏感に反応する。

それはミシユアル国王にも伝わったらしく……彼はフツと笑った。

「なるほど、正直な身体だ。褒美を取らせよう」

「やだ、もう、アル……アルのばかあ」

「お前の“馬鹿”は“愛している”と同じ意味であったな。いや、この場合“もっと”と言っておるのか」

そんな自分にとって都合の良い解釈をしつつ、ミシユアル国王はカウチソファに悲鳴を上げさせた。

——ダンダンッ！　ダンダンダンッ！

不意にドアをノック……というより殴るような音が聞こえる。

「ア、アル……誰か、来た。ちよつと……ストップ」

「馬鹿者！　止まる訳がなからう！？」

「ええっ！？　だって、あ……ん」

『陛下！　わたくしでございます。定時連絡が入っております——失礼いたしますぞ』

その声に舞はギクリとした。彼女を決して正妃と認めようとしな
い、側近ダーウッドだ。

今すぐ入ってこられたら、ダーウッドの前にあられない姿を晒
してしまう。すぐにも飛び起きなきゃ、という場面のはずなのに……。

ミシユアル国王にはその気配が全然ない！

ドアが音を立て、ダーウッドが入って来ようとしたその時——

『誰が入ってよいと言った！？　このヴィラは後宮と同様である。
無断で立ち入った男は生かして帰さん！』

ミシユアル国王は動きを止めて一喝する。

隆起した筋肉が激しい呼吸に上下していた。オリブ色の肌に汗が伝い光って見える。彼の止め処ない熱情に翻弄されながら……

（カッコいいなあ……ってこんな格好だけど）

カウチの上で組み伏せられ、その荒々しさに舞はドキドキだ。

（定時連絡くらい待たせてもいいんじゃない？）

そう思ったことを後悔するような問題が起きているとも知らず。ダーウードが今ひとつ苦手な舞は、夫の与えてくれる悦びに、しばし身を委ねたのだった。

$$\begin{array}{c} \wr \\ * \\ \wr \\ * \\ \wr \\ * \\ \wr \end{array}$$

翌朝、舞をセルリアン島のヴィラに残し、ミシユアルはアズウォルド本島の王宮に戻った。もちろん、ダーウッドも一緒だ。

『レイ、このたびは貴国の協力に感謝する』

王宮正殿の国王執務室に入るなり、ミシユアルはレイに対して感謝を口にした。

一方レイは、柔らかな物腰と動作でミシユアルに着席を勧める。

『感謝には及ばないよ。予定どおりと言わべきだろう。……違うのかい？』

レイの問い掛けに何と答えればよいのか、ミシユアル自身にもよく判らない。

彼は曖昧な笑みを口の端に乗せながら、『インシャーアッラー神のみぞ知る、だ』そう小さく答えた。

そこに、電話の音が鳴り響いた。

レイが受話器を取り上げ、英語に近いアズワールドの言葉で軽く受け答えをする。

『シーク・ミシユアル、日本からの不法入国者が君の名を口にしているというが……』

受話器を手にしたまま、彼はミシユアルに向き直り尋ねた。

『不法、入国だと？』

『――サンドベージュの髪にブルーアイズ、米国人でアライブ・キヤラハンと名乗る青年だ。心当たりは？』

『ある。連れて来てくれ』

キヤラハンは母方の姓だったと記憶している。英語のアライブとはアラビア語でヤイーシュを意味した。

クアルンの首都ダリヤでの戴冠式前後、『日本の血を引く王を認めない』『日本人王妃に血の制裁を』そんなビラが大量に撒かれた。ミシユアルはあえて国を離れ、前国王の権力が及ぶうちに、それらを利用して反日組織の一掃を計画したのだ。ラシードを旗印とし、実質的にはターヒルに指揮を命じた。前国王にも、王族の中から協力者を選んでもらったのである。

一方、ヤイーシュは部族長シークを続けながら、側近に戻ることになり、最初に命じたのが日本での仕事だった。

前王妃ヌール妃は一人娘であったが両親……ミシユアルにとって

は祖父母が存命だ。舞にも両親と弟がいる。それ以上の遠縁にまで害は及ぶまいが、近親は充分に危険だ。

だが、現状で一番危険なのは舞であろう。

（そのために、この国を選んだのだ）
アズウオールド

周囲二千キロ四方を海に囲まれた、自然の要塞とも言えるアズウオールド王国。典型的なランドパワー国家のクアルンに対して、敵対するには不慣れとも言えるシーパワー国家だ。しかも、敵対勢力はそれほど大きなものではない。舞をクアルンから引き離すだけで充分なはずであった。

そして四日前、舞に塗料を投げつけ、ビラを撒いたとされる反日組織が根こそぎ逮捕された。

ターヒルから『お帰りをお待ちしております』と連絡を受け、ヤーイーシュも二三日様子を見てからクアルンに帰国すると言っていた。

だからこそ、セルリアン島のリゾート・スパで心ゆくまでハネムーンを楽しんでいたのだが……。

(3) ささやかな楽園／R (後書き)

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

若干ですが、サイトの本編より直接的な性描写を削除しました。
こちらでは、アルのジャンビーマがどのポジションにあるか判らない程度になってるか(苦笑)

次回、ヤイーシュの登場です。

引き続き、よろしく願いいたします(^^)／

(4) 砂の迷路

ドアがノックされスーツ姿の男が通された。

ヤイーシュ・アリ・ハツダード・アルⅡバドル、シークの地位にある男だ。砂色の肩より長い髪を一つに縛り、左右の頬に掠り傷があった。青い瞳には疲労が見え、事態の混迷さを色濃く映し出している。そして、ミシユアルが一際驚いたのが、シャツの胸元から見え隠れする白い包帯。

彼は太股で部屋を横切り、ヤイーシュの腕を掴んだ。

ヤイーシュは微かに頬を歪める。包帯は胸元だけでなく、手首からも見えた。

『日本で襲われたのか？ 何が起こったのだ。説明いたせ！』

『はい、陛下。まずはじめに、笹原家ならびに月瀬家の皆様に、一切被害はありませんのでご安心下さい。そして、私が本国に異変を感じたのが三日前のこと――』

普段であれば綿密に連絡を取り合うヤイーシュとターヒルであるが、今回は少し様相が違った。

ターヒルが新婚ということもあり、クアルン時間で夜間に連絡は取らぬよう配慮したのだ。もちろんそれだけでなく、ヤイーシュのほうにも様々な事情があり……。

早く言えば、反日組織が逮捕された、との連絡を受けてから丸一日以上、ターヒルと話していなかったのである。

現在、複数の中東国家で連鎖的に暴動が起こっていた。
もしミシユアルの従兄にあたる、亡きマフムード王太子が即位し

ていたなら、クアルンもその煽りを受けていただろう。だが、今のところ新国王の評判は上々だ。国民に絶大な支持を受けており、暴動は対岸の火事で済むと考えていた。

ただ一つ懸念される問題といえば、やはり新王妃である舞の存在だろう。

案の定、日本人王妃反対を唱え、暴動が計画されたのである。その首謀者が反日組織と判明し、暴動は火種のうちに制圧された。その先頭に立ったのがリドワーン王子だった。

リドワーン・ビン・ワツハーブ、現在三十一歳で前国王の最年長の孫である。

第一夫人ファァティマ妃との間に儲けた王女は十七歳で遠縁の王族に嫁ぎ、一男二女を産む。彼は王子の称号を持ち、父系では嫡流から外れるものの、母系ではラシードに次いで正統な血を受け継いでいた。

ファァティマ妃は第二子の男子を死産し、子供が産めなくなった。リドワーンはそんな彼女にとって失った息子も同然だったのだ。

一方、前国王にとってもリドワーンの誕生は大いなる喜びだった。ヌール妃と出会う以前、前国王には三人の王妃に五人の娘がいた。四十歳を回っていた彼は息子を儲けることを諦め、第一王女の生んだ孫息子を自身の後継者に、と考えていたくらいだ。

だが、リドワーンが三歳の時にミシユアルが誕生した。

その後、他の王女にも男子が恵まれ、現在、ミシユアルには七人の姪と四人の甥がいる。

リドワーンはその後周囲の期待を受け成長した。今回の譲位で大臣やそれに伴うポストも若返りを図り、彼は宗教警察の副長官に任命されたのであった。

『そのリドワーン殿下が、暴動の首謀者に逮捕状を出したと、日本

のクアルン大使館に連絡があったのです』

『組織は一網打尽にしたのではなかったか？ 首謀者が他にいたとは、私は聞いておらぬぞ』

ミシユアルの問いにヤイーシュは頷きつつ答える。

『はい。私も暴動は未然に防がれ、一味は全員捕らえたと報告を受けておりました。それで、不審に思いターヒルに連絡を取ろうとしたのですが全く繋がらず……』

ヤイーシュはラシードにも連絡を取ったという。

だが、側近に電話を取り次いで貰えず、やがて電話番号そのものが不通となった。王宮や首都に在住の知人・友人に連絡するが、電話だけでなくメールも遮断され、日本のクアルン大使館は一時騒然とした。

『事態の判らぬまま、いたずらに、ハネムーン中の陛下にご報告も出来ず――アルⅡバドル一族に連絡を取り、現在クアルンで何が起きているのか、調べさせたのです』

アルⅡバドル一族とは、ヤイーシュが族長を務めるベドウィンの一族だ。誇り高く、砂漠の戦士と呼ばれる勇猛果敢な部族である。彼らは国家の法より一族の掟を優先する。国の如何なる機関からの命令があっても、族長の命令ヤイーシュに勝るものはない。

『報告を受けて驚きました。なんと首謀者としてターヒルに逮捕状が出ていたのです』

『馬鹿な！』

ミシユアルはその一言を叫び、絶句した。

『これは、私が直接陛下にご報告申し上げねばと思い、日本の出国

手続きを取りました。しかし、出国許可が下りなかったのです。どうもクアルン政府から要注意人物として私の名前が挙がったらしく……その直後、クアルン大使館の公用車が時限式の爆弾により爆破されました』

微妙な振動に異変を察知したヤイーシュの命令で、大使館員はすぐさま車両から飛び出した。しかし高齢の運転手が逃げ遅れ、彼を庇いヤイーシュは肋骨を三本折るという重傷を負ったのである。

『どうしてすぐに連絡をしなかった!?!』

『出来なかったのです。大使館に増員されたメンバーは、我々に一切連絡を取らせようとしませんでした』

爆発事故で欠員が出るのを見越していたように、大使館には本国から増員が到着した。

幸い、手術は不要と診断されたヤイーシュだが、数日の入院と安静を医者から言われる。その病室前に、護衛と称して複数の見張りがつけられたという。ヤイーシュはそこを逃げ出し、追いかけてきた一人を殴り倒し、大使館員の身分証を不正使用して出国したのだった。

『しかし……なぜ、リドワーンが。歳若いシドを補佐するため、父上を選んだ男だぞ』

『はい。それに、今回の逮捕命令もリドワーン殿下が執行されましたが、逮捕状に書かれた名はカイサル前国王陛下であった、と』

リドワーンは優秀で機敏な男だった。女性とのトラブルもあったが、常識の範囲内であろう。過度な女好きでもなく、マフムードのような犯罪に加担することもなかった。軍経験もあり、副長官とし

てそつなく務めている。長官になるのもそう遠いことではないだろう。ミシユアルたちとの関係も、王族の中では良好な部類であった。彼がミシユアルに反感を持つとすれば、一点だけ心当たりがある。リドワーンは七年前に第一夫人を、三年前に第二夫人を娶ったが子供に恵まれていない。彼は二人の妻を離縁し、今年中に第三夫人を迎えるという。その噂を聞いた時、ミシユアルは彼を呼び出した。

——子供を得る為の結婚なら、お前に夫の義務を果たす能力があることを証明せよ。出来ぬときは、これ以上不幸な女を増やすわけにはいかない。

リドワーンはその証明を断り、離婚と第三夫人の件を撤回した。ミシユアルもそれ以上、年上の甥に恥を掻かせることはしなかったのである。

『レイ、面倒を掛けるが、すぐさま専用機が飛び立てるよう、準備してくれ』

『ミシユアル陛下、それは』

レイより先にヤイーシュが反応した。

『お前はアズウォルドに残れ』

『いえ、陛下が帰国されるのであれば、私も』

『怪我人では役に立たん!』

『いいえ! 骨が砕けても、私は陛下に付いて参ります!』

ヤイーシュは胸を押さえつつ、怒りに満ちた瞳に青い炎を燃え立たせていた。

(5) 白馬の王子がついた嘘

睨み合う二人に、割って入ったのはレイであった。

『まず、ミスター・キャラハン、ソファに掛けなさい』

『いえ、私は』

『では……シーク・ヤイーシュとお呼びしましょうか？ どちらにしても簡単に済む話ではなさそうだ。主君に仕える心構えは立派だが、精神力だけでは骨は繋がらない。座って体を休めなさい』

彼は落ち着いた声でヤイーシュに話しかけた。

ヤイーシュはプライドの高い男である。頭ごなしに命令されることは何より好まない。だが、レイのように理路整然と言われたら、従わざるを得ないだろう。

案の定、慚然とした面持ちでヤイーシュはソファに座り込む。

『出発準備にはどれくらいの時間が必要か？』

ミシユアルの質問をレイはアズワールドの言葉に訳す。すると、答えたのはレイの補佐官サトウであった。

「急ぎ機体のチェックをし、燃料を補給せねばなりません。出発だけでしたら二時間ほど頂ければ……ただ、よろしいでしょうか？」

サトウは見るからに真面目そうな五十代の日系男性だ。

彼はレイが頷くのを見て、ニコリともせず意見を口にした。

「陛下の命に従い、クアルン国内のアズワールド大使館と連絡を取りました。しかし、ダリヤ市内をはじめ、クアルン国内では何の問題も起こってはおりません。ニュースにも『暴動は未然に防がれた、ラシード王子とリドワーン王子のお手柄だ』とあります。反逆罪に

も等しい重大犯罪が行われているとはとても……」

言葉を濁したサトウに噛み付いたのがヤイーシュである。

「ほう。では、貴殿は私が独りで騒いでいるだけだ、と」

「とんでもありません。閣下の周囲で何かが起こっているのは事実。情報の伝達に問題が生じて……」

「そんな瑣末な問題で、車が吹き飛ぶと思っているのかっ!？」

「いえ。私が申し上げておりますのは、ミシユアル国王陛下や王族の皆様ではなく、シーク・ヤイーシュ閣下の御身を狙ったものではないか、と」

その言葉にヤイーシュの顔は青ざめ立ち上がった。

「それは聞き捨てならん! 我がアルⅡバドル一族に、姑息な手段で族長の命を狙う輩などおらぬ。訂正せぬなら、ただでは済まさん!」

「しかし……」

「サトウ、貴重な意見だが……彼に謝罪するんだ」

レイの一言でサトウは「言葉が過ぎました。お許し下さい」と頭を下げる。彼はそのまま、部屋から出て行った。

『うちの補佐官は私にも意見するくらいだ。君の名誉を傷つけるつもりなど一切ない。許してやってくれ』

国王であるレイに謝られては、ヤイーシュもそれ以上は言えない。代わって、黙り込む主君——ミシユアルに声を掛けた。

『陛下、ラシード殿下たちに万一のことはないと思いますが、ターヒルの身が危険です。一刻も早く国に戻り、事態の解明に——陛下!』

『判っている。騒ぐな』

部外者であるサトウの言葉を聞くと確かにそうだ。

ヤイーシュの部族が族長を狙うことなどあり得ない。だが、日本のクアルン大使館車両が爆破された狙いはヤイーシュで間違いないだろう。そしてターヒルに出ているという逮捕状――。

その時、一旦下がった補佐官サトウが再び部屋に現れた。

彼はレイに、マニラ国際空港から特別チャーター機が到着した、と告げたのである。

「今週一杯、公賓の予定は入っていなかったと思うが。入国希望者の国籍と名前は？」

「ラフマーン・スルタン国でございます。王太子第二王子サディーク殿下が、長期滞在中の息女ア―イシャ様のために、五名の女官を遣わせる、と」

ミシュアルはハッと顔を上げた。ヤイーシュも無言でこちらを見ている。

二人の様子にレイは、

「いいだろう。入国を許可する。その五名を王宮正殿に連れて来るように」

そう命じたのであった。

くくくくくくくくくく

「クアルンに帰るって……何かあったの？ ひょっとして、お父様

の身に」

ちよつと本島に戻り用事を済ませてすぐに戻る。ミシユアル国王はそう言つて舞をセルリアン島に残して行つた。

だが、昼はとうに過ぎ、陽が傾いても戻ってくる気配はまるでない。

最初……

（アルと一緒にだとエツチばかりだし、たまには独りでノンビリしたいよねーっ！）

などと浮かれていた舞だったが、やっぱり新婚。エツチなことを仕掛けてくれない旦那さまがいないと寂しい、と思い始めていた矢先だった。

ミシユアル国王から帰国を告げる電話が掛かったのだ。

「そうではない。父上はご無事だ。国王の判断が必要な事案が発生した。そのための帰国だ」

「わ、わかった。じゃあ、すぐに用意するから……」

元々が、体調の優れない前国王ために譲位を急いだ結婚だった。クアルン王室では、愛妾や側室ではなく、夫人がいなければ即位できない決まりなのだ。最初はそのことに不満を感じた舞だったが……。

（まあ、渡りに船っていうか。アルはラッキーと思って求婚してきただけでもんね）

それでも、ミシユアル国王は舞を正妃にするために奔走した。そのことを知った今となっては、過去をほじくり返して文句を言うつ

もりなんてさらさらない。

「いや、お前はそのままアズワールドに滞在するように」

「え？　だって新婚旅行なんだよ。アルが帰国するならわたしだって」

「これは一時帰国に過ぎない。二三日、或いはもっと早く、案件が片付きしだい戻ってくる。我々の帰国スケジュールに合わせて、首都でパレードも行われる予定だ。それより前に揃って引き上げるのは、国を挙げて迎えてくれたアズワールドに対して礼を失する。残るのは正妃の務めだ」

そんなふうに言われては、舞も承知するよりない。

不満ありげな舞の様子を察したのだろう。ミシユアル国王の心が持ち甘くなる。

「どうした、舞？　そんなに私と離れるのが寂しいのか？」

「べ、べつに、寂しいとかじゃ……その、退屈って言うか……だって、ティナもレイ陛下と仲良くしてるみたいだし。ひとりでバカンスって“ひとり焼肉”とか“ひとりボーリング”と同じくらい悲しい気がする」

「その“ひとり焼肉”が何を意味するのは判らぬが……舞、私の心は常にお前と共にある。必ず戻る。それまで、おとなしく待つように――」

ミシユアル国王の言葉は信じられないほど優しくかった。

普段なら強がりと言う舞も、最低でも二日は会えないのだ、と思
い、つい……

「ねえアル、私のこと愛してる？」

言ってすぐ——我ながらなんていう恥ずかしいセリフを、と後悔したがもう遅い。

電話口から爆笑、いや『くだらん！』なんて声が届くことを想像したが、今夜は違った。

「愛している。我が命と名誉、すべてを懸けて愛し抜く。不服か」
「い、いえ、充分です」

琥珀色の瞳を想像しつつ、舞は赤面する。

（まあ二日くらいなら、せっかく憧れの南の島にいるんだし、羽を伸ばそうかな。ちよっとだけ、独身気分で遊んじゃおう！）

たった二日、そう信じていた——。

(6) 情熱の国へようこそ

「まあ、では陛下がおひとりで帰国されてしまわれるのですね……妃殿下もお寂しいでしょう」

舞の前にアイステイが入ったグラスを置きながら、驚いた声をあげたのはクロエ・アディソンである。国立リゾート・スパの女性バトラーだ。アメリカ系アズワールド人の彼女は、舞と遜色ない身長で肌は白く、スタイルもいい。クアルンに行くとモテるタイプかも知れない。

普段、女性のことなど口にしないミシユアル国王も、

「クロエは素晴らしく気の利く女だ。このような島でバトラーなどさせず、私なら王宮にあげて仕事を与えるだろう」

なんてことをボソツと言っていたくらいだ。

(ま、まさか……側室、ううん、第二夫人にしたいから連れて帰る、とか!?)

舞は一瞬、びびったが……。

でも、クロエは既婚者で子供もいる、と知りホツとした。ちなみに、彼女の夫もこのリゾートでバトラーをやっているという。

「残念だったね、アル」

そんなふうにからかうと、

「馬鹿者! お前は私を、そのように見ておるのか!?!」
と半分本気で怒ってしまい……。

そのまま、「お仕置きだ」とか言い始めて、昼間からあーんなこ

とやこーんなことを、やらされる羽目になったのだった。

（一日五回や六回平気だもんねえ。アルのジャンビーアって元気良すぎだと思う）

口の中でブツブツ言っではみるものの、今夜は戻らないと思うだけで寂しく感じるのはどうしてだろう。それも下半身の辺りがトクに。

自分の身体がすっかり“夫婦生活”それも“アルのジャンビーア”に馴染んでしまっていることに気づき、舞はちよつと恥ずかしかった。

「あら？ 妃殿下、お顔が赤うございます。日焼けでしょうか？

それともお風邪でも」

「ち、違うから……大丈夫だから。クロエのせいじゃないし、心配しないで」

まさか、夫とのアレコレを想像して赤面してしまいました……なんて、口が裂けても言えない。

「あ、そうだ。陛下の代わりにね、本国からわたし付きの女官がやって来るの。わたしたちより新婚さんなのよねえ。確か……クアルンの外に出るのは初めてだったと思うから、色々驚くだろうなあ」

なんと、アズウォルドにシャムスがやって来るという。

十八歳という年齢のわりにしっかりしていて、教義にもうるさい。小姑っぽいイメージのあるシャムスだが、それでも舞にとっては頼りになる女官だ。

（ターヒルとの新婚生活を絶対に聞き出してやろう。楽しみ～）

クアルン国内の異変、そしてターヒルの身に起こっていることなど何も知らない舞である。約一ヶ月ぶりとなるシャムスとの再会に、胸を躍らせても無理はなかった。

舞にとって気がかりがあるとすれば、

「周辺地域の警護はレイに任せているが、リゾート内に護衛としてダーウッドともう一名側近を残して行こう」

と言った点だろうか。

おじいちゃんのダーウッドに護衛なんて務まるのだろうか？ それに、正妃として認められてもいないのに。それを考えると気の重い舞だった。

$$\begin{array}{c} \sim \\ * \\ \sim \\ * \\ \sim \\ * \\ \sim \\ * \\ \sim \end{array}$$

日が完全に沈みきった頃、本島からヘリの到着を告げられた。シャムスが到着したのである。

すると、舞の胸にフツと悪戯心がよぎり……。

「妃殿下、女官シャムス・ビント・サルマーン様以下、お付きの方がご到着されました」

木枠の引き戸の向こうに人の足が見える。

「ダーウッドも一緒なの？」

舞の質問に答えたのはクロエであつた。

「いえ。ですが、アバヤを着用なさってくださいませ。戸をお開けしてもよろしいでしょうか？」

「ええ、どうぞ」

衣擦れの音がした。

シャムスなら、きっちりのアバヤを着込み、ヒジャブをかぶってニカブで口元を覆ってることだろう。

でも、せっかくやって来た南の島のリゾートである。ミシユアル国王の命令で男性はひとりもない。ここは一つ、パーティーと思い切って楽しまないと、こんなチャンスは二度とないかも知れない。そんなとんでもないことを舞は考えた。

ということで、舞がアバヤの下に着ているのは、ミシユアル国王のお気に入りの純白ビキニ。

「はぁーい！ シャムス、ようこそアズウオルドへ！」

舞はバツとアバヤを脱ぎ捨て、シャムスを振り返った！

予想どおり、アバヤ姿のシャムスはよかった。だが、彼女の横に――なぜかヤイーシュがつっ！！

「ア、ア、アーイ……」

「……」

シャムスはひたすら「ア」を繰り返している。ヤイーシュは口を開けたまま固まっていた。クロエはどうしたらいいのか判らない、といった風情でオロオロしている。

（なっ！　なんでヤイーシュがここにいるのよおーっ！）

舞は心の中で絶叫した。

くくくくくくく

アズウォルド本島から王室専用船で海上エアポートに到着する。
ミシユアルは舞の失態など想像することもなく、シャムスのもたらした情報に頭を悩ませていた。

反日組織が本格的な暴動を起こす前に逮捕し、関係者が胸を撫で下ろした直後に問題が発生したという。逮捕された組織の連中がこぞって、現国王の側近ターヒルの名前を首謀者に挙げたのである。

『皆が、あり得ない、と証言してくれました。ところが、陛下のご結婚に段取りが狂ったのは、我が夫ターヒルさまが同じく側近のヤイーシュ様と結託しアーイシヤ様を攫ったせいだ、と』

確かに予定が狂い、様々な行事を省いた。舞の具合が悪いと押し通し、宗教的儀式も飛ばしたのだ。ところが、同時期に舞をアブル砂漠近くのカンマン市で見かけたという声が上がったらしい。

真実を口にすれば、ラシード王子妃となったライラの罪が明るみに出てしまう。ターヒルをはじめ国王直属の衛兵らは全員が口を噤んだ。

ラシードはターヒルを庇おうとしたが……。

『ラシード様とライラ様の結婚は予定外のことでした。そのせいで色々な噂が水面下で広がっております。ラシード様はそのせいで、リドワーン様に捜査の指揮権を委ねるような形になってしまっ』

言葉をあやふやにするシャムスに、ミシユアルは訊ねる。

『シャムス、色々な噂とはなんだ？』

『それは……聞くに堪えぬ噂でございます』

『それを決めるのは私で、お前ではない。話せ』

シャムスは胸の前で手を組み、躊躇う仕草を見せながら口を開いた。

『ライラ様に手をつけた陛下が、それを隠すためにラシード様に押し付けられた、と。マッダーフ元軍務大臣もだまし討ちにされた、と言っておられるとか。あまりに早いご懐妊も、或いは陛下の――』

怒りに身が震えたが、それをシャムスにぶつけるわけにもいかない。

シャムスは『陛下の命に従うと国に残ったターヒルさまをお救いください』と涙を流しひれ伏した。夫は陛下に忠実です、と何度も口にしながら。

（そのようなこと、当然ではないか！）

用意ができました、と知らせに來た空港係員をレイは労う。おそらく離着陸のスケジュールを狂わせる事態になったのだろう。

『レイ、この恩には必ず報いる。どうか、私の妃を守ってやってくれ』

『もちろんだ。だがシーク・ミシユアル、当初の予想を大きく外しているようだが……君自身は大丈夫か？ 今、帰国するのは危険ではないのか？』

『如何なる問題が起ころうと、国を逃げ出すような王に王たる資格はない。そうは思わぬか？』

——レイは何も答えなかった。

(7) 献身

「ねえ、シャムス。まだ怒ってる？」

衝撃の再会から一夜明け……朝食を食べた後、舞はシャムスを伴い、リゾート・スパの中を散歩に出掛けた。

緑の芝生の上を歩きながら、海風に髪をなびかせ、舞はせっせとシャムスのご機嫌を取る。王妃なのだから女官が不愉快そうな顔をしていたら叱ってもいいのかも知れない。でも、舞はそんな気にはなれなかった。

「エステもあるんだよ。ボディ・トリートメントとか。シャムスだって新婚さんなんだからさ、ぴっかぴかにして、ターヒルに会った時、ビックリさせてやろうよ！」

クアルンにも海はあるが、首都から気楽に行ける距離ではない。リゾート施設やビーチは、当たり前のように男性用と家族用は別！女性だけで海水浴を楽しむなんて論外だ。それに、妻や娘の水着姿を人前に晒したくない、という男性も多い。ターヒルもそのタイプに間違いない。コレを逃せば、シャムスが海で遊ぶなんてできないだろう。

舞がそう思ってウキウキとシャムスに話し掛けるが……。

「夕べのことは、まさかヤイーシュと一緒にだとは思わなかったんだって」

確かにアバヤを着てくれとは言われた。

でも、ヤイーシュが一緒ならそう言ってくれたらよかったのだ。

ところが……

「妃殿下……こちらの方はミスター・アライブ・キャラハンです。レイ国王陛下のお客様で、お怪我の療養に入国されました。さらには、ミシユアル国王陛下が特別に、このリゾート内での滞在を許可されたのです。お聞き及びではありませんか？」

舞のビキニ姿に仰天していたクロエだが、どうにか落ち着くと説明してくれた。

だが、全くの初耳で今度は舞が驚く番だ。

「え？ ミスター荒井……？ それって日本語の名前じゃ。って、怪我あ？ なんて怪我なんか」

「荒井ではなく、英語名でアライブ・キャラハンです。キャラハンとお呼びください。ところで妃殿下、まずご質問の前にアバヤを身に着けていただけませんか？ お美しいビキニ姿は充分に堪能させていただきました。ですが、ここはビーチではありません」

そんなことを言いながら、ヤイーシュはツカツカと部屋の中に入ってくる。

彼は舞が投げ捨てたアバヤを拾い、彼女の肩に掛けてくれた。

「あ、ありがと」

「相変わらず、破天荒な方だ。その分なら、この国でも何かしでしたのではありませんか？」

青い瞳に室内の光が反射し、ギラツと煌いた。

（う……違うって言えない）

アジュール島のコテージでの一件を思い出し、口を閉じる。

(いや、でも……あれはティナにだって半分は責任があるような……)

自己弁護を思い浮かべる舞にヤイーシュは、

「本当に何かされたのですか!？」

「してないってば。ちょっとしたトラブルというか……想定内のアクシデントっていうか。そう、自然災害かな。でも、トクに問題はないから」

舞が釈明すればするほど、ヤイーシュだけじゃなく、シャムスも不安そうな顔になる。

「いや、ホント、ホントだってば」

あはははは……と舞ひとり、声を立てて笑ったのだった。

結局、シャムスは初めて国外に出て、時差を経験したので休ませて欲しいと申し出て、舞はそれを許した。ヤイーシュも怪我の具合があまりよくないらしく、隣のヴィラで“療養”するのだという。

(ヤイーシュは日本にいたんだよね?　なんで怪我なんか……)

尋ねたくても相手がおらず、逆に舞のほうが悪々と夜を過ごすことになり――。

「申し訳ございません。どうやら、時差に身体が馴染まぬようです。でも、慣れたら大丈夫だと思いますので……ところで、アーイシヤ様が日本にお住まいの時は、いつもあんな水着を?」

ようやくシャムスが口を開いた。

ホッとして舞も笑顔になる。

「まさか!　学校で着たスクール水着がせいぜいだって。ビーチで

遊ぶのだって今回が初めてだもの。今思えば、アルっていう婚約者がいたから、人前で水着やレオタードは着せてもらえなかったんだろうなあ」

バレエの発表会には出させてもらえず、結局すぐにやめてしまった。

それ以外にも、不思議なことに、舞の通う女子校では男性教諭はすべて既婚で五十代以上。体育教師もずっと女性だった。

舞は少し表情の和らいだシャムスを楽しませようと、そんなことを一生懸命に話す。

突然、クアルンに連れて行かれたとき、心細かったのを覚えている。でも、舞にはいつでもミシユアル国王が傍にいてくれた。仕事とはいえターヒルと引き離され、シャムスは頼りない気持ちでいると思う。

そんなとき、シャムスがくすつと笑う。

やっと笑顔が見れて舞はホッとしつつ……。

「まあ、アーイシヤ様、不思議なことでもなんでもありませんわ。私、ターヒルさまに伺ったことがあります」

「え？ なにを？」

「陛下がお命じになられたとか。アーイシヤ様の通う学校はほとんど女性教師にするように、と。独身男性など論外、退職間際で私生活に問題のない男性教師のみ許可されたそうですよ」

「なっ!？」

舞は息が止まった。

まさか、そこまでやっていたとは……。

どうやら、相当な寄付をしていたらしい。道理で、恒例の臨海学校が舞の学年だけ林間学校やらキャンプ体験・スキー合宿に変更されたはずである。

しかも、舞には必ず教師の目が光っていた。少し羽目を外そうにも、ピッタリ張り付かれて逃げられなかった記憶がある。修学旅行でも宿泊先で他校の生徒を見かけることは全くなく、見学先で声を掛けてくる男子生徒は片っ端から追い払われていた。

それもこれも全部ミシユアル国王の――手配したのはおそらくお父上であろうが――命令と知ると、開いた口が塞がらない。

（アルってば、やり過ぎ！）

「あの……アーイシャ様、お怒りですか？」

「そういうわけじゃないけど……」

「愛が深い証ではありませんか。アーイシャ様はお幸せでございませよ」

言葉とはうらはらに、シャムスの瞳に影が見える。

「どうしたの？ ターヒルと喧嘩でもした？」

「まあ、そんな。旦那さまと喧嘩なんて」

「ホントは、国を離れたくなかったんじゃない？ ターヒルと一緒にいたいんでしょう？ アルに連絡取ってみるから、帰してもらえるように頼もうか？」

舞の言葉にシャムスは小さく首を振る。

「でも……」

どう見てもシャムスの元気のなさはおかしい。

「いいえ！ 陛下がお戻りになられたら、問題はすぐに片付くでしょう。そうしたら、陛下と一緒に旦那さまが迎えにきてくださいますわ。本当に時差で体調が戻らないだけなのです。明日には……アーイシャ様のおっしゃいますように、エステを受けてみてもよろしいですか？ 旦那さまに喜んでいただけたら……」

ポツとシャムスの頬が赤くなった。

「うん、間違いなく！　ねえねえ、ターヒルってあんな顔してエツチなこと口にする？」

シャムスの顔は湯気が立つほど赤く染まっていき……

「ア、ア、アイシャさまっ」

舞は心に隅に芽生えた不安を、大きな笑い声で追い払った。

(8) トラブルがいっぱい

海の方から波の音がヴィラまで届く。

目を向けてもそこには漆黒の闇が広がるだけだ。ヴィラの周囲には見る者の心を明るくさせる原色の花々が咲き乱れていたが、夜は濃度の違う黒にしか見えない。微かに、甘い香りが舞の鼻腔をくすぐるだけだった。

舞はヴィラのすぐ外まで出てきていた。

出入り口にセンサーが付けられていたら？ と懸念したが、何も起こらずホッとする。舞が窮屈な思いをしないように、と内部の移動は色々配慮されているらしい。おかげで、南国の花に囲まれた通路を抜ければ、隣のヴィラまで一直線だ。

昨夜は我慢した。一夜明ければ向こうから挨拶に来るのでは、と思ったからだ。しかし、待てど暮らせどヤイーシュは姿を見せず……。

舞は心配で「ヤイ……キャラハンの怪我って酷いの？」とクロエに尋ねたくらいだ。

だがクロエは、

「いえ、妃殿下のご心配には及びません。当リゾートには専属のドクターもおりますので」

そう言ってニッコリと笑った。

(だったら何で顔くらい出さないのよっ！)

いっそ呼びつけてやろうか、とも思ったが。

ミシユアル国王が戻ってきた時、舞のほうからこのヴィラにヤイーシュを呼んだ、と知られたら厄介だ。『お仕置きしてやる』とか言い出して舞をベッドやソファに押し倒すくらいならいい。でも、

ヤイーシュにジャンビーアを突きつけ、『決闘だ!』とか言い出さないとも限らない。

(アルならやりそう……呼ぶのはヤバイよね。やめとこう)

とはいえ、日本にいたヤイーシュが大怪我なんて尋常じゃない。

日本の家族に何かあったのかも知れない。だが、舞はミシユアル国王の許可なしに電話一本掛けられないのだ。彼がいない間はこの島から離れることすら不可能だった。

ヤイーシュの個人的事情で怪我をした、というならそれでもいい。いや、別によくはないけど、舞の心配が取り越し苦労だと判れば一安心だ。

でももし……ミシユアル国王が急遽帰国した原因とか。唐突にシヤムスがやって来た事情とか。それらのこととヤイーシュの怪我に関係はないのか、どうしても確認しておきたかった。

それに“アライブ・キャラハン”を名乗る理由もちゃんと聞いておきたい。

「今回、アズワールド王国ではその名前を名乗っております」

なんて、説明にもなっていない、人を馬鹿にした言い草だ。

クアルンで起こった“国王の判断が必要な事案”とはなんだろう。ひょっとして、またライラが何かしたのだろうか？

“また”なんて言ったらライラは怒るかもしれない。だがライラの父、マッダーフ元軍務大臣が起死回生の一発を狙って何かしでかした可能性は大だ！

(暴動とか……反乱とか……ま、まさか、戦争になったりしないよね)

舞の中にヤイーシュに言われたことで忘れられない言葉があった。

——私の知る人間で“自由”に生きることが許されないのは……
 シーク・ミシユアル、彼だけです。彼がそれを求めた時、この国に
 戦乱を招くでしょう——

ミシユアル国王は舞を正妃とするため、あらゆる手段を講じた。それがもし、自由を求めたことになるなら。そのせいで、クアルン王国に内戦でも起こることになれば……舞はどうすればいいのだろう。

そのことをヤーシューに尋ねたかった。
 思えばこのアズウォルドに來た頃から、ミシユアル国王は舞に對して妙に優しくなつた氣がする。テイナの件で口を挟んだ時も、彼にしては珍しく舞の機嫌を窺うかのようである。

舞は頷き、思い切って一歩踏み出した。

$$\begin{array}{c} \hookrightarrow \\ * \\ \hookrightarrow \\ * \\ \hookrightarrow \\ * \\ \hookrightarrow \\ * \\ \hookrightarrow \end{array}$$

（ヴィラってどれも同じような間取りっていうか、配置なのね）

似た造りの階段を一段一段、そーと上がりながら、舞はそんなことを考えていた。

ちなみにダーウッドはヴィラではなく、リゾート・スパの本館に部屋を取っているという。昨日チラッと挨拶に顔を見せただけで、そそくさと引き上げて行つた。その態度は、正妃に対するものからは程遠い。誰が見ても側室扱いだ。

「いくら先代の国王陛下に長年お仕えしたとはいえ、現国王の正妃様になんという失礼な態度でしょう。陛下がお戻りになられたら、私から申し上げます！」

だいぶ元気が出てきたシャムスは、鼻息も荒く怒っていた。

とはいえ、ミシュアル国王自身がどうもダーウッドが苦手と見える。それに、国王の前ではあくまで儀礼的とはいえ、頭は下げている。間違っても公然と舞を無視しているわけではないのだ。ただ、舞だけ……或いは女だけになると態度が変わるという。ある意味、彼は教典^{コラン}を遵守しているのだろう。

そのダーウッドに、こんな風に男性がひとりでいるヴィラに忍び込むところを見られでもしたら……。

（コレってひょっとして……夜這いに見えたりする？）

思えば、ヤイーシュからプロポーズされたこともあった。

あれはたぶん本気じゃない、とは思うが……。もし、本気だったら？ ふいに浮かんだ疑問に、舞の足はピタリと止まる。

（この状況って、呼びつけるよりバレたらやばいかもっ）

舞は額に汗が浮かび、回れ右をした。

急いで隣のヴィラに戻るべく、階段を足早に下りる。芝の上を小走りに横切り、あとはプールサイドを通り抜けたら、先ほどの南国の花が咲き乱れる通路にたどり着く。あの場所まで行けば、眠れなくて散歩していました、という言い訳が通用するだろう。

プールサイドは平坦で何もなかった。舞が駆け出したその時、建物との間に植えられた生け垣がガサツと揺れた！

ハッとして振り返った瞬間、舞は身体が大きく振られ――
踏ん張るために足を開くが、間の悪いことに舞が足をついたところはプールの縁。見事、ツルンと滑って真夜中のプールに飛び込み
そうになる！

(う……うそっ!!)

派手な水音がしたら、全員が起き出してくるだろう。

寝ぼけていたみたいで、気がついたらプールに飛び込んだじゃいました。なんて言い訳が通用するだろうか？ と真剣に考えてみる。
だが、いつまで経っても水に落ちる気配はない。

それは誰かが、アバヤ越しに舞の腰を支えてくれたおかげだった。
そのままグツと引き起こされ、傾いた身体はプールサイドで真っ
直ぐになる。

「あ、ありがとうございます。寝ぼけてて……」

「まったく、あなたというお方は。真夜中にアバヤ姿で水泳ですか？ この間のビキニは、こういう時のために着るものだとご存知でしょうか？」

舞が礼を言いながら顔を上げると、眉間にシワを寄せたヤイーシユが睨んでいたのだった。

(9) そして熱いキスを

「レイ！ レイ？ どうしたの？」

ふと気づけば王宮の中庭に佇み、レイは噴水を見つめていた。

彼の名を呼び、駆け寄ってきたのは最愛の妻ティナである。だが、噴水を睨みつけるようなレイを見て不安を覚えたらしい。彼女の足は止まった。

ミシユアルが本島の海上エアポートを飛び立って二日目の朝になる。

無事クアルン入国の一報をミシユアルから受け取り、早二十四時間が経過。予定どおりなら、今日中にもクアルン出国の連絡があるはずだが……。

レイは早朝から外務省経由で予期せぬ報告を受け、戸惑っていた。それをヤイーシュに伝えるべきかどうか。ひょっとすれば、ダーウッドが自国の大使館を通じ、すでに情報を入手している可能性がある。そのときは舞とシャムスに伝えるか否か、相談できるのだが。

「……レイ？ シーク・ミシユアルの身に何か……」

ティナはやけに心配そうだ。おそらくミシユアル本人より、すっかり仲良くなった舞を案じてのことだろう。

レイはティナの手が自分の腕に触れた瞬間、彼女に飛びつくように抱きしめた。

「レ、レイ！？ いったい……」

「何もないよ。解決したという連絡がない、それだけだ。彼の身に何かが起こったわけではない。ただ……友人が危険に陥っても、表

立って動くことのできない自分が情けなくてね。自国の利益を最優先に考えてしまう。こんな私は、冷たい人間なのかもしれない」

レイはティナに触れたことで思わず本音を吐露してしまった。

クアルン王国では今、よからぬ企てが進行しているのは事実なようだ。

『如何なる問題が起ころうと、国を逃げ出すような王に王たる資格はない』

ミシユアルの言葉には同意せざるを得ない。

レイ自身、同じ立場に立たされたら、ティナの安全を確保したうえで単身帰国するだろう。

だが、側近であるヤーシシュをこの国に留め置いたのは正しかったのだろうか？ 他人の身分証を使い、米国籍と偽名を名乗ったことを理由に出国を許可しなかった。無論、怪我に配慮したミシユアルの希望ではあったが……。

レイの腕の中から少し身体を起こし、ティナは彼の髪に触れた。

クセのないサラサラの髪をかき上げながら、

「いやだわ、レイ。本当に冷たい人はそんな心配などしないものよ」

「だが、ティナ……」

異論を唱えようとした唇にそっと彼女の細い指先が当てられる。

「何もかも、背負ってしまおうとするのは、あなたの悪い癖だわ。

シーク・ミシユアルはご自分の義務と責任を判っていらっしゃるし、あなたに手を貸して欲しいところはちゃんと言葉にされてるんですよ？ あなたは充分なことをしているわ」

ティナの言うとおりだった。

ミシユアルは自国で起こるかもしれない暴動の気配を察して、正

舞を彼女のヴィラまで送り届け、中庭に建てられた洋風東屋ガゼボの中のベンチに座らせると、ヤイーシュは距離を取って控えた。彼は身を屈めているので、ヴィラから人が出て来ても、おそらく舞ひとりに見えるだろう。

悔しいが、これが舞の名誉を案じた配慮なのだと思うと、逆らえない。

「えーっと、どうしても聞きたいことがあって」

「月瀬家の皆様のことでしたら、全員ご無事です、と申し上げたはずですが」

確かにそんな事務的な報告は聞いた。だが、

「ちよっと待ってよ！ 何か起きたけど無事なのか。それとも、何も起きてなくて無事なのか。全然違うでしょ？ それに、わたしのことが理由で家族以外の人に迷惑かけたのだとしたら……」

舞はそのことを心配していた。

遠い親戚、学校の友だち、或いは舞の出身校や知人というだけで、何かトラブルに巻き込んでしまったのだとしたら。それを確認したくても、連絡を取ることもできない。

するとヤイーシュは言い直した。

「失礼いたしました。何も起きてはおりませんし、アーイシャ様はどなたにも迷惑などかけておられません。——これでよろしいですか？」

「……」

思えば……砂漠でも振り回されっぱなしだった気がする。

“求婚”しながら妙に偉そうで、ああしろこうしろと半分脅しながら、うるさく命令ばかりしていた。舞は今でもあのプロポーズは本心じゃなかったと固く信じている。

（一回でいいからこの男を、わたしに向かって『参りました』と言わせてやりたいっ！）

舞が言えと命令したら言うのだろう……尊大な態度で。そういう奴だ。

ミシユアル国王には服従の態度を取るくせに、舞に対してはどこか違う。シャムスが言うには、ヤイーシュは常日頃から『花嫁は絶対クアルン人！』と言っていたらしい。それから考えても、あのとき自分にふらっとさせて、舞を罠にはめるつもりだったとは思えない。

「他に御用がないようでしたら、私はこれで」

「だったら、どこでそれほど怪我をしたの？ 全身に擦過傷と打撲があつて、肋骨なんか三本も折れてるそうじゃない。まるで爆発で吹き飛ば……」

「交通事故です。大使館の車両が居眠りのトラックに衝突されました」

「あ、あのリムジンが？」

大使館の車両には、舞も乗せてもらったことがある。

王の側近、しかもシークの称号を持つヤイーシュなら、多分あのリムジンに違いない。

「はい。車体はもちろん、ガラスも防弾ですので多少の衝撃にはビクともしません。ですが、運の悪いことにガソリタンクを破損しました。漏れたガソリンに引火して……。死人が出なかったのが幸いです」

殊勝な顔で言うヤイーシュに、舞はうつかり頷きそうになった。

でも、なにかおかしい……

「ちょっと待って！ それでなんで偽名を使ってるわけ？」

普通に入国すれば済むことだ。というより、そんな重傷でわざわざ

ざ来る必要がないだろう。

「自主的に退院を決めたため、大使館員に止められました。入国の際にやむなく母方の姓を。それと……陛下への報告は私の役目ですので」

しらっとした顔で答えた後、ヤイーシュは口にチャックをしてしまった。

ミシユアル国王相手なら“泣き落とし”や“色仕掛け”の手が使えるが、ヤイーシュ相手ではどうしようもない。結局、判ったような判らないような……舞はヤイーシュの牙城を突き崩すことができず、あえなく退散したのである。

(10) 憎いけど好き!

フテ寝を決め込もうとしていた舞を、ベッドから引っぱり出したのはレイ国王とティナであった。

クロエがベッド脇にきて、

「国王陛下ご夫妻がビーチでお待ちになっておられますが……。アイシャ妃殿下のお加減が悪いようです、と申し上げたほうがよろしいでしょうか？」

心配そうに声を掛ける。

(そ、そんな恐れ多い！ 仮病で両陛下を追い返すなんて、バチが当たるって)

舞は飛び起きて身支度を整えた。

だが、どうしてビーチなのだろう。普通はリゾートの入り口から入ってくるもんじゃないだろうか？

そして、舞の疑問は彼女がアバヤ着用でビーチに下りるなり、解消されたのだった。

くくくくくくくくくく

「ティナ！　ねえティナ、あれってひよつとしてイルカ？」

「ええ、そうみたいね。マイ、イルカは初めて？」

「もちろん！　ひよつとして、イルカと一緒に泳げたりする？」

舞は今、空から紺碧の海を見下ろしていた。

水面とごく近い深さを、滑るようにイルカの群れが泳いでいる。一、二頭が跳ねると数頭が後につづくのだ。そのたびに、舞は歓声を上げた。

彼女が乗っているのは王国のカラー、アズルブルーに彩られた飛行艇。三十人乗りのサイズにたった十席。余裕のVIP仕様だ。操縦士は一人でも国の規定には反していない。だが、安全のために副操縦士も配置され、乗客担当の女性乗務員までいる。さすが国立リゾート・スパご自慢の観光用飛行艇！と舞は感激していた。

飛行艇の窓に張りつき、イルカの群れをみつめる舞に答えてくれたのはレイ国王だった。

「このあたりは日本に比べると、本当にサメが多くてね。ビーチ以外は全面遊泳禁止にしているんだ。期待させて申し訳ないが」

「い、いえ、すみません。そんな外海で泳げるほど泳ぎに自信はないうんで……ちょっと言ってみただけなんです。本当にすみません」

済まなそうに言われると、逆に舞のほうが恐縮する。

これがミシユアル国王なら――

『馬鹿者！ サメのいる海で泳ぐつもりか！？』と一喝されて終わるだろう。

舞もムカついて、

『シークだったらサメくらいどうにかしてよ！』

なんて無茶なことも言えるのだが、相手が上品なレイ国王ではそうもいかない。

レイ国王はそんな舞の緊張をほぐそうと親しげに声を掛けてくれた。

「飛行艇に乗ったのは初めてかい？ いつでも使えるように待機させていたはずなんだが」

舞がミシユアル国王と一緒に、ヘリでセルリアン島に入って一週間が経つ。実質、丸四日間をふたりきりで過ごした。

「とくに船や車を使った様子もないが、館内施設だけでは退屈だったのではないかな？ ミシユアルは有能だが気の利くタイプではないし。ふたりで何を……」

言われてみれば、何をしていたんだろう？ と考え……二秒後に、舞は顔から火を吹いていた。

すると、

「レイ、あなたも少し気が利かないわ。おふたりは観光旅行にいらしたわけじゃないのよ」

頬を薄っすらとピンクに染め、ティナはレイ国王の袖を引っ張っている。

「ああ、失礼。確かにそうだ。随分前のことなので、うっかりしていた」

「あら？ まだ二年しか経っていないのに？」
ティナが少し唇を尖らせて答える。その仕草がなんとも可愛らしい。

レイもそう思ったのだろう。苦笑して自分の席から身を乗り出すと、彼女の手を握り……。なんと、頬にキスをしながら、

「もう二年だよ。それも半分以上が公務という実に忙しいハネムーンだった。今度はもう少し、ふたりでのんびりしたいものだ。シーク・ミシユアルに砂漠でも案内してもらおうとしよう——アーイシャ殿からも頼んでもらえるかな？」

軽くウインクして舞を見る。

（な、なんて……手馴れた、というか……スマートな王様なんだろう。さっすが、プレイボーイ・プリンスって言われただけのことはある！）

ついこの間、別れる別れないで大騒ぎしたカップルとは思えない。

いや、騒いでいたのはティナのほうだけって気はしないでもないけれど……。

ティナはレイ国王の言葉ですっかり気を良くしたらしい。ご機嫌な表情で彼をみつめている。

「素敵だわ。でも、砂漠って夜は寒いんじゃないかしら？ サソリや毒グモとかも怖いんだけど」

「国にもよるが……大きな砂漠は中央に向かうほど、昼夜の気温差が広がる仕組みになっている。町に近い場所なら、おそらく大丈夫だ。それに、砂漠の生物は基本的に夜行性だから、夜はテントでおとなしくしていたら安全だと教わった。ティナ、君はオアシスで泳いでみたいとは思わないかい？」

レイ国王の言葉に、舞は感心していた。

（へえ〜口説き文句が上手なだけじゃないんだ！ 見た目も頭も良くて、優しいときたら……そりゃ、ティナくらい美人でも不安になるよねえ。よかった……アルはカッコいいけど、性格に問題ありだから）

両国王が聞いたら卒倒しそうなことを考えつつ、舞は目の前でいちゃつくふたりを幸せな気分で見ていた。

すると、

「ねえ、マイ。マイはオアシスで泳いだことはある？ 楽しい経験だった？」

「え？ ええ、ありますよ。えっと、あときは……」

全裸でオアシスの泉に入らされ、ミシユアル国王にさんざん恥づかしいことをされて、拳句の果てに、盗賊団に攫われた、という。

この珍しい経験は——とても一言では説明しきれない。

「……楽しかったです……。えーっと、裸で泳ぐのがちょっと恥ず

かしかったかな」

「まあ、裸で泳がないとダメなの？　それはイスラムの教義なのかしら？」

「いえ……たぶんアルの、アルⅡエドハン一族のルールなんだと思いますけど」

舞が答えると、横からレイ国王が口を挟んだ。

「それは初めて聞いたな。数年前に一度、私が招待されたときは、下着のような布を巻いて入った記憶がある。男たちだけだったが……どうやら彼は、私が知るより策士なようだ」

そう言うレイ国王はクスクス笑っている。

（ア、アルのばかぁーっ！　オアシスには裸で入るもんだ、とか言って。ウソツキのスケベシーク！）

そのとき、飛行艇の最後尾から吹き出すような小さな笑い声が聞こえた。

「何か言いたいことでもあるの？　ミスター・キャラハン」

舞が座席越しに視線をやると、そこにヤイーシュが座っていた。

一応、レイ国王が客人を招いた、という形をとっている。でも、

彼が舞の警護のためについてきたのは明らかだ。

「いえ。そんな素晴らしいオアシスがあるなら、ぜひ私も同伴させていただきたいものです」

「ええ、ぜひ。わたしの知ってる、アルⅡバドル一族の族長シークなら歓迎してくれるでしょうよ。とーっても良いかただから！　でもその前に、イルカと泳ぐのも楽しいかもね。ミスター・キャラハン、あなたの毒舌ならサメだって逃げて行くんじゃない！？」

舞が言い返すと、ヤイーシュの隣に座ったシャムスが困ったように「ア、アーイシャさま、それ以上は……」と口にする。

だが、とうのヤイーシュは澄ました顔で、

「お優しいかただ、クアルンの王妃殿下は。できれば怪我人ですの
で、妃殿下の母国にある温泉にでも招待していただきたいものです。
サメ抜きでね」

聞きたいことはひと言も言わないくせに、どうでもいいことはペ
ラペラとしやべる。

（もう、頭にくるったら……早く戻って来てよ、アル！ っていう
か、連絡くらいしろーっ）

早く会いたい。せめて声が聞きたい。心の中で舞は夫の名を呼ぶ
が……。

(10) 憎いけど好き! (後書き)

御堂です。

更新ペースが落ちててゴメンなさい> ((<

そんな中、10月にサイト開設2周年を迎えます。

お礼のSS番外編を何にするか…ということで、アンケート第4弾を開始しました!

全9問ですが必須回答は5問のみ。

それもチェックだけで済みますので、よかったらご協力お願いしま
す (^^) /

こちらです⇒http://enq_maker.com/efcSUR

(11) さまよえる砂漠の王

本島から北へ約二百キロ、国王一行は飛行艇で第二油田基地を視察に訪れていた。

安全のため、周囲は海軍に警戒させている。今日ばかりは、ロシアやアメリカの潜水艦はおろか、サメの一匹とてアズウォルド海軍のチェックなしでは領海内を横切れない、という嚴重さだ。

そもそもミシュアルの敵対勢力に、そこまでの警戒に値する軍力は無いのだが……念のためであった。

『レイ国王陛下。このたびの寛大なるお申し出、心より感謝申し上げます』

レイにアラビア語で話しかけてきたのはスーツ姿のヤイーシュだ。二人は監視棟に立ち、窓からデッキを見ている。そこにはティナと舞が並んで油田の責任者、ジョージ・カンザキから油田の採掘作業についてレクチャーを受けていた。

『他人の身分証を使い、偽名で入国した男を公賓として遇し、国立リゾートの滞在を認めたことかな？ ミスター・キャラハン』

『……恐れ入ります』

レイはターヒルとは面識がある。だが、このヤイーシュとは初対面であった。

ヤイーシュは、アメリカ人との混血というだけあり、肌の色はミシュアルよりレイに近い印象だ。髪の色も淡く、金に近い亜麻色：

サンドベージュ

……たしか砂色と言っていた。なによりレイが身近に感じるのは、青い瞳のせいかも知れない。アズルブルーより透きとおった空の青。

中東にも青い瞳の部族がいるというが、ヤイーシュはそういった部族とは関係ないらしい。

本来、重傷者である彼を引っ張り出すのはどうかと思ったが……。様々な事情を考慮し、ヤイーシュの同行を許可した。

『シャムスには事実を伝えずともよかったのだろうか？』

レイがぼつりと呟いた言葉にヤイーシュが応じる。

『はい。夫が暴動の首謀者として逮捕されたと聞けば、彼女は悲しむでしょう。ターヒルもそれを望みません』

——ターヒルの逮捕。

それは今朝、レイが外務省経由で受けた報告だった。

『だが、ターヒルに万一のことがあれば』

『たとえそうでも、彼女にできることは神に祈るだけです。それは今、聞かされたとしても同じこと』

厳しいようだが事実であろう。

レイが無言でいるとヤイーシュが続ける。

『ご心配には及びません。ミシユアル様が帰国されたのです。必ずや事態を收拾してください。ターヒルは陛下とともに妻を向かえに来るでしょう。私はそう信じております』

バストバンドを装着して胸部を固定し、痛み止めの注射を打ってはいるが、医師からは昨夜も三十八度の発熱があったと報告を受けている。

『ミスター・キャラハン、君自身はどうだ？ この警戒態勢を見て、充分に納得してもらえたと思うが。君も無茶をせず、ヴィラで静養にあたるべきだと私は思っている』

『お言葉、ありがたく。——私は以前、ミシユアル様に失礼な振る舞いをいたしました。それにも関わらず、今回、正妃様の警護を任せていただけて光栄に思っております。身命を賭して、アーイシヤ様をお守りする所存です』

『だが、君に何かあればシャムスのように泣く者もいるだろう』

レイは何気なく尋ねたつもりだった。

しかし、予想以上にヤイーシユは狼狽し、

『そつ、そのような者は……私に妻はおりませんし、第一、妻はアズウオルド人と決めておりますので。日本にそのような……』

⌈
.....?
⌋

逆にレイのほうはどう答えてよいのかわからない。

『さあ、そろそろセルリアン島に戻ろうか。ミシユアルから、ターヒルを連れてクアルンを出発した、と連絡が入っているかもしれない』

レイはヤイーシュを促し、デツキに向かうのだった。

$$\begin{array}{c} \hookrightarrow \\ * \\ \hookrightarrow \\ * \\ \hookrightarrow \\ * \\ \hookrightarrow \\ * \\ \hookrightarrow \end{array}$$

『シド！ ラシード、私にはお前の話がさっぱり判らぬ。もう一度、最初から説明いたせ！』

ほんのひと月前、新国王誕生で賑わった莊嚴かつ壮麗な白亜の王宮。

そこに、ミシユアルの怒号が鳴り響いた。

緊急とはいえ国王の帰国である。ドーム屋根の大広間には赤い絨毯が敷かれ、通路の左右に大臣がひれ伏していた。ミシユアルは彼らの間を大股で通り抜け、玉座に座る。そして、呼び出したラシードの報告を受けていたのだが……。

『ですから……報告書どおりです。反日組織を殲滅し、暴動の主犯と目された男を逮捕いたしました。僕は陛下の命令に従い、父上に

指示を仰いで、リドワーン王子と協力しただけです』

ラシードはひざをつき、顔を上げないまま答える。

『その“主犯と目された男”が、なにゆえ私の側近ターヒル・ビン・サルマーンになるのか、と尋ねている。答えよ』

『それは……先ほども申しましたとおり、父上の署名が施された命令書に従っただけです』

『確かに、父上にはお前をはじめ若い王族が暴走せぬように、監督をお願いした。だが、父上がご自分で反日組織の捜査をされているなどと聞いているはおらぬ。ましてや私の側近に逮捕状とは何ごとか！？』

『そ、それは……』

ミシユアルが王宮に入ったほぼ同時刻、ターヒルの逮捕が伝えられた。

衛兵らの顔ぶれに変わった様子はない。正式な報告以外、彼らから話しかけることはできないので、ミシユアルから質問した。すると、多くの者が『側近中の側近であるターヒルがなぜ？』と疑問を口にするだけだ。

それだけではない。

朋友ターヒルの危機にどうしてヤイーシュが帰国しないのか。そんな声すら上がった。クアルンではヤイーシュが日本に足止めされていたことも、在日大使館で爆破事件があったことすら報道されておらず……。

（なんとということだ！　これほどまで徹底した報道規制、情報の遮断が行われていたとは……）

『わかった！　ではもう一人の責任者、リドワーン・ビン・ワツハーブを呼べ』

『恐れながら申し上げます。リドワーン殿下は今朝、ルシーアの宮

殿におられますカイサル様のもとに向かわれました』

近衛隊長が一步前へ出てひざまずくなり答えた。

『それは私が帰国する、という一報を受けてか？』

『それは……わかりかねますが』

『よい。では、逮捕したターヒルをただちに釈放し、私の前に連れてくるのだ』

近衛隊長はうつむいたまま息を飲む。

『国王命令がきけぬか？』

『い、いえ』

『まさかとは思うが――すでに処刑したとは言うまいな』

その声は、静かだが鬼気迫るものであった。

しんとした大広間に、カチカチと奇妙な音が広がる。ミシユアル国王に正面から睨まれ、齒の根が合わない近衛隊長の口元から発せられていた。

彼は酸欠の魚のようにパクパクと口を開きつつ、

『い、い、いえ。そ、そんな……そのような報告は受けておりません。リ、リドワーン殿下が……カイサル様のご命令とおっしゃり、ターヒル殿を連れてル、ル、ルシアに……』

ミシユアルは少し考え、あらためてラシードに問いただした。

「シード。妻と娘は息災か？」

突然の日本語にラシードはハッとして顔を上げた。

その目にはくっきりと動揺が浮かんでいる。

「お氣にかけていただき、恐れ入ります。ふたりとも妻の母であるサマン殿を訪ねておりまして……」

サマン王女が夫と別居し過ごしているのもルシア地方にある別

邸。

ラシードの答えを聞くなり、ミシユアルは命じた。

『ルシアの宮殿に参る。ヘリを用意せよ!』

(12) ロイヤル・ターゲット

ミシユアルはヘリを用意させる間、リドワーンの人柄を思い浮かべていた。

彼は優秀だが腹の据わった男ではない。言われたことだけをこなして、何ごともほどほどで妥協できる人物だ。宗教警察の幹部で軍務経験もあるが、前軍務大臣だったマッダーフとは格が違う。とても、軍を率いてミシユアルに対抗するような勢力など持ちようがない。

海外では王族の特権で、多少羽目をはずしているようだが……。それに関しては国際法に触れない限り、ミシユアルも目こぼしするつもりでいる。締め付けが過ぎては、より凶悪な犯罪に走る王族も出てくるからだ。

(ヤツに関しては、手綱の加減を誤ったか?)

ミシユアルは独自のルートでルシア地方の安全を確認した。そのうえで、王宮の真裏にあるヘリポートに急ぐ。

そんな彼の後を追いかけてきたのはラシードだった。

「アル……僕も行きたい。連れて行って欲しい」

「――それは認められない」

「砂漠で式を挙げたときは、ふたりともダリヤを離れたじゃないか」

「あのときは父上が国王だった。だが、今は違う」

ミシユアルが帰国するまでラシードが首都を離れることはできない。国王と王位継承順位一位の王子がそろって王宮からいなくなれば、何か起こるかわからないからだ。

それと同じような理由で、王位継承者が同じ乗り物に乗ることも

禁じられていた。以前、ミシユアルとラシードが砂漠から首都に戻るとき、別々のジェットヘリを飛ばしたくらいである。七歳以上の王の息子たちには、全員別々の乗り物が用意されるのが慣例となっていた。

テロや内乱が普通に起こりうる情勢で、一度に王位継承者を失わないための策だ。緊急時以外はそれが決まりであった。

ミシユアルに冷たくはねつけられ、ラシードは立ち尽くしていた。「僕の言葉がさっぱり判らない、と言ったけど……。実は僕自身も判らないんだ。本当に正しい行いを重ねてきただけで、気がついたらアルだけでなく、誰とも連絡が取れなくなっていた。おそらく、みんなもそうだと思う」

なんと返したらいいのかラシードの言葉だけでは判断ができず、ミシユアルは無言を通した。

するとラシードは声を潜め、

「ライラとルナ・アイシヤが心配だ。母上が危篤と聞き、駆けつけたんだが、一度も連絡がない。こんなことなら、ルールを破っても僕がついて行くんだった。……僕が」

泣き言を言い始める。

そんなラシードの胸倉をつかみ、

「馬鹿者！ 妻の言いなりなるお前が愚かなのだ。夫の威厳を保てぬなら、妻など娶るな！ シド、今のお前が王家の定めた規則を破れば、王子の地位を失うぞ。そのとき、ライラがついて来ると思えるか？」

答えは誰の目にもあきらかであろう。

しかもそのときは、愚かな弟に代わって、ミシユアルがライラの面倒をみる必要がでてくる。これまでなら当たり前のように妻のひとりに迎えてきた。

だが、それは王の判断で回避するとして……。

将来、正妃である舞に男子が恵まれなかったとき、再び、ライラを妻にという声上がるのが目に見えるようだ。

ミシユアルの叱責にラシードは言葉を失う。

だが、ラシードの言い訳にミシユアルはある確信を得ていた。今はまだ、クアルン国内において何も起こってはいないのだ、と。

間違いなく、リドワーンによって情報操作され、混乱を招いているのは事実だ。しかし、まだ反乱といえる段階ではない。

彼はミシユアルをルシアの宮殿に呼び出し、いったいどんな要求を突きつけるつもりなのか。

ミシユアルの力を殺ぐ為、ターヒルとヤイーシュを遠ざけたのはわかる。だが、それにしてもヤイーシュに対するやり口が辛辣すぎる。まるでヤイーシュは殺しても構わない、というような……。

『国王陛下、ヘリの用意ができました！』

『わかった』

（ヤイーシュをアズウォルドに残してきて正解だった。いろいろ含むところはあるが、ヤイーシュなら舞を守るだろう。それでも何かあったときは……）

最悪の場合にならないことを願いつつ、ミシユアルはヘリに向かって足を進めた。

くくくくくくくくくく

アズウォルド王国、空の玄関口に一機のプライベートジェットが着陸した。ジョン・F・ケネディ国際空港から飛んできた民間機

である。

「ようこそ、アズワールドへ。パスポートを拝見いたします」

それは赤い表紙で“日本国”と金字で書かれている。

女性職員はにこやかな笑顔をくずさぬまま、男に声をかけた。すべて言われずとも男は察したようだ。右手で黒いサングラスをはずす。

そして女性職員は男の素顔を見た瞬間、息を飲む。そのまま十秒あまり、彼女は無言で見惚れ続け――。

耳ざわりの良い、艶のあるバリトンが女性職員の耳に届く。彼女は頬を赤らめ、自らの想像を恥じるようにうつむいた。

$$\begin{array}{c} \wr \\ * \\ \wr \\ * \\ \wr \\ * \\ \wr \end{array}$$

入国カウンターの職員の間で、ひとりの日本国籍を有する男性が話題になった同じ夜――

セルリアン島の国立リゾート・スパは闇に包まれていた。時刻はすでに深夜、本館から数人の人影がヴィラの方角に小走りに向かう。彼らの目指す方角にあるのはVIP専用のヴィラが立ち並ぶ一帯。

一軒のヴィラを取り囲むように、彼らは息をひそめた。

やがて、ひとりが何かを取り出し、カード認証システムに翳す。赤いランプがグリーンに変わり……それは、ロック解除の表示だった。

客のプライベートと安全を考慮して、屋外のみ二十四時間稼動という最強の防犯システムだ。ヴィラだけでなく、リゾート・スパの敷地全体にセンサーが網の目のように張り巡らされている。

――ということは、である。前の晩、舞がこっそりヤイーシュのヴィラを訪ねようとしたことも警備室には筒抜けだったのだ。

ヤイーシュは事前に「妃殿下がヴィラを出られるようなときは、ただちに連絡を」と警備室に頼んでいた。半信半疑の担当者だったが……。ヤイーシュはあらかじめ、舞を待ち構えていたことになるのだから、タイミングよく助けられて当然であろう。

扉は音もなく開いた。

正面玄関横にあるキー管理システムで、建物内のロックが一斉に解除される。カードを手に認証システムを突破した男がインカムに向かって小さな声で囁いた。

そこから漏れ聞こえてきたのは……。

(13) 真夜中の訪問者

室内のカーテンが風になびいた。吹き込んだ海風はどこか生暖かく、室内の温度はわずかだが上昇する。

その部屋の中央にベッドがあつた。窓際にある大きなソファは、ミシユアル国王が氷を使って舞に悪戯した場所である。ベッドサイドのポールハンガーにはアバヤが掛けられ――。

そこは、舞の滞在するヴィラで間違ひなかつた。

ベッドは素朴な木を組み合わせた天蓋で囲まれている。目の粗いカーテンが下がっており、侵入者のひとりがカーテンをつかむと力任せに引き千切つた。

『我らは“愛国の戦士”である！ 日本人女は先代国王を誑かして、尊きクアルン王家の血を汚した。それだけにとどまらず、新たな女を送り込み、正妃の座まで得ようとは。我らはこれ以上、不浄な血が混じつた王は認めぬ。外国人の血は力によって排除する！ アッ^{シャー}ラーのお望みのままに』

男はアラビア語で叫ぶと、ベッドの中央に横たわる人物に向かつて、小ぶりのジャンビアーを振り下ろした。

本来なら拳銃を使いたかつたのだろうが、今のアズウォルドは特別に警戒が厳しい。お守り代わりのジャンビアーを持ち込むのが精一杯であろう。

ジャンビアーを突き立てる寸前――。

薄い掛け布の下から男は腹を蹴り上げられ、もんどり打って後ろに倒れた。侵入者たちの顔色が一瞬で変わる。

『やれやれ、あまりに遅いので本当に寝てしまふところだった』

『なっ！ 貴様は……』

ベッドから半身を起こしたのはヤイーシュだ。
もちろん、舞の姿はどこにもない。

『なぜ貴様がここにいる！？』

『異なことを。お前たちを捕まえるための罠に決まっておろう。何のために、わざわざ妃殿下を島の外に連れ出したと思っている？』
舞がいなくなれば島の警備は手薄になる。そしてなるべく隙を作り、侵入者をこの島におびき寄せた。当然、舞がこの島に戻ったはずがない。

ヤイーシュはゆっくりとベッドから下りた。髪を後ろで束ね、上半身は裸、下半身にはトーブの下に着用する白いズボンをはいている。足は裸足だ。

そして、武器らしき物は何も持っていなかった。

彼は侵入者の前で仁王立ちになり、
『顔を隠しているところを見ると、どうやら無事に逃げ出せると思っ
ていたらしいな。愚か者が！』

そう吐き捨てる。

ヤイーシュの怒声に、男は顔に巻いたグトラをはずした。

『やかましい！ アメリカ人の血が混じった出来損ないのシークが
！ 貴様が王の側近など笑わせるな』

男は先日の爆破事件直後、本国から在日クアルン大使館に派遣されてきたひとりであった。

どうやら、彼らのパスポートや身分証は本物らしいが、本当に派遣されてきたわけではないようだ。それらの手配はリドワン王子にも可能だが……。

黙り込むヤイーシュに向かって男は挑発的な言葉を口にする。

『雑種というのは、生命力だけは旺盛でたちが悪い。車を爆破して

死んだと思ったのに、まんまと生き残りおって』

『あれしきで死ぬ者などおらぬ。かすり傷だ』

ヤイーシュは腕組みをして侵入者たちを見据えた。

バストバンドは装着せず、骨折などなかったかのように振る舞う。弱味を見せては終わりだ。それは砂漠で生きる野生動物のような本能だった。

男は悔しそうに、

『どうせ王に異国の女を娶るよう、そそのかしたのも貴様らであるう』

『何を馬鹿な。王の婚約は十五年も前に決まったことではないか。当時は王弟殿下の第一王子であられたが。王はアッラーの誓いを守られたただけだ！』

『欺瞞にすぎぬ！ ラフマーン国のサディーク王子まで利用して、日本人女を正妃につけるとは。あの日本人女を生かしておく、いずれ我が国の資源は日本に吸い尽くされるのだ！』

そう叫ぶと、男たちは一斉にヤイーシュに斬りかかった。

だが戦闘には適さない室内である。ヤイーシュは最初にかかってきた数人を叩き伏せ、次にリーダー格の男を捕まえた。そのまま、彼らへの盾にする。

『騒ぐな！ 庭をしてみるがいい』

次の瞬間、庭からヴィラの建物に向かってライトが照射された。

室内はまるで昼間のように明るくなる。沖にはアズウォルドの戦艦が、浜からは兵士が階段を上がってくるのが見えた。

そして庭に待機しているのは島内の警察官だ。彼らの先頭に立つのが、レイ国王の命令を受けた王宮警察に所属するニック・サトウ。本来は国王専属の警護官として王宮に勤めている。ミシユアル国王ほど大柄ではないが、ヤイーシュと遜色ないほどの体格をした強面こわもて

の男だ。

そのニツクが拳銃を手に一歩屋内に踏み込んだ。

「この建物だけでなく、国立リゾート・スパの周囲は警官が、そしてセルリアン島は海軍が包囲した。逃れる道はない。投降しない場合、射殺が許可されている。小さな島国だと甘く見られては困る。我が国はテロリストに対して容赦はしない」

ニツクのアズウォルド英語をアラビア語に訳し、ヤイーシュは男
たちに伝えた。

『この国はテロにより国王を殺された過去がある。暴力により歴史を動かそうとする者には容赦がないぞ』

『——我らはアツラーの教えに……』

『王に背き、正妃の命を狙う不届き者に、
アッラー！
神の名を口にする資格などない！』

ヤイーシュの手中で“愛国の戦士”を名乗る男は力なくうなだれた。

$$\begin{array}{c} \wr \\ * \\ \wr \\ * \\ \wr \\ * \\ \wr \end{array}$$

セルリアン島に一旦戻ったものの、ヤイーシュだけ降ろし、舞とシヤムスは本島に行くことになった。

ディナー
王宮での夕食に招待されたからだ。

レイ国王とティナ、それにレイ国王の大伯父にあたるリユーク王子夫妻と彼の孫アーロン王子も一緒だった。アーロン王子はレイ国王の異母弟でもあるという。真面目そうで口数の少ない十三歳の少年は、淡い茶色の髪とアズルブルーの瞳がレイ国王によく似ていた。

『遅くなったので国賓室に泊まって行くといい』

夜も更けて、舞はレイ国王の言葉に従う。

ミシユアル国王がいつ戻ってくるのか、夕食の席で聞くことはできなかった。だが、一夜明けたら聞く機会もあるだろう。そんなふうに考えたからだ。

王宮正殿の国賓室はふたりでも広いのに、ひとりだと寂しすぎる。シャムスと一緒にいて欲しいと頼んだが、ヤイーシュに代わって付いてきていたダーウッドが、

『王妃と女官が同じ部屋で寝るなどとんでもない！』
と喚き、舞はひとりきりになったのだった。

（ダーウッドの石頭っ！　ほんと、生きた化石なんだから……）

昼間も、そして夕食の間も、ティナたちは舞の寂しさを紛らわせてくれようと必死だった。

そのことがわかるだけに、舞も精一杯明るく笑ったつもりだ。

でも……どんなにキレイな景色も、美味しい食事も、これ以上望めないような豪華な部屋を与えられても、ひとりでは色褪せる。ミシユアル国王と一緒にないと心細さが付きまとう。

舞は天井の豪華なシャンデリアを見上げ、目をこすった。

「アルの馬鹿……。早く迎えに来ないと、日本に帰っちゃうからね」

小さな声でポツリとつぶやいた。

……カタン……コトツ……カチャ……

最初は夢かと思った。

でも、舞の眠りを妨げるような音が先ほどこら聞こえてくる。舞は夢見心地のまま、近づいてくる足音に薄く目を開けた。天蓋から吊るされたカーテンの向こうに、黒い影がボンヤリと浮かぶ。

「……アル……？」

舞は半分眠ったまま声にした。

直後、ふわりとカーテンが揺れ……月光を背に黒い影が目映る。その影は舞に向かってゆっくりと手が差し伸べ……。

（ヘンな夢だなあ……どうせなら、アルの夢が見たいのに）

舞はボケた頭でそんなことを考えていた。

刹那——伸ばされた手が舞の口を押さえたのだ。
急に息苦しくなり、

（こ、これって、ひょっとして、夢じゃないんじゃ……）

闖入者が手を振り上げたように見え、その先が月光にキラリと反射して——

(13) 真夜中の訪問者(後書き)

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

ロマンスから離れていますが…

えーっと(＊▽＊)テヘ♪(↑笑ってごまかす)

執筆予定が厳しく、今月いっぱい週1回の更新になりそうです(＊；ω人)

完結一気読みも歓迎!!

よろしくお願いします。

(14) 異国から来たナイト

舞はギュッと目を閉じ、覚悟を決め……たりするわけがない。

光ったのが刃物なら、ここで諦めたら間違いなく殺される。得意な蹴り技を披露したいが、横から押さえられていては足が届かない。舞の手元にあるのは羽根枕くらいで……。

舞は枕を手でつかみ、思い切り振り回した。

次の瞬間、枕が切り裂かれ、寝室に最高級のグレーダックダウンの羽根が舞った。

(も、もったいなかったかも……)

なんて思ったが、命には代えられない。

舞は飛び起きて入り口のドアに向かう。だがそこには、鍵がかかっていたのだ。

仮にも国賓室のドアである。日本の家にありがちな、ボタンを押したり、カチリと捻ったりする簡単なタイプの鍵じゃない。

どっしりしたドアに丈夫そうな真鍮製のドアノブ。ノブの下に鍵穴が一つ。特殊な鍵を使って、中からのみ施錠できると聞いていたが。

(あ、あれ、鍵かけて寝たっけ？ いや、そもそも鍵ってどこにあるのっ！？ 第一、表に警備兵が立ってるから、逆に鍵はかけないほうがいいって言ってたんじゃ……)

「なっ、なんで開かないのよーっ！」

後ろに人の気配を感じ、舞は振り向いた。

暗闇の中、侵入者が舞に向かって突進してくる。その手には、間違いなく刃物が握られていた。

「たっ、助けてーっ！ ドロボー！ ヘンタイ！ 変質者よーっ！ 誰か来てーっ！！」

舞は声を限りに叫んだ。

ところが、外から警備兵の駆けつける様子がまったくない。

（ど、どうなってるの！？ 職務怠慢だってばっ）

部屋を見回し武器になりそうなものを探すが、壊したらマズイような骨董品ばかりだ。しかも、軽くてコンパクト——繊細な陶器か宝飾品ばかり並んでいた。

（なんで甲冑とか槍とか飾ってないのよ。防犯用のバットくらい置いていてよっ）

槍を持ってどうする気か、と聞かれたら困るが……。

とりあえず、舞はソファを飛び越えながら、テーブルの上にあった大理石の灰皿をつかんだ。

「あなた誰っ？ わたしをクアルン王国王妃、アーイシャ・モハメツド・イブ？ アブ？ いや、ラブ？ ……サドがどうか。とにかく！ わたしに何かあったら、ミシユアル国王が黙ってないわよっ！」

今夜の舞はハネムーンにぴったりのヒラヒラネグリジェ姿である。しかし、片手に大理石の灰皿を持ち、もう片方の手には、まだ切られてない羽根枕を持っていた。お世辞にも、強そうとは言いがたいファイティングスタイルだ。

舞の名誉のために付け加えるなら……普段は自分の名前くらいスラスラ言える。

でも寝込みを襲われたうえ、刃物を手に追い回されては、とても平静ではられない。

闇の中、侵入者は黒づくめの服装をしていた。ベッドの反対側から月光が射しているが、こちら側は目を凝らしてもほとんど見えない。だが、立ち上がった舞と視線の位置がほぼ同じ。ということは、男性なら、さほど大柄でない人物ということになる。

そして舞は、その目に見覚えがあった。

（ま、まさか……ね。そんな……いくらなんでも）

侵入者は刃物を腰に仕舞う。

しかしそれは撤退を意味したものではなく……。懷に手を差し入れ、黒光りするモノを取り出したのだ。

「ちょ、ちょっとソレって反則!!」

羽根枕と大理石の灰皿で、どうやって拳銃の弾が防げるだろうか。舞はとりあえず前に突き出し重ねてみるが……効果はなさそうだ。

「な、なによ! 仮にも殺そうっていうんなら、名前くらい名乗りなさいよねっ! わたしを殺したってなんにも変わりはないんだからっ」

せめて時間稼ぎになれば。助けが来るまでの……。

そう思ったとき、舞の胸にイヤな予感が走った。

「ちょっと待って! あんたってば、まさか外の警備兵を殺したの?」

さすがの舞も声が震えた。

何度かピンチには陥ってきたけれど、今度ばかりはヤバイかもしれない。なんといっても、ミシユアル国王は舞の近く……どこるか

この国にはいないのだ。ヤイーシュもセルリアン島に置いてきた。
しかも怪我人。

頼みの綱はレイ国王だが、賊がここまで入ってきて、しかも騒ぎ
になっていないということは……。

（……手引きした者がいるんだ。王宮のほうは誰も気づいてないか
も）

冷たい汗が背中を流れた。

黒い光がピクリと動き、舞はとつさに灰皿で頭を覆い、しゃがみ
込む！

舞の耳に——ガンッ！ と何かが壊れる音が届き、続けて、パン
ッ！ ともう少し軽めの空気を震わせる音が聞こえた。

く*く*く*

「大丈夫か！？ 怪我はないか？ 返事をしろっ！」

「ア、アル？ アル……アル……アレ？」

発砲音のあと、舞の耳に聞こえてきたのは間違いなくミシユアル
国王の声だった。

そして腕をつかまれ、舞は彼に抱きついたのだ。だが、どうも……
……なにかおかしい。

（声は同じなんだけど、なんか……違う気がする。胸板の厚さとか
……それに、砂漠の匂いがないような……？）

舞は体を離し、助けてくれた男性の顔を見上げた。

暗がりにミシユアル国王と同じ、琥珀色の瞳が光った。――やっぱリアルだ。と思った直後、髪のがさが違うことに気がつく。それに、色も真っ黒に見える。ミシユアル国王はチョコレート色なので、暗がりでも仄かに明るいのだ。加えて、見上げる首の角度が低め。普段は真上を向くようになるはずで……。

「あ、あの……どちらさまでしょう？」

「その前にすべきことがある」

声は恐ろしいほどミシユアル国王に似ている。目を閉じて聞いていたら、わからないくらいに。

彼は舞を自分の背中に庇い、左手に持った拳銃をうずくまる黒ずくめの男に向けた。

「貴様は……いや、貴様は王家に背いた愚か者だ。恥を知れ――ダーウッド！」

日本語が、いきなり流暢なアラビア語に替わった。

そして、彼の口から発せられた名前に舞は叫んだ。

「ダ、ダ、ダーウッドって言った？」

舞もようやく暗がりに目が慣れる。黒ずくめの男が口元の布を下ろし、こちらを睨んでいた。どうりで、鍵を持っているうえに、簡単に入ってこれたはずだ。

ヤッパリという思い、そして、まさかという思いが胸の中を駆け巡る。

「なんで？　なんで、こんな……」

『下賤な女め！　私はアラビア語以外の質問に答えるつもりなどない！』

『えっと……どうして、わたしを殺すの？』

『決まっておろう。お前はすでに王の種を宿しておるかも知れぬ。殺さねば、次の王にはさらに穢れた血が混じる』

きっぱりと言い切られ、舞はそれ以上なにも聞けない。

『同志をセルリアン島に送り込み、ヤイーシユの動きを封じたというのに。まさか、あなたがこの国におられるとは……』

『……アルの頼みだ。断るわけにはいかない』

『ミシユアル国王のせいで婚約者を失いながら、それでも命令には従われる、と。美しい兄弟愛ですな』

『命令ではない！ 奴が自ら歩み寄り、私に頼みごとをするなど……よほどの事態だ。国は捨てたが、神と家族は捨てていない。引き受けた以上、命に代えてもアーイシャ妃とその御子を守る。——アッラーの名にかけて』

ふたりは早口すぎて舞には理解できない部分も多い。

だが“兄弟”^{シヤキーク}という単語はしっかりと聞き取った。

「兄弟？ 兄弟って……ひょっとして、アーデル……いや、アディール王子？」

「笹原でいい。アーディル・ビン・カイサル・アール・ハーリファという名前もある。だが……^{さやばらこうへい}笹原公平のほう覚えやすいだろう」

声は似ているが温度が違う。ミシユアル国王ならすぐに怒鳴るところだが、この笹原は常に抑制されたトーンで話すのだ。

そして舞は思い出した。彼の名前が“公平さ”^{アーディル}を示す言葉だ、と。

『それはそれは立派な心構えですな。やはり、王位継承権は捨てても、保守的なあなたこそ王位にふさわしい。ラシード王子では国が

割れるやも知れぬ。ミシユアル国王も最期によいことをされた。こうして、あなたを呼び戻されたのですからな』

舞の耳に飛び込んできた“死ぬ”^{ヤムートゥ}という単語に心臓が大きく跳ね上がり――。

(14) 異国から来たナイト (後書き)

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

ここで登場、第二王子です (笑)

彼は日本国籍で日本名を持っています。

彼がヒーローのお話はこの数年後、いつか発表したいと思っています。

うーん、結婚2ヶ月目で未亡人になりそうな舞ちゃんですが：

す、すみません、また来週 (^^;)

よかったらお付き合いくださいませ。

(15) あの朝の別れから

頑丈なドアのノブが見事に壊れ、ドアは開いたままになっている。そしてベッドの近くで肩を押さえ、ダーウッドは跪いていた。

最初の発砲でドアの鍵を壊し、二発目で彼の肩を撃ち抜いたらしい。

アーディル王子こと笹原はかなりの頼りがいのある人物のようだ。……それはともかく。

『ダーウッド、それはいい……』

「ちよつと、ダーウッド。今なんて言ったのっ!？」

義弟を押しつけ、舞はダーウッドに詰め寄ろうとする。

しかし次の瞬間、ダーウッドは一旦おさめた刃物……ジャンビアーを手に斬りかかってきた。小振りな日本の出刃包丁くらいの長さだが、殺傷能力は充分にありそうだ。

笹原が慌てて飛びつこうとしたが……。

しかし、今の舞はさっきの彼女とは違う。

相手は利き手を動かすこともできない。それに、平均よりはカクシヤクとしているものの、ダーウッドは七十近い高齢だ。

思えば、闇の中とはいえ敵が笹原のような若い男だったら、舞は逃げ切れていなかっただろう。

ダーウッドが斬りかかるといってもかなりゆっくりで、舞は手にした大理石の灰皿でジャンビアーを叩き落した!

『無礼者! 聞かれたことに答えよっ!』

舞はミシユアル国王の口調を真似て叫んだ。

ところが、笹原もダーウッドも目を見開いて驚いている。

舞はとたんに不安になり……「わたし、なんか間違えてる？」と笹原に尋ねた。

「いや……だが、男言葉で怒鳴る王族女性は私の記憶にはないな。まあ、最近のことはわからないが」

そういえば、以前ターヒルが『発音は正確に、そして女性形と男性形があるので、英語と同じように考えてはいけません』なんて言っていた気がする。

では、女言葉でどう言えばいいのか、とっさに出てくるものではない。

『だが、ダーウッド、妃殿下のおっしゃるとおりだ。聞かれたことに速やかに答えよ。貴様が国王を手にかける、愚か者ではないと信じていたい……』

舞が悩んでいる間に、笹原がダーウッドに尋ねた。

『さあ、私は存じませぬな。ただ、本国には日本人女を正妃にした陛下をよく思わぬ人間もいる、とだけ申しておきましょう』

「アルに妙な真似したら、ただじゃ済まさないから！」

『日本語の質問に答えるつもりはないと』

舞はズンズン歩いて再びダーウッドに近づく。さすがに大理石の灰皿はまずいので、もう片方の羽根枕で彼の頭をぶん殴った。いくら柔らかい枕とはいえ、思い切り払われたら平手打ちくらいの威力はある。

「答えなくてもいいわ！ 覚えときなさい。アルになにかしたら、あんたを殺してやる！ ゼツタイに許さないからっ」

激昂して怒鳴る舞に比べて、笹原はずいぶん落ち着いた声だ。

「その脅しは意味をなさないだろうな」

「ど、どうして？」

「この男はあなたを襲った時点で死刑が確定している。本国に戻りしだい銃殺。残っても、アズウォルドの王宮正殿で国賓を殺傷しようとしたんだ。この国の死刑は絞首刑。――生き残る道はない」

笹原の言葉にダーウッドは頬を歪めた。どうやら、彼は答えたくないだけで、本当は日本語もわかっているらしい。

「とにかく、一刻も早く、アルに連絡しなきゃ……夜中で悪いけど、レイ国王を叩き起こして」

舞がそこまで言ったとき、噴水の間の向こう、廊下のほうから大勢の足音が聞こえてきた。

その直後、隣の部屋から拳銃を手に、レイ国王が飛び込んできたのだ。

「アーイシャ殿！ お怪我はありませんか？」

背後には警備兵や警護官たちの姿が見え、一斉に国賓室になだれ込みそうになる、が……。レイ国王が手で制し、その間に笹原がベツドサイドのアバヤをつかんで舞の頭からかぶせた。

当の舞には、とてもそんなことまで気を回す余裕がない。

「申し訳ない。衛兵たちに大使館員は通すな、と伝えたのだが、ミシユアル国王の側近はノーチェックで通すようになっていた。妃殿下にお怪我がなくて何よりです」

何よりだと言うレイ国王の顔色が真っ青だった。

彼は舞の隣に立つ笹原に目を留め、

「ミスター・ササハラ、君の機転に感謝する」

短く礼を口にする。

「いえ。勝手な真似をして失礼致しました。身元を確認してから、明日、アーイシャ妃にご挨拶を、と言われていましたのに。何卒、お許してください」

この笹原は仕事でアメリカに入国していたが、そこからアズワールドに予定外の緊急入国をしたのだという。

（別に途中で寄り道くらい……）

と舞は思ったが、そう簡単にはいかないそうだ。

彼のように、王子の称号を持ちながら多国籍、という微妙な立場の人間はそう多くない。というか、反乱軍に国を追われて亡命するような人物と同じ扱いになり、滅多にいない。

公式にボディガードなどはつけられないが、彼の身に何かあれば国家的な問題に発展する。

行く先々で、笹原の行動は常に監視されていた。『安全に配慮して』といえば聞こえは良いが、まるで刑事事件の容疑者のようで居心地は悪いだろう。そんな彼が、兄・ミシユアル国王からの書簡を受け取り、独断でアズワールドに入国したのだという。

普通なら、大使館を通じ事前に入国先の許可を得る。でも彼は今回、そういった手順を一切無視した。

誰にも知らせず入国し、直接この王宮を訪ね、レイ国王にミシユアル国王の希望を伝えたらしい。

「書簡ってなに？ アルはあなたになにを頼んだの？」

舞はアバヤをかぶったまま、笹原に向かって尋ねる。

しかし、言葉を返したのはレイ国王のほうだった。

「――アーイシャ殿。テレビをかけさせてもらうが……構わないだろうか？」

「は？ テ、テレビですか？ はあ、それは別に」

言葉の内容に気が抜けたが、レイ国王の声はまだ緊張を孕んでいた。

（なんで、こんなときにテレビ？ でも、逆らうに逆らえないし…
…）

胸の中でぶつぶつ言いながら、舞は黙ってみていた。

すると、エアコン用とっていたリモコンを彼が手に取ると、ワ
ンタッチで壁がウィーンと上にスライド！そして、超大型のフラ
ットスクリーンテレビが姿を見せる。

「す、すごい！ こんなトコにテレビがあったなんて！？」

「何日も滞在して…君たちはテレビも見えていなかったのか？ そ
れはいったい、なにを」

レイ国王は呆れた声を出す…飛行艇の中で繰り返した同じや
り取りを思い出したらしく、咳払いして途中で口を閉じた。

舞も気持ちは同じだ。

ちよつと時間があればエッチなことばかりで、ミシユアル国王は
舞を片時も解放してくれなかった。綺麗で高価そうな骨董品ばかり
の部屋だ、と思っていたが…この分なら、他にもいろいろあるの
かも知れない。

（もうっ、アルってば！ 心配は心配だけど…そのへんのところ、
一回はハッキリ言っとかないと！）

舞がミシユアル国王の顔を思い描いた瞬間、その大型画面に彼の
顔が映ったのだ。

イケメン&美人アナウンサーがちよつと慌しいスタジオのセット
に並んで座り、早口で原稿を読み上げている。

画面の上部には『a news flash』の文字があった。

ニュース速報だとはわかったが、字幕なしにアズウォルドの英語でまくし立てられたら……舞は「ちよっと待って!」と言いたくなかった。

『……まさか……そんな嘘だ……』

舞の隣に立つ笹原がレイ国王以上に真っ青になり、アラビア語で呟く。

「え? なに? なんて言ってるのよ。ねえって……」

その直後、テレビから舞にもわかる日本語で女性アナウンサーが話し始めた。

——繰り返します。クアルン王国政府は、本日未明、ミシユアル・ビン・カイサル・アール・ハリファ国王の乗られたヘリが墜落し、国王陛下の死亡が確認された、と発表しました。同国王は即位して二ヶ月と日も浅く、王太子の席も空白であったことから、政府はただちに王族を召集し、後継者の選出にあたると……。

(16) 涙は流さない

「アーイシャ殿、今、こちらも大使館を通じて事実確認を急いでいる。政府の発表と言われているが、どうやら王室の長老会議の発表と受け取ったほうがいいようだ。とにかく、正確な情報を入手するまで、いたずらに悲しまないように……」

レイ国王がそう言って舞を励ました直後、背後で狂気めいた笑い声が上がった。

ダーウードだ。彼は手錠をはめられ連行されながら、
『イン・シャーアッラー！ クアルン王国万歳！』

呵呵大笑と勝ち誇った声でアラビア語を叫ぶ。レイ国王は警備兵に小さな声で「黙らせろ」と命じた。

舞は国賓室から王宮に移るように言われ、素直に従った。笹原は何か言いたそうだったが、レイ国王に明日にするよう言われ、彼もおとなしく引き下がったのである。

くくくくくくくくくく

何があっても朝は来る。

舞はそのことを実感しながら、短い眠りから目を覚ました。

天井にはこれまでと違うシャンデリアがぶら下がっている。王宮は壁や柱、調度品に大理石が多く使われているせいか、全体的に涼しげなイメージだ。

日本にすごく近い気がするのに、アズワールドは常夏の島なんだなあとあらためて思う舞だった。

ベッドは国賓室のものより少し狭い。

女官長のスザンナが、

「突然のことでお支度が充分でなく、申し訳ございません」

そんなふうに謝っていた気がする。

だが、実を言えばよく覚えていないのだ。

眠っているところをいきなり襲われた。

で、ミシユアル国王に助けてもらったと思ったら、実は初対面のアーデル王子こと笹原公平と名乗る人物。しかも、舞を襲った犯人は……先代国王から側近を務めて来たダーウッド。

決して私欲に走る人物とは思えない。そんな彼に殺したいほど憎まれていたのか、と思うと……。たとえ苦手なダーウッドとはいえ、かなりキツイ。

しかもラストは、ミシユアル国王の死亡が確認された、なんていう馬鹿げたニュース。

（ダーウッドも呑気に笑っちゃって、バツカじゃないの！？ あのアルが簡単に死ぬもんですか！）

ハッキリ言って、舞は全然信じていなかった。

彼は言ったのだ——『必ず戻る。それまで、おとなしく待つように』と。

「アルが戻るって言ったんだから、ゼツタイ迎えに来るに決まっているじゃない！」

舞はあえて大きな声で言った。

誰に聞かせるつもりじゃない。ただ、自分の心にちらちら顔を出してくる弱気の虫を、思い切り叩き伏せたかっただけだ。

そして、長くて苦しい、怒涛の一日が始まる。

まず、文字通り飛行艇で飛んできたのがヤイーシュだった。

シャムスは朝になって事態を聞き、舞のもとに駆けつける。そして顔を見るなり、抱きついて泣きだしてしまう。

「陛下が……陛下が……」

そう口にしたまま言葉にならない。

「シャムス？　ねえ、ちよつと落ち着こうよ」

舞はシャムスを宥めようと声を掛けるが、

「アーイシャ様はどうしてそんなに落ち着いておられるのですっ！」
逆に怒られる始末だ。

「いや、気持ちにはわかるけど……わたしは信じてないから。誰になんと言われても、アルの死体をこの目で見るまで、死んだなんてゼツタイに信じない！」

キッパリと言い切る舞をシャムスは啞然とした顔で見上げている。

そして、シャムスは悲しげに微笑むと、小さく首を振ったのだ。

「アーイシャ様には報告いたしませんでしたが、私の旦那さま……ターヒルさまは反日組織に味方し、暴動を企てた首謀者として指名手配されたのです」

「なっ！？　なんなのよ、それはっ！」

それは、いきなりの出来事だったという。

ターヒルは自身の部下からもたらされた情報に、妻を連れて飛行機で国境沿いの町に移動した。そこで馬を調達。シャムスも気づかぬうちに、ターヒルはラフマーン王国のサディーク王子と連絡を取り合っていたらしい。砂漠の国境を少し越えたところでサディーク王子一行と落ち合った。

そしてターヒルは、シャムスをサディーク王子に預け、自分は首都に戻ったのだった。

「どうして？ 指名手配されてるのに……」

「陛下から、不在中はお両親様とラシード様ご一家をお守りするように、そう言われているから、と」

「ば……」

バカじゃないの？ と言いかけて舞はやめた。

それがターヒルという男なのだ。彼ならきつと、殺されるとわかっていても、ミシユアル国王の命令とあれば戻るだろう。

シャムスは「ターヒルさまもすでに……」そう呟くと、再び泣き崩れた。そんな彼女の背後から、言い辛そうにヤイーシュが口を開き……。

「シャムス殿、気を確かに持って聞いて欲しい。実は昨日の朝、ターヒルが逮捕されたとの一報を受けた。私の判断で、あなたには伝えなかった」

舞の横でシャムスは息を止めた。

そんな彼女に代わって舞が尋ねる。

「ど、どうして？ なんでそんな大事なことを黙ってるのよ！」

「彼女が知ってもできることは何もないからです。ならば……私がターヒルなら、妻に無用な心配は掛けたくない、と思うでしょう」

ヤイーシュの言葉は正しい。

アズウォルドに来てから、シャムスはずっと打ち沈んでいた。ターヒルが心配でならなかったのだろう。そんな彼女が“逮捕”なんて聞いたら、もっと悲しむに決まっている。

ターヒルだってそんなことを望んでいないのはよくわかる。

わかるけど……。

（それが男の理屈だって、なんでわかんないのよっ！）

どれだけ辛くても愛する人が窮地に陥っているのだ。知らないよ、知っていたい。それが女心というものである。

ヤイーシュに怒鳴ってやりたい。

舞はそう思ったが……。主君や盟友の窮地に、一万二千キロも離れた異国の地にいる。しかも深い傷を負って。プラス、きつとヤイーシュにも『正妃を守れ』とか、ミシユアル国王が命令したことは容易に想像がつく。

苦悩に満ちた彼の横顔を見ると、舞は怒鳴るに怒鳴れなくなつた。

「えーっと。でも、それって……逮捕されたからって、すぐにどうこうされるってわけじゃないわよね？」

「もちろんです。通常であれば公正な捜査がなされ、裁判となるはずです。しかし、ヘリ墜落の件といい……。残念ながら、今のクアルン王国の法律は、新しい権力者の手に委ねられていると見るべきでしょう」

「ちよっと待ってよ、ヤイーシュ！ 新しい権力者って……シャムス！」

舞がヤイーシュの言葉に噛み付こうとしたとき、シャムスが床に倒れこんだ。とうとう、神経が持たなかったらしい。

彼女たちが話をしているのは、王宮内の舞に与えられた部屋の一室。

気を利かせて外に待機している女官たちを呼び、シャムスを奥の寝室で寝かせてもらうように頼む。

「私も陛下の死を信じてなどいません。ですが、篡奪者が存在する

ことは紛れもない事実！　ならば、戦うのみです」

ヤイーシュの青い瞳は怒りに燃え、血走っていた。

沈着に見える彼だが、実はかなりホットな性格なのかもしれない。そう思うと、舞はカッと頭に昇っていた血がスーッと下がっていく。

「戦うって。ねえヤイーシュ、ちょっと落ち着き——」

『具体的な策はあるのか？』

舞の言葉を横から奪ったのは、部屋の隅に控えていた笹原公平。

その声を耳にした瞬間、舞はドキンとする。

そんなことを気にしている場合じゃないのだが、彼の声はあまりにもミシユアル国王に似すぎていて、胸が高鳴るのだ。

『まずは陛下の生死を確認せねばなりません。そのためにも、なんとしても国に戻らねば』

『しかし、ヤイーシュ。お前は身分証すらあるまい。帰国するなり、拘束される可能性もある』

「……ねえ、ちょっと、わたしの話も……」

『そのようなこと——我がアル＝バドル一族が黙ってはおりません！　無論、正攻法で入るつもりは』

『ならば私に考えがある。——見よ。これが私の手にある以上、長老会議にも文句は言わせぬ！』

「ちょっと！　人を無視して話さないで……え？」

笹原が取り出したのは——

「それってアルが持ってたジャンビア？　なんで……どうしてあなたが持ってるわけ！？」

それは、ヤイーシュと決闘したときや、元軍務大臣の部下たちに

襲われたとき、ミシユアル国王が手に戦った“王太子の剣”であった。

(17) 解決策は結婚

「書簡に書かれてあったことは二つ。なんとしてもこの国に入り、ヤイーシュと協力して正妃殿下を守るように。そして、レイ国王陛下にお預けした品物を受け取り、クアルン王国の慣例に従え、と」

笹原が淡々と話した内容は、舞にとって『ミシユアル国王の死亡報道』より衝撃を与えた。

まず、ミシユアル国王がレイ国王に預けた品物というのが“王太子の剣”。ハリーファ王家に代々伝わり、次の王に選ばれた者のみ手にすることができる。

舞はこのとき、心臓をギュッと掴まれた気がした。

(弟に王位を譲るってこと？ それって……アルは最初から危険を承知で帰国したわけ？)

でも、笹原が続けた言葉は、舞の想像を二、三段飛び越えた内容だった。

「誓って言うが、私は“王太子の剣”を受け取るつもりはない。これは、彼の息子に引き継ぐためだ」

「は？ 息子って」

「あなたの中に宿っているかも知れない男子に決まっている」
「宿っているかも……って、そんなのわかんないわよっ！」

舞は一瞬で真っ赤になる。

可能性を考えたらゼロという時期じゃない。でも、遅れている、というわけでもない。自覚も症状もまったくくないのに、妊娠を期待

されてもハッキリ言って困る。

「そうであれば望ましいということだ。あなたには直ちに検査を受けていただく。この国で可能ですね？ レイ陛下」

「もちろんだ。しかし……」

舞がハッとして振り向くと、そこにレイ国王とティナがいた。

普段と変わらないレイ国王に比べ、ティナは顔面蒼白であった。ビスクドールのような白い肌が、さらに透けて見えるほど。今にも倒れてしまいそうで、舞のほう心配になる。

「我が国でも検査は可能だ。しかし、この時期の検査で性別まで知るのとは不可能ではないかな？」

レイ国王の言葉に、笹原は答える。

「承知しております。今は、妃殿下のご懐妊を確認することが何より重要。可能性であっても、ご誕生までは男子として推測され、立派な後継王子として認められます。私はなんとしても、アルの息子を次期国王にしなければならぬ！　それが、私の成すべきことですから」

「しかし……」

そこに口を挟んだのはヤイーシュだ。

「……その場合、危険を孕んだクアルン王国に妃殿下をお連れしなくてはなりません。国の医療機関でご懐妊を確認せよと、長老会議のお歴々は求めるでしょう」

「正直者だな、ヤイーシュ」

そう言うとき笹原は片頬を歪めた。

ヤイーシュはムツとしたが、反論は飲み込んだようだ。

笹原はそれを見て、

「妊娠初期にて空路での帰国は難しい。次期国王の命を危険に晒すつもりか——そう言えば、あの連中も黙るだろう」

「なるほど！ さすがアーデル様」

妙に感心した風情のヤーシューに、舞はイラツとする。
彼女が口を開こうとしたそのとき――。

「貴方がたは、失礼だとは思わないのですか!？」

男たちを前に叫んだのはティナだった。

「マイ……いえ、アーイシャ様が悲しみを堪えて、こうして気丈に振舞っていらっしゃいますのに。まだ、確かな情報が届いたわけでもないんですよ！ それなのに、次期国王だなんて……」

涙ぐみながらも、怒りに満ちた声である。

だが、どうやらこの笹原は神経の太さもミシユアル国王と似たり寄ったりらしい。

「失礼ですが……正妃殿下より、王后陛下のほうがお心が乱れている様子」

「だから、なんです？」

「これは国家の一大事なのです。恐れながら、王后陛下には別室にてご休憩いただいたほうが……」

「一大事なら尚のこと！ 大事なお体であるアーイシャ様のお心に、負担をかけないように気づかうのが臣下の務めではありませんか？ 貴方がたはご自分の名誉と立場ばかり気になさって、妃殿下を敬っていないではないのっ？ 恥を知らない！」

これにはさすがの笹原も口を噤んだ。

その態度に舞は少しビックリする。これがもしミシユアル国王なら、『それがどうした!』と言い返すだろう。でも、笹原は言わない。きっと、彼の中にはクアルン王国の王子としての使命と、日本人としての思いが交錯しているのだろう。

次に口を開いたのはレイ国王だった。

「確かに。こういった席にアーイシャ殿を立ち会わせるのは、いささか早計ではないかな？ 一日や二日、時間を空けて然るべきだ。ティナ、アーイシャ殿を奥の部屋に案内するよう」

レイ国王の言葉にティナはうなずき、鼻を嚙りながら舞の肩にそっと手を置いた。

「……行きましょう、マイ」

ティナは優しい。

彼女ならきつと、ショックでしばらく何も考えたくない、と思うのだろう。でも、舞は違った。

「……ティナ……ありがとう。ごめんなさい……」

舞は肩に添えられたティナの手を外すと、笹原に向き直る。

「わたしの気持ちを言う前に、ひとつ聞いておきたいんだけど――。『クアルン王国の慣例に従う』って、いったいどういう意味？」
舞は打ちのめされた表情は一切見せず、胸を張り、顔を上げて彼に尋ねた。

「それは……」

「人前で言えないようなこと？」

舞の言葉に棘があると思ったのだろう。笹原も真っ直ぐ舞をみつめて答える。

「そんなことはない。――アルの死が動かしがたい事実だと長老会議が認め、あなたの懷妊が判明した場合、私はあなたと結婚する」

その発言にはヤイーシュ以外の全員が息を飲んだ。

未亡人になった兄弟の妻を引き受けるというのは、王室に限ったことではない。クアルン王国内ではよくある話だった。

残された妻に子供がない場合、妻は実家に帰されることが多い。例外は戻る家がない場合。そのときは、夫の独身の兄弟が娶るか、新しい嫁ぎ先を探してやるのが慣例となっている。

だが、子供がいる場合は変わってくる。

クアルン王国において、男子は妻の子供ではなく、夫の一族の子供として扱われる。妻が婚家を離れる場合は、連れて出することは叶わない。女子はその限りではないが、立場が王女であれば……連れて出することはまず不可能だろう。

今回の場合、結婚年数も浅いことから、子供がいなければ舞は日本に帰される可能性が高い。

一方、王位だが……。

次男である笹原は王位継承権を放棄し、外国籍を取得している。しかし、クアルン王国の王族に関する法律により、彼は国籍と王子の地位を捨てることはできなかった。そのため、特例により二重国籍が認められている立場だ。放棄は彼の希望であり、法的に復権は可能だった。

とはいえ、現時点で正統なミシユアル国王の後継者は三男ラシード王子だろう。

そこで問題になってくるのが“舞が妊娠しているかも知れない男子”の存在。

正統性を主張するなら、その男子が王位継承順位第一位となる。ラシード王子が未婚なら、彼が兄の正妃を娶り、王位を継承する。そして、男子が生まれたらその子が次の王位に、女子であったら、ラシード王子と舞の間に男子が生まれるのを待つ。ということになるのだが……。

ラシード王子にはライラという第一夫人がいる。前王の正妃を第

二夫人として娶ることは許されない。舞には同じ地位を与えなくてはいけないからだ。ライラと離婚し、新たに王として必要な正妃を娶る、という形になるが……反日感情を煽り、問題が大きくなることは火を見るより明らかだった。

きつとミシユアル国王も同じことを考え、笹原に白羽の矢を立てたのだろう。

独身の彼ならたいした面倒もなく、舞を第一夫人にできる。彼自身が王位に就くもよし。摂政の立場で舞と息子を支え、やがて、息子が王位継承可能な年齢に達したと判断されたら、速やかに譲り渡すであろうと信頼したに違いない。

そして笹原も兄の期待に応えようと――

「非常に不本意だが……。こうなった以上、私はアルの願いを叶えるために全力を尽くすつもりだ。あなたもそのおつもりで」

しかし次の瞬間、舞の堪忍袋の緒はブチンと切れた。

(17) 解決策は結婚(後書き)

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

先日はアンケートにご協力いただきまして、ありがとうございました。

結果はこちらからご覧いただけます⇒<http://enquiry.ker.com/efcSUR>

引き続きよろしくお願い致します(^^)／

(18) 勇気をほんの少し

いい加減、本人を無視して話を進めようとする彼らに向かい、舞は、ダン！と足を踏み鳴らした。腰に手を置き、胸を張って男たちを見回す。

「お断りよ！ 妊娠しててもしてなくても、男だろうが女だろうが、わたしはあなたと結婚なんてしません！ わたしの夫はアルだけなんだからっ。お疲れ様でした。ニューヨークでも東京でも、あなたのいる場所に帰ってちょうだい！」

舞の返答にさすがの笹原もムツとしたらしい。

「大きな口を叩くが、私が駆けつけなければ、あなたはダーウードに殺されていたのではないか？」

「だったら何？ アルが戻ってくるって言ったんだから、絶対に戻ってくる。わたしに何かあったら、ぜーんぶ、アルのせいなんだからねっ！」

「そのアルの頼みで私はここにいるんだぞ」

笹原はミシユアル国王と同じ琥珀色の瞳で舞を見下ろした。

声は似ている。瞳の色も同じだ。でも、ミシユアル国王とは明らかに違う。

ミシユアル国王にみつめられると、吸い込まれるように囚われ、無意識のうちに言いなりになってしまう。でも、笹原の瞳にその不思議な力はなかった。

(きっとそれが“恋”なんだろうな……)

舞はあらためて笹原を見上げ、迷いを振り切るように言う。

「だから、あなたがアルの頼みでわたしを守るっていうなら、“守らせてあげる”。でも、決めるのはわたしよ！ はっきり言っておくわ。アルは死んでないから、あなたと結婚するようなことにはありません！ それと、アルが戻ってくるまで妊娠の検査も受けないから。以上！」

舞の宣言に笹原をはじめ、レイ国王やティナまで息を飲んでいる。そんな中、ヤイーシュが恐る恐るといった感じで口を開いた。

「アーイシャ様。検査は早めに受けられてもよろしいのでは？ 陛下がご無事なら、そのことをお知りになられたら喜ばれると思うのですが……」

「受けないわ。戻ってからでも充分なもの」

キッパリと言い切る舞を見て、何を言っても無駄だと悟ったのだろう。ヤイーシュはそれ以上何も言わなかった。

しかし、ヤイーシュと入れ替わるように笹原は我に返り、口を開いた。

「なんて強情なんだ。あなたは自分の置かれた立場がわかっているのか？」

「知らないわよ！ 勝手に話を進めてるのはそっちでしょ？ だったらわかるように説明してよ！」

それはそれで尤もだ、と思ったのかもしれない。笹原はゆっくりと説明しはじめた。

舞は正式な婚姻を終え、日本の国籍を抜けて、一旦ラフマーン国籍となり、現在はクアルン国籍になっている。……はずだった。

だが、ラフマーンのスルタンとのやり取りはすべてミシユアル国王あつてのこと。それにはサディーク王子の立ち位置も大きく関わ

っていた。

サディーク王子は……早く言ってしまえば、ラフマーンの王室で一番権力を持たない王子なのだ。王太子の次男、そして二十七歳という年齢。普通なら何らかの地位を与えられ、政治的権力を有する年齢である。しかし、彼は個人的な理由から一切の肩書きを持たず、国政にもなんら関わっていない。しかも、このままいくと来年には王子の身分すら奪われる寸前であった。

そうになると、余計に舞の立場は微妙だ。

ミシユアル国王がいなくなれば、正妃としての資格なし、と判断されかねない状況で……。

「いいわよ。クアルン国籍を認めないっていうなら、もう一度日本に戻るから」

舞はそう返したが……。

笹原は大げさなほど、深いため息をついた。

「事はそう簡単にはいかない。国際的には王妃の立場にあるあなたを、日本が受け入れるかどうかは微妙だ。思い出してくれ、母上の希望やアルの思いはさておき、日本側があなたとクアルン王国の王子との婚約を薦めた理由がなんだったか」

舞はハツとした。

たしか『産油国であるクアルンと友好条約を結ぶ必要があった』とか『国際問題』とか、ミシユアル国王が舞を迎えに来たとき、父が口にしていた気がする。もう何年も前に思えるが、三カ月も経っていないことに驚きだ。

「そして、あなたが懐妊していたら……事態はさらにややこしいことになる」

最悪、子供がいなければ表向きは円満に解決ができるという。

舞が正妃の立場を主張してクアルンに残ろうとすれば別だが、おそらく婚姻を取り消して日本に帰国、ということになるだろう、笹

原はそう語った。

問題は懐妊していた場合である。

婚姻を無効にしても、国王の男子であれば母親の身分に関わらず後継者となってしまう。ようするに、舞から正妃の身分を奪っても無駄なのだ。ミシユアル国王が外国人女性に生ませた息子であっても、王子は王子。

と、なると……舞の懐妊が判明したら、まず命が狙われることは間違いない。しかも、女子が生まれても将来的にどんな形で利用されるかわからないので、執拗に狙われ続けるだろう。

さらには、他国の内政干渉を望まないため、舞と子供がクアルン国外に出ることは認められない。おそらく、日本をはじめ諸外国は原油問題でクアルンとの軋轢を避けようと、舞と子供が存在を無視するだろう、と。

舞が妊娠していたら、日本にも戻れず、どの国も受け入れてくれず、クアルンの王宮にも居場所はない。という、まさに大ピンチであった。

「――その前に、先手を打ってあなたの立場を明確にする必要がある。子供がいなければ、日本で日常生活が送れるように。懐妊が明らかになれば、アルの子供のために全力を尽くそうと。どうしてそれが理解できない！」

笹原の言いたいことはわかった。彼が兄のために自由を放棄してクアルンに戻る覚悟をしていることも。

だが……。

「助けてくれたことは感謝してる。でも、落ちつくのはそっちじゃないの？」

「何？」

「何回も言うんだけど、アルは死んでない。そりゃ、わたしが襲われることを心配してあなたを寄越してくれたんだろうけど……。」

“王太子の剣”だって保険みたいなもんだと思う。アルは裏を搔かれたり、騙されたり、そう簡単に罠にはまるような人じゃないわよ」
笹原は啞然として舞を見ている。

先手必勝も結構だが、急いては事を仕損ずるともいう。

ミシユアル国王はどんな不利な条件だって乗り越えて誓いを守ってくれた。これまで、さんざん先走っては余計に迷惑をかけてきた気がする。

（だから今度は……アルを信じる。無駄に悲しんだり、怒ったり、動き回ったりしない！）

舞は心を決めるとレイ国王を振り返った。

「わたしがここに居ることで、アズウォルドに迷惑をかけるなら、出て行きます」

すると笹原は初めて声を荒げた。

「何を馬鹿なっ！ この国を出て、ひとりでどこに行こうと言うんだ！ 日本にも……」

「ちよつと、うるさいってば！ わたし独りくらいどうとでもなるんだから」

「コソコソ隠れ住むつもりか！？ それこそ、アルはそんなことを……」

「笹原さんて非公式にこの国に来てるんだよね？ クアルンの第二王子ってのは、自分で返上してるって聞いたけど」

舞の質問に笹原は怪訝そうな顔で答える。

「ああ、そうだが。それがいったい……」

「だったら、この場でわたしに命令できる人っていないはずよね？」

舞は国賓。レイ国王やティナとは対等な立場である。退去の要請はできるが、命令はできなかった。

ましてや、パスポート上はただの日本国民にすぎない笹原や、キ
ヤラハン名義で不法入国中のヤイーシュが、一国の王妃である舞に
命令するなどんでもないことだ。

黙り込む笹原を尻目に、舞は言葉を繋ぐ。

「レイ国王陛下。お許しただけるなら、わたしはセルリアン島に
戻り、アルが迎えに来るのを待ちたいと思います」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6540u/>

紺碧の海 金色の砂漠

2011年11月14日13時19分発行